福岡市西区

国史跡
野方遺跡
環境整備報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第313集

1992

福岡市教育委員会

国史跡

野方遺跡環境整備報告書

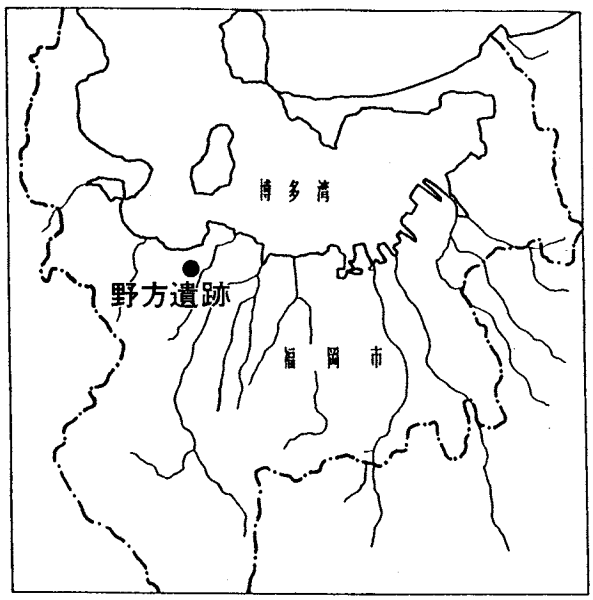
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第313集

正　誤　表

ページ	行	誤	正
V	13	野方遺跡環境整備実施設計平面図	野方遺跡環境整備実施設計計画平面図
Ⅵ	4	PL.１１ 環境整備公開施設工	PL.１１ 環境整備完成写真（南西から）
		PL.１２ 環境整備全景	PL.１２ 復原住居（南西から）
PL.6		石錘遺物番号01002	石錘遺物番号10002
PL.6		磨石遺物番号01003	磨石遺物番号10003

福岡市西区
国史跡
野方遺跡
環境整備報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第313集



野方遺跡第２次調査
調査略号　ＮＫＮ－２
調査番号　８６３０
　　７３０４

１９９２

福岡市教育委員会

巻頭写真　野方確認調査全景
　　野方覆屋内展示遺構

序

福岡市西区大字野方字中原に所在する国史跡「野方遺跡」は昭和48年に住宅地造成中に発見されました。発掘調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構が確認されました。特に弥生時代後期には、大小２つの環濠を巡らし、大きい環濠からは竪穴式住居址が検出され、小さな環濠からは高床倉庫が２棟発見されました。

古墳時代前期からは竪穴式住居址が100軒以上発見されています。遺跡の北西部に墓域があり、お墓には中国製の鏡、勾玉、管玉、刀子などの貴重な遺物を副葬していました。これら遺構の集中している21,166㎡を昭和50年６月27日に国の史跡指定を受け、永く後世の人々に伝えることとなりました。

国庫補助事業として昭和61年度から平成３年度の６ヶ年計画で文化庁・福岡県教育委員会のご指導のもとに史跡環境整備事業を行うことができました。

整備の主体は、弥生時代後期の環濠集落で、住居址に履屋をかけ、本物の遺構と復原した２つの環濠、復原住居を見学出来る様にしました。

今回報告します環境整備報告書は文化庁・奈良国立文化財研究所・福岡県教育委員会のご指導のもとに作成いたしました。野方遺跡が地域の皆様ならびに市民の各位の文化財保護のご理解を深められる上で広く活用されると共に，本書が学術研究・史跡整備の分野においても貢献出来れば幸いです。

最後に用地取得に快く承諾していただいた福岡県労住協を始めとして地元住民の皆様や発掘調査から環境整備事業にいたるまで多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表するものです。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　　言

1．本書は福岡市西区野方に所在する国指定史跡『野方遺跡』の環境整備及び遺構確認調査の整備報告書である。遺構確認並びに環境整備は国庫補助事業により昭和61年度より平成3年度までの6ヶ年事業で、文化庁・福岡県文化課・奈良国立文化財研究所の指導・助言をもとに整備を行った野方遺跡環境整備報告書である。

2．事業は国庫補助事業で、福岡市教育委員会文化財部文化財整備課（機構改革により平成3年度に文化部文化課が文化財部文化財整備課に組織、名称変更）が実施した。

3．本書は野方遺跡環境整備基本計画、基本設計、実施設計をもとに作成した。また、遺構確認調査は埋蔵文化財課が行った。調査及び遺構の実測は二宮忠司、佐藤一郎、吉武学が担当し、調査・整理補助として田中稿二（明治大学学生、現佐賀県大和町教育委員会）、大庭友子、加藤元信、山村信栄が調査・整備事業に参加した。製図は大庭が行なった。

4．写真撮影は現場写真を二宮、佐藤、田中、大庭が行ない、遺物写真は二宮、大庭が行い、写真現像、焼付けは木村絹子、桑野正子、石津満寿美、森千賀子、浜田登志枝がこれに当たった。

5．本書の執筆は野方遺跡環境整備基本計画をもとに二宮が行なった。

6．本書執筆の内、鉄器の挿図・原稿を大庭康時にお願いした。また、鉄器の保存処理を埋蔵文化財センターの杉山富雄、本田光子、岡本ゆり子にお願いした。

7．本書の編集は二宮が行なった。

8．本報告書に関する記録・遺物類は整理後、福市教埋文センターに収蔵・保管される。

9．土器・石器・鉄器・木器の挿図内番号は登録番号を示す。

遺跡調査番号	7304、8630	遺跡略号	NKN 1･2次	調査期間	1986年（昭和61年）
調査地地籍	福岡市西区大字野方字中原他		分布地図番号	93-A-2	
整備面積	21,000㎡	遺構確認対象面積	5,750㎡	調査面積	3,200㎡

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
1．遺跡の位置と概要 …… 1
2．発掘調査から環境整備に至る経過 …… 2
3．発掘調査及び環境整備の組織と構成 …… 4
第Ⅱ章　確認調査 …… 7
1．調査の概要 …… 7
2．検出遺構 …… 14
弥生時代後期の竪穴式住居址 …… 14
ＳＣ－18 …… 14
ＳＣ－21 …… 15
ＳＣ－23 …… 15
ＳＣ－103 …… 15
ＳＣ－107 …… 15
ＳＣ－115 …… 16
ＳＣ－54 …… 16
その他の住居址の調査 …… 16
SD－02 が巡るＢ環濠の調査 …… 17
土層 …… 20
3．土器 …… 25
4．石器 …… 27
5．鉄器 …… 27
第Ⅲ章　野方遺跡基本計画 …… 43
1．計画の前提 …… 45
2．基本計画 …… 53
第Ⅳ章　野方遺跡基本設計図 …… 58
第Ⅴ章　実施設計図 …… 70
第Ⅵ章　覆屋建設について、復原住居 …… 84
第Ⅶ章　都市整備局の環境整備 …… 91

挿図目次

第１図　野方遺跡位置図（縮尺1/25,000）…… Ⅷ

第２図　野方遺跡と周辺の遺跡（縮尺1/8,000）…… 8

第３図　昭和48年度、野方遺跡遺構配置図（縮尺1/2,000）…… 9

第４図　野方遺跡地形図（縮尺1/2,000）…… 10

第５図　昭和61年度、野方遺跡遺構配置図（縮尺1/1,500）…… 11

第６図　Ａ区遺構配置図（縮尺1/500）…… 12

第７図　Ｂ区遺構配置図（縮尺1/250）…… 13

第８図　Ａ区竪穴式住居址（ＳＣ-18）遺構実測図（縮尺1/80）…… 17

第９図　Ａ区竪穴式住居址（ＳＣ-21）遺構実測図（縮尺1/80）…… 18

第10図　Ａ区竪穴式住居址（ＳＣ-23）遺構実測図（縮尺1/80）…… 19

第11図　Ａ区竪穴式住居址（ＳＣ-107）遺構実測図（縮尺1/80）…… 20

第12図　Ａ区竪穴式住居址（ＳＣ-54、103）遺構実測図（縮尺1/80）…… 21

第13図　Ａ区竪穴式住居址（ＳＣ-115）遺構実測図（縮尺1/80）…… 22

第14図　Ｂ区掘立柱建物（ＳＢ-02、06）遺構実測図（縮尺1/80）…… 23

第15図　Ａ、Ｂ区環濠土層実測図（縮尺1/80）…… 24

第16図　出土土器実測図－１（縮尺1/4）…… 28

第17図　出土土器実測図－２（縮尺1/4）…… 29

第18図　出土土器・石器実測図－３（縮尺1/4）…… 30

第19図　出土土器・石器実測図－４（縮尺1/4）…… 31

第20図　出土土器実測図－５（縮尺1/4）…… 32

第21図　出土土器実測図－６（縮尺1/4）…… 33

第22図　出土土器・石器実測図－７（縮尺1/4）…… 34

第23図　出土土器実測図－８（縮尺1/4）…… 35

第24図　出土土器実測図－９（縮尺1/4）…… 36

第25図　出土土器実測図－10（縮尺1/4）…… 37

第26図　出土土器実測図－11（縮尺1/4）…… 38

第27図　出土石器・鉄器実測図（縮尺1/3、1/4）…… 39

第28図　出土鉄器実測図（縮尺1/2、1/3）…… 40
第29図　野方遺跡環境整備基本設計平面図（縮尺約1/1,000）…… 59
第30図　野方遺跡環境整備基本設計排水計画図（縮尺約1/1,000）…… 60
第31図　野方遺跡環境整備電気・水道配管平面図（縮尺約1/1,000）…… 61
第32図　野方遺跡環境整備基本設計施設割付図（縮尺約1/1,000）…… 62
第33図　野方遺跡環境整備基本設計覆屋・便所図（縮尺約1/50）…… 63
第34図　野方遺跡環境整備基本設計縦断断面割付図（縮尺約1/1,000）…… 64
第35図　野方遺跡環境整備基本設計縦断断面図（縮尺約1/50）…… 65
第36図　基本設計復原住居、高床式倉庫平面図（縮尺約1/1,000）…… 66
第37図　野方遺跡環境整備実施設計施設割付図（縮尺約1/1,000）…… 67
第38図　野方遺跡環境整備実施設計植栽配置図（縮尺約1/1,000）…… 68
第39図　野方遺跡環境整備実施設計詳細図（縮尺約1/30、1/50、1/200）…… 69
第40図　野方遺跡環境整備実施設計平面図（縮尺約1/1,000）…… 71
第41図　野方遺跡環境整備実施設計施設割付図（縮尺約1/1,000）…… 72
第42図　野方遺跡環境整備実施設計施設配置図（縮尺約1/1,000）…… 73
第43図　野方遺跡環境整備実施設計排水計画図（縮尺約1/1,000）…… 74
第44図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址標準断面図（縮尺約1/50）…… 75
第45図　野方遺跡環境整備実施設計詳細図（縮尺約1/50）…… 76
第46図　野方遺跡環境整備実施設計全域植栽配置図（縮尺約1/1,000）…… 77
第47図　野方遺跡環境整備実施設計詳細図（縮尺約1/50）…… 78
第48図　野方遺跡環境整備実施設計詳細図（縮尺約1/50）…… 79
第49図　野方遺跡環境整備実施設計標石図（縮尺約1/16）…… 80
第50図　野方遺跡覆屋候補地遺構実測図（縮尺約1/40）…… 81
第51図　野方遺跡覆屋平面図（縮尺約1/380）…… 82
第52図　野方遺跡覆屋展示平面図（縮尺約1/50）…… 83
第53図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址平面図（縮尺約1/80）…… 85
第54図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址平面図（縮尺約1/80）…… 86
第55図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址屋根伏図（縮尺約1/80）…… 87
第56図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址立面図（縮尺約1/80）…… 88
第57図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居立面図（縮尺約1/80）…… 89
第58図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居平面・小屋伏図（縮尺約1/80）…… 90
第59図　都市整備局環境整備実施設計平面図（縮尺約1/1,000）…… 92

第60図　都市整備局環境整備実施設計造成図（縮尺約1/1,000）…… 93
第61図　都市整備局環境整備実施設計配置図（縮尺約1/1,000）…… 94
第62図　都市整備局環境整備実施設計断面図（縮尺約1/1,000）…… 95
第63図　都市整備局実施設計便所平面図・立面図（縮尺約1/200、1/300）…… 96

表目次

Tab. 1　野方遺跡出土鉄器一覧 …… 42

図 版 目 次

巻頭写真　野方遺跡確認調査全景
野方遺跡覆屋内展示遺構

ＰＬ．１　１ 環境整備公開施設工　２ 環境整備全景
３ 遺跡全景空中写真(西から)　４ Ａ区全景(西から)　５ Ｂ区全景(西から)
６ Ａ区住居址(南から))

ＰＬ．２　１ ＳＣ－18近景(南から)　２ ＳＣ－23近景(東から)　３ ＳＣ－21近景(南から)
４ ＳＣ－86近景(南から)　５ ＳＣ－79近景(南から)　６ ＳＣ－103近景(南から)

ＰＬ．３　１ Ｂ区掘立柱建物ＳＢ－02・06近景(南から)　２ Ｂ区溝断面(南から)
３ ＳＣ－115近景(南から)　４ Ａ区溝断面(南から)
５ ＳＣ－115炉跡と遺物出土状態(北から)

ＰＬ．４　１ 環境整備植栽工事(東から)　２ 環境整備環濠・木橋工事(北から)
３ 平面表示住居址(北から)　４ 環境整備植栽・張芝工事(西から)
５ 環境整備園路広場工(西から)　６ 総合説明板(北から)
７ 環境整備修景工(北から)　８ 環境整備導入部分工事(西から)

ＰＬ．５　１ 環境整備工事全景(北から)　２ 環境整備工事近景(西から)
３ 環境整備工事全景(南西から)　４ 覆屋全景(北から)
５ 覆屋内住居址ＳＣ－54・115(南から)　６ 覆屋階段・スロープ(北から)
７ 遺物展示とビデオ説明(西から)　８ 展示パネル(南東から)

ＰＬ．６　弥生時代後期住居址内出土遺物(縮尺1/3・1/6)

ＰＬ．７　弥生時代後期住居址内出土遺物(縮尺1/3・1/6)

ＰＬ．８　弥生時代後期住居址内出土遺物(縮尺1/3・1/6)

ＰＬ．９　弥生時代後期住居址内出土遺物(縮尺1/3・1/6)

ＰＬ．10　野方遺跡出土鉄器(縮尺1/3・1/6)

VIII　　**第1図**　野方遺跡位置図（縮尺1/25,000）

第Ⅰ章　はじめに

1．遺跡の位置と概要

・所 在 地　福岡市西区野方５丁目11－25

・指定月日　昭和50年６月27日

・指定面積　21,166㎡

遺跡の立地と環境

背振山から派生した山麓が福岡平野・早良平野・糸島平野を三分する。福岡と早良平野は油山山麓により、早良と糸島平野は飯盛山・叶岳・長垂山により分断されている。

野方遺跡は、叶岳の東側裾野に広がる花崗岩バイラン土による扇状地の一角にある。扇状地は南から北に向かって傾斜し、東西は谷部となる。東側には叶岳から源を発した十郎川が遺跡の東を流れながら北上し博多湾にそそぐ。遺跡は古代の官道であった広石峠の出入口に位置し、標高15～26ｍの扇状地にあり、南北600ｍ、東西200ｍの南北に細長い丘陵に位置している。

この周辺には、弥生時代前期末の甕棺墓から細形銅剣を出土した野方久保遺跡や弥生時代後期の木製品を多量に出土した湯納遺跡、拾六町ツイジ遺跡がある。

遺跡の概要

遺跡は1973年（昭和48年）に住宅地造成工事中に発見され、確認調査の結果、弥生時代後期から古墳時代中期にかけて遺構が確認された。遺構が集中している中央部の約21,166㎡について1975年（昭和50年）６月に国の史跡に指定された。

弥生時代の遺構は、大小２つの環濠と竪穴式住居址・掘立柱建物を検出した。

Ａ溝　南北100ｍ、東西120ｍの楕円形を呈するが、東側は十郎川に達し、環濠とはならない。十郎川との比高差は６ｍである。溝内の確認調査を1986年（昭和61年）に行った。その結果、約120軒の竪穴住居址を確認した。このうち溝と同時期（弥生時代後期後半）の住居址を８軒検出した。この他には後期終末の住居址が12軒、古墳時代前期の住居址が100軒ほど確認した。溝の中からは後期後半の土器・石器・鉄器が多量に出土した。この他サメ、タイ、スズキ等の魚類の骨や貝類・鳥類・獣骨等も出土している。

Ｂ溝　Ａ溝より70ｍ西に位置し、東側に開口する。25ｍ×30ｍの規模を持ち、内部に掘立柱建物２棟を検出した。溝も掘立柱建物の弥生時代後期後半の時期で、Ａ溝と同時期である。

古墳時代の住居址は500軒以上確認されており大規模な集落が形成されていた。また、扇状地の北西端部に箱式石棺が集中して確認されており、集落と墓域が区別されていたことが判明

している。箱式石棺墓の中には、中国の舶載鏡・勾玉・管玉・素環頭刀子・鉄刀などの貴重な遺物を副葬した首長墓的石棺墓も検出した。

環境整備事業

国庫補助事業を受けて昭和61年度から平成３年度の６ヶ年計画で環境整備を行っている。整備の主体としたものは、弥生時代後期である。弥生時代後期の住居址と古墳時代前期の住居址に覆屋をかけ、本物の住居址を見学し、外で復原した大小２つの溝・復原住居２棟（平面表示・骨組み・完全復原）の流れを一つのテーマとして整備を行った。又、周辺の植栽も花粉分析により弥生時代の植生とした。

覆屋によって遺構そのものを見学出来るシステムは、従来の平面表示や復原住居等で見せるよりも本物の遺構を直に見れる点で多くの成果を上げられると考えている。

覆屋内の遺構や土器にカビが発生したが、しだいに乾燥している。これは周辺部に排水管を設置し、遺構に水が浸透しないようにし、カビの発生をふせいだ。

奈良国立文化財研究所の指導のもとに遺構保存処理薬品イソシアネート系合成樹脂（サンコールＳＫ－50・サンコールＳＫ－50シンナー）を平成２年２月５日より２月10日まで、第２回を平成２年２月26日より３月２日まで散布し遺構の強化保存に努めた。

整備面積18,771㎡の内、9,500㎡を都市整備局に依頼した。1990年（平成２年）から整備に着手し、1991年度（平成３年度）に終了する。

整備は1986年（昭和61年）から遺構確認調査、敷地造成を開始し、88年には460㎡の覆屋建設、1991年（平成３年）４月に覆屋の仮オープン、平成４年３月にはすべて完成する。

見学者は、小学校生・中学校生をはじめ遺跡見学会・婦人会・観光客が主体である。道標を設置し、遺跡までの導入を昨年度から開始した。

２．発掘調査から環境整備に至る経過

野方遺跡の発見は、昭和45年、福岡第一高校史学部の学生３名によるものである。昭和48年４月に造成工事で遺跡が破壊され、大量の遺物が出てきていることが、市歴史資料館へ通報があり、知らせを受けた文化課は即刻工事中止を申し入れ、施主側（福岡県労働者住宅生活協同組合）と協議し、２週間の試掘調査（６万㎡余）で本調査の範囲を決定することを取り付けた。

試掘調査の結果は、(1)200軒を上まわる住居址の発見と溝状遺構を伴う大規模集落の存在が推定される。(2)甕棺から箱式石棺への墓制の変遷をたどることができ、(3)溝・住居址・墓域から検出された大部分の遺物は弥生時代から古墳時代にかけての時期に集中している。これは、弥生時期から古墳時期にかけての過度期的段階における単位集団の諸要素をセットとして把えることのできる重要な遺跡である。(1)３地点で検出された溝の関係を明らかにする。

(2)溝と住居址、住居址と墓域の関係を追求する。(3)墓域の広がりを追求する。以上を目的として各地点の遺構プランの検出に努めた。その結果、国の史跡指定を受けることができた。

文化庁、福岡県教育委員会と協議をかさね、昭和61年度より国庫補助事業として、環境整備を実施することとなった。整備の方針で弥生時代後期の環濠集落を整備の柱とし、大小２つの環濠内の確認調査を実施し、弥生時代後期の住居址を検出することに努めた。調査の中で住居址の依存が非常に良く、協議の結果覆屋を建て本物の住居址・平面住居址・復原住居（骨組・完全復原住居址）とする一つの流れをテーマとして、文化庁・福岡県教育委員会と協議を重ね、基本的に了承をいただき基本計画・設計へと進めた。

指定地の取得

昭和49年度に用地取得を行い国庫の補助を受け、これに要した事業費は357,308千円である。

覆屋の構造

・覆屋建築面積　鉄骨造平屋建　460㎡

・覆屋建設費　69,256千円

・構造

遺構を傷つけることがないように設計を依頼し、遺構面より約0.3ｍ上から建築するように指示する。基礎を強化するために箱型とした。

昭和48年度の認識調査で50ｍグリットの試掘溝を利用して暗渠を作り、周辺の地下水が覆屋に入らないようにくふうした。

展示方法

野方遺跡の覆屋は住居址を展示するが、金隈遺跡の甕棺墓のようにそれ自体で見学者を圧倒するものではない。文化庁・奈良国立文化財研究所・福岡県教育委員会等の指導により、入館した時点から古代の生活様式を実観できるような照明、展示が必要との指示を受けた。

より効果的に遺構を説明するためには、映像・音響・照明による説明等を考えなければ野方遺跡の場合、見学者に理解を得ることは非常に難しいと考える。このことから５つの展示計画を考えている。

１．住居址を実物、平面、復原の三つの構成で見せる。

２．遺構の切り合いの関係の表示。

３．出土遺物の相違。

４．住居址の形態変遷。

５．映像、照明等により演出効果。

3．発掘調査及び環境整備の組織と構成

第１次発掘調査（1973・74年〔昭和48・49年〕の調査）

各種の遺構・遺物の出土や調査研究に備え関連諸科学の分野から次の先生方を調査指導員として委託した。

― 調査指導員 ―（敬称略）

鏡山　猛　　森　貞次郎　　岡崎　敬　　太田　静六　　土田　充義　　山本　輝雄
沢村　仁　　永井　昌文　　高島　良正　　坂田　武彦　　山内　豊聡　　浦田　英夫
細川　隆英　　永松　土己　　大村　武　　和田　光史　　日野　尚志　　畑中　健一
藤原　宏志　　藤井　功

調査主体　福岡市教育委員会
発掘調査　福岡市教育委員会文化課
事務担当　三宅　安吉　福田　征一
発掘担当　文化課技術吏員　調査員
本調査　柳田　純孝　折尾　学　塩屋　勝利　島津　嘉昭　柳沢　一男
資料整理　柳田　島津

第２次遺構確認調査（1986年〔昭和61年〕の調査）

調査主体　福岡市教育委員会
確認調査　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
事務担当　柳田　岡嶋　洋一
確認調査　二宮　忠司　佐藤　一郎　吉武　学
調査補助員　田中　稿二　加藤　元信　大庭　友子
資料整理　二宮　大庭
地元協力者　榊　光雄　牛尾　豊　尾崎達也　太田孝房　鬼丸邦宏　広田義美
真名子時雄　三苫宗澄　結城弥澄
有吉貞江　池　弘子　伊藤みどり　上原チヨ子　牛尾秋子　牛尾シキヨ
尾崎八重　大内文恵　金子ヨシ子　菊池栄子　倉光ナツ子　白坂フサヲ
正崎由須子　柴田シズノ　柴田タエ子　清水文代　末松信子　杉村文子
惣慶とみ子　多田映子　田中タヅ子　津田和子　典略　初　富永純子

西嶋和子　西嶋タミエ　西嶋初子　西納テル子　西納トシエ　能美八重子
野坂三重子　原　早苗　平田政子　平野ミサヲ　藤野ふじ子　古井モモコ
藤　タケ　細川ミサヲ　真鍋チエ子　松本愛子　松本マサ子　松本フジ子
松本トシエ　真名子ゆきえ　山西人美　山本チエ子　山下サノエ　結城シズ
結城信子　結城千賀子　吉岡員代　吉岡タヤ子　吉岡蓮枝　吉岡竹子
吉竹早苗　吉積ミエ子　脇山美代子　脇坂ミサヲ

整理作業　青柳　恵子　飯田千恵子　牛尾美保子　太田頼子　尾崎京子　亀井律子
北島藤子　斎藤美紀枝　清水優子　平田ミサ子　日名子節子　内山孝子
藤崎洋子　真名子順子　渡辺ちず子　京塚ハツミ　海内美也子　木村絹子
森千賀子　浜田登志枝　石津満寿美　桑野正子

環境整備事業

指導《大学》

森　貞次郎（九州産業大学教授）　岡 崎　敬（九州大学教授）
横山　浩一（九州大学教授）　西 谷　正（九州大学教授）

《文化庁》

牛川　喜幸（記念物課主任文化財調査官）
安原　啓示（記念物課主任文化財調査官）
田中　哲雄（記念物課主任文化財調査官）
加藤　允彦（記念物課文化財調査官）

《奈良国立文化財研究所》

坪井　清足（前所長）　鈴木　嘉吉（所長）
田中　　啄（埋蔵文化財センター長）
沢田　正昭（埋蔵文化財センター遺物処理研究室長）
肥塚　隆保（埋蔵文化財センター遺物処理研究）
高瀬　要一（埋蔵文化財センター修景研究室長）
宮本長二郎（埋蔵文化財センター建造物研究室長）

福岡県教育委員会

石松好雄課長補佐　宮小路賀宏課長補佐　浜田信也係長　磯村幸男技術主査

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎（前任）　井口雄哉

教育次長　尾花　剛（前任）　河野清一

部長　河野清一（前任）　花田兎一

課長　生田征生（前任）　折尾　学

係長　折尾　学（前任）　飛高憲雄

事務　岸田　隆（前任）　中山昭則　寺崎幸男　吉田麻由美

文化課長　於保清澄（前任）　山田隆光

管理係長　高橋久徴（前任）　岩下拓二

事務　緒方裕之　福松丈寛　谷口哲也

学芸職　三木隆行

主査　二宮忠司（史跡整備担当）

文化財整備課長　後藤　直

係長　後藤晴一

主査　力武卓治（史跡整備担当）

事務　菅原善則　寺崎博文　栗原智子

第Ⅱ章　確 認 調 査

1．調査の概要

昭和48年の確認調査の結果にとして

(1)　200軒を上まわる住居址の発見と溝状遺構を伴なう大規模集落の存在が推定された。

(2)　甕棺から箱式石棺への墓制の変遷をたどることができる。

(3)　溝・住居址・墓城から検出された大部分の遺物は弥生時代から古墳時代へかけての時期に集中している。

以上のことから

①　3地点で検出された溝の関係を明らかにする。

②　溝と住居址と墓城の関係を追求する。

③　墓城の広がりを追求する。

の問題点が提出された。

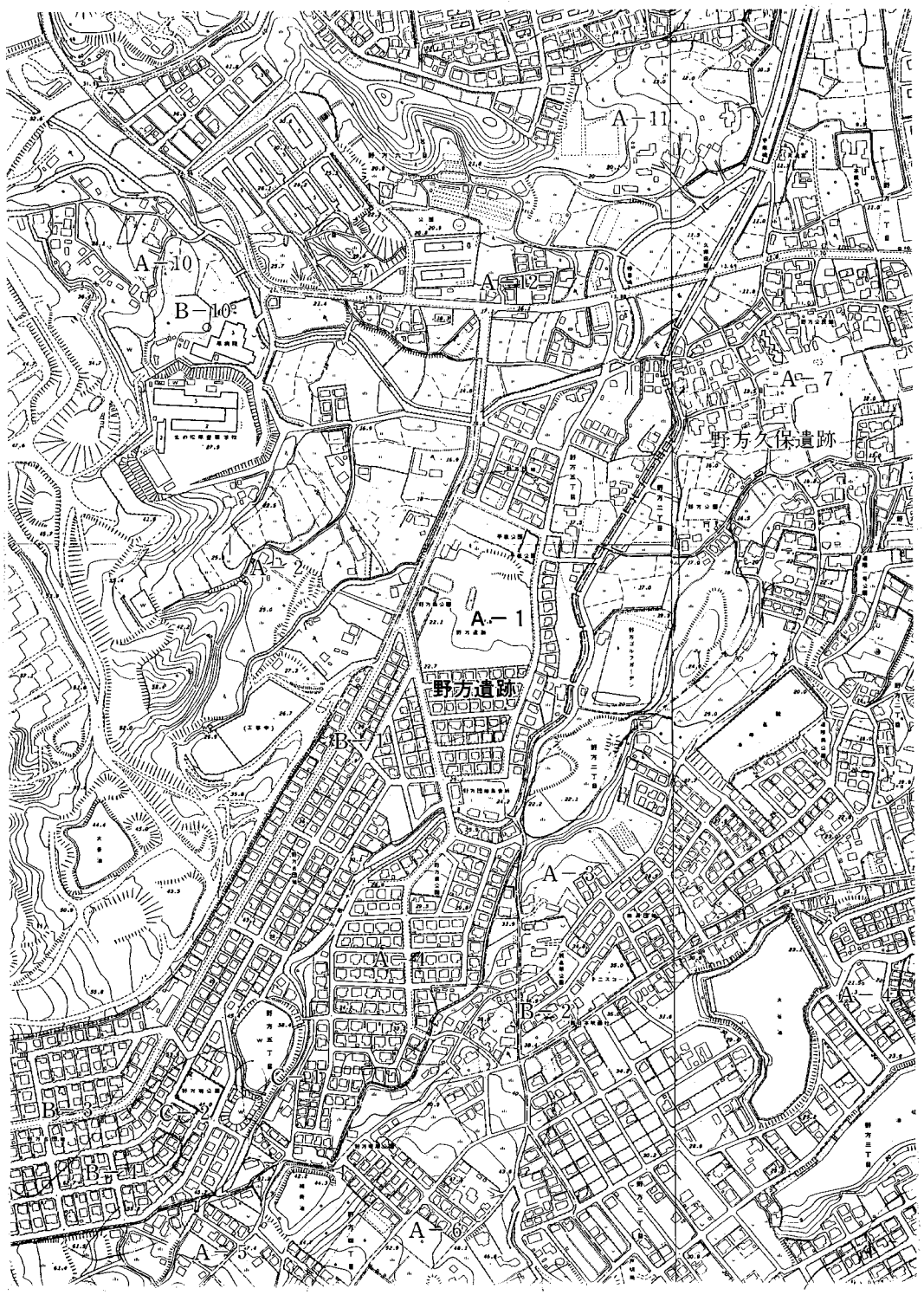
昭和61年度からの環濠整備事業の中で、昭和48年からの調査で明らかになった点、不明な点について協議を行ない、整備の基本テーマについて部内で協議を持ち、弥生時代後期の環濠集落をメインテーマに選出した。しかしながら2つの環濠内部の遺構のあり方についてはまったく明らかにされておらず、確認調査を行う必要性がある点を文化庁に申請し、承諾をえて、昭和61年7月1日から同年12月28日の5ヶ月間をかけA溝、B溝内の遺構の確認調査（6,570㎡）を実施した。

遺構確認調査は弥生時代後期の環濠と同時期の住居址・掘立柱建物等を検出することで全面を調査することなく、住居址の場合は幅50㎝のトレンチを設定し、建物の確認を行い古墳時代の住居址等はその時点で調査を終了し、切り合いの関係のあるものについては切られている遺構についての調査を実施した。弥生時代後期の住居址については完掘し、平面表示・復原住居のデーターを蓄積した。また覆屋建設の候補地の選定も合せて行なった。

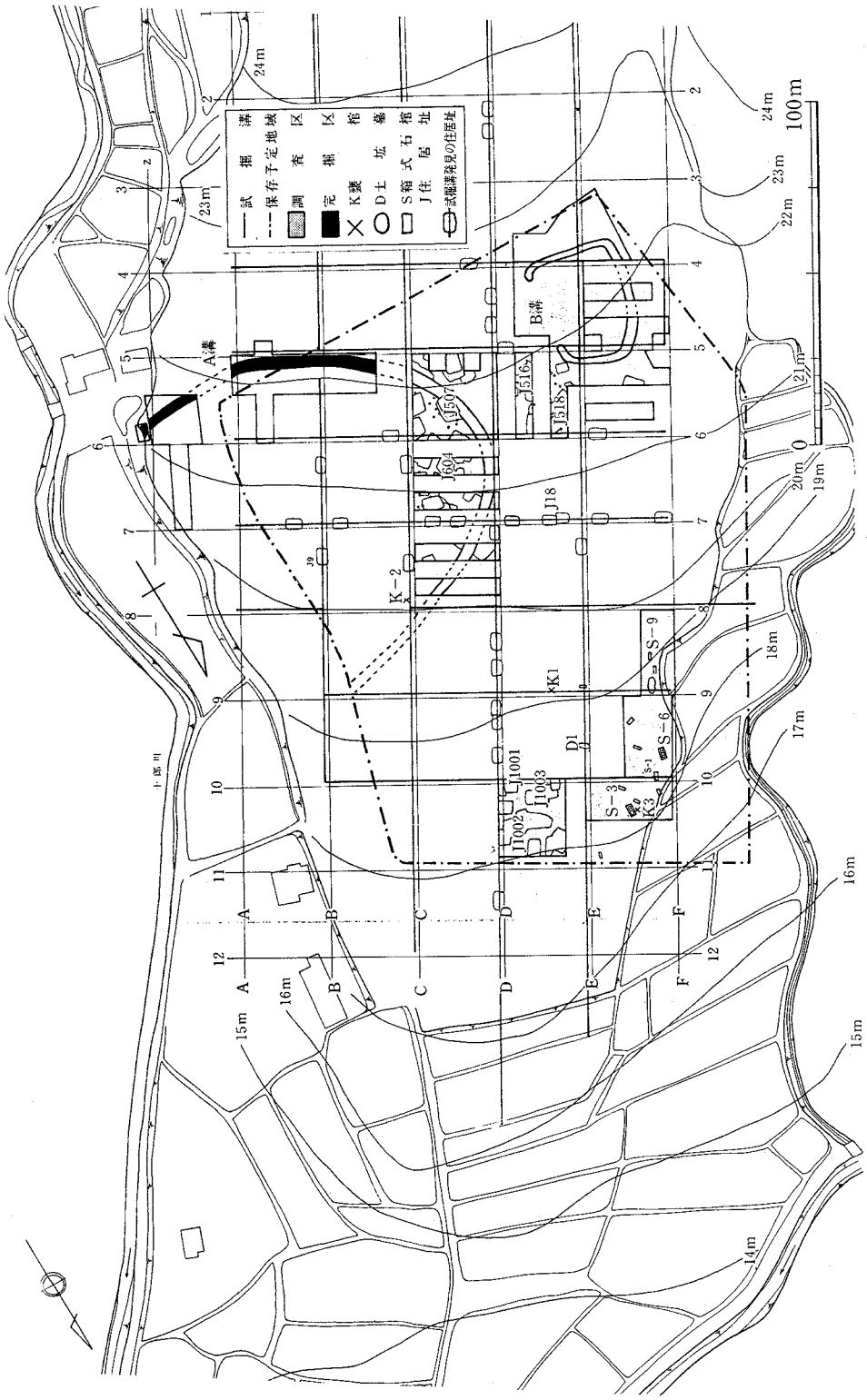
A溝．遺構上面の確認調査を行ない、昭和48年度の試掘時の断面清掃にとどめた。

B溝．A溝と同様に遺構上面の確認調査を行ない、試掘時の断面清掃にとどめ、一部土層剝取りを行なう。

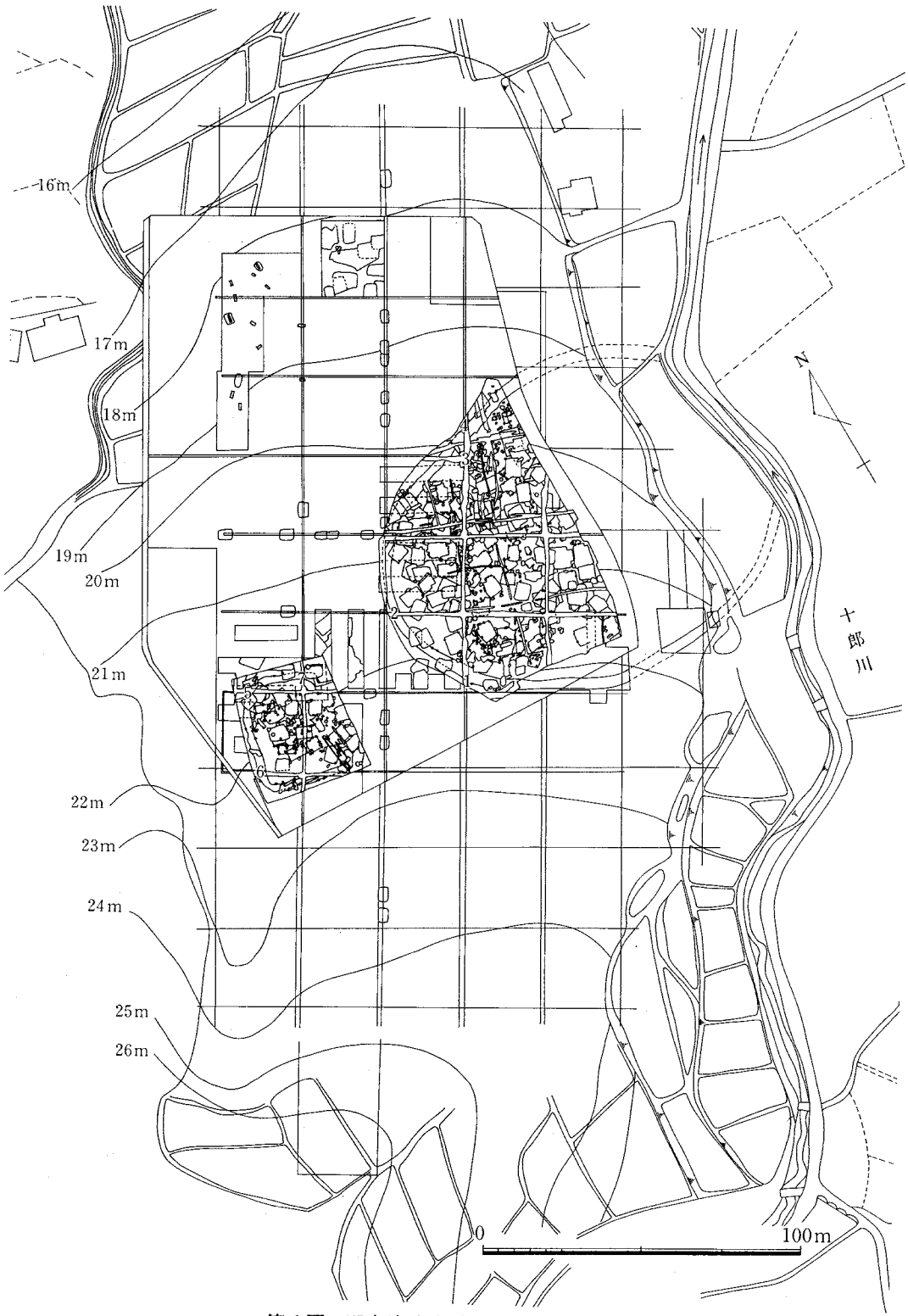
A溝内住居址　弥生時代後期住居址16軒の内、溝と同時期の8軒を整備対象とし、全面調査を行ない出土遺物の復原を行なっている。



第2図　野方遺跡と周辺の遺跡（縮尺1/8,000）

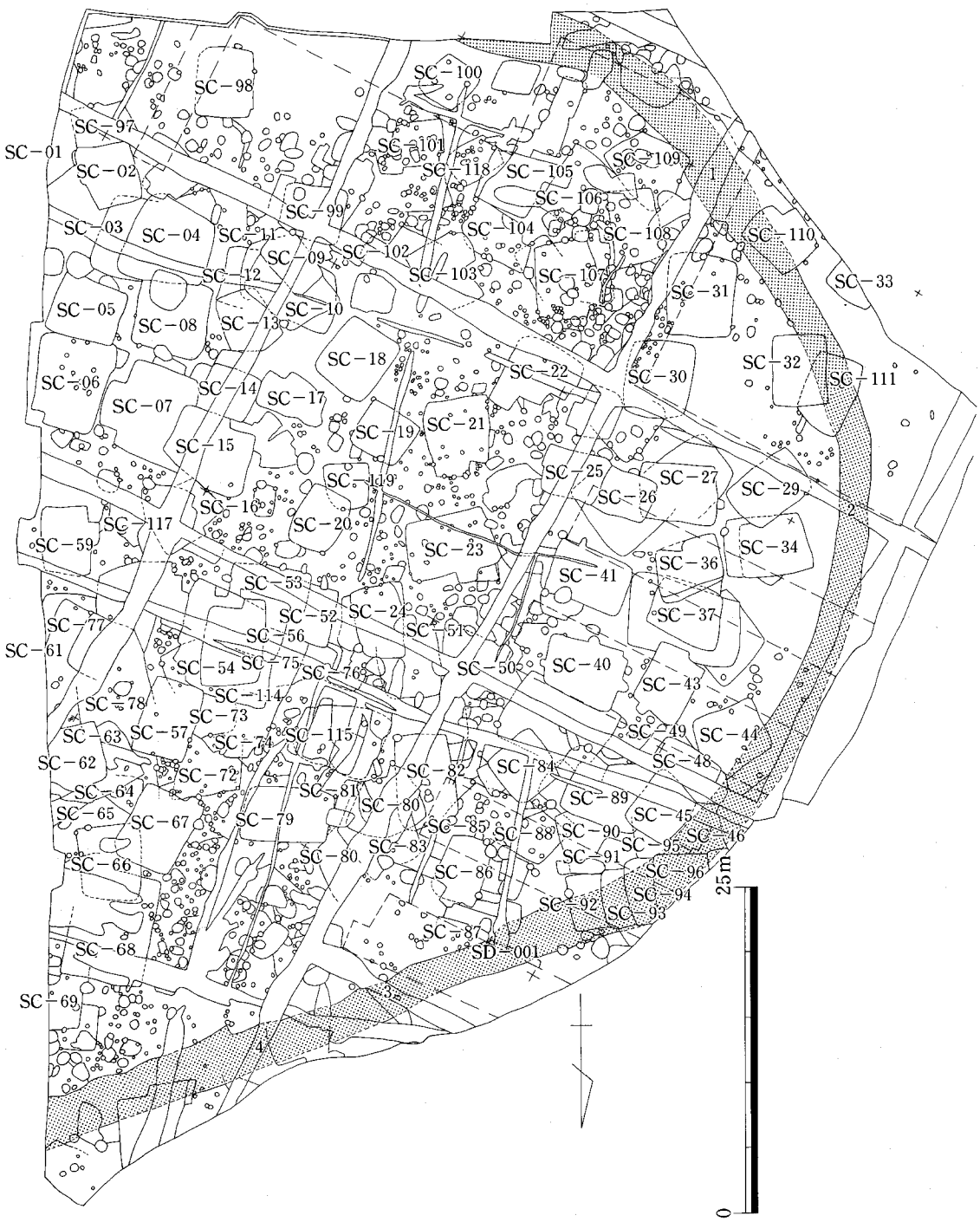


第3図　昭和48年度　野方遺跡遺構配置図（縮尺1/2,000）



第4図　野方遺跡地形図（縮尺1/2,000）

第5図　昭和61年度，野方遺跡遺構配置図（縮尺1/1,500）



第6図　A区遺構配置図（縮尺1/500）

第７図　Ｂ区遺構配置図（縮尺1/250）

B溝内遺構　B溝と同時期の遺構検出につとめたが、住居址はすべて古墳時代前期のものであった。大型の柱穴を半割して調査した結果、弥生時代後期の掘立柱3棟を検出したが内1棟は終末期に属するもので、B溝と同時期のものはSB－02・06の2棟のみであった。

2．検出遺構

A溝（SD－001）第15図に示す1～4がA溝の断面図である。A溝は、48年度の調査で十郎川に達しており、溝が十郎川で終結するのか、十郎川の氾濫で消滅しているのかは定かではない。しかしながら現時点でのA溝内面積は5,446㎡を計る。現在十郎川から西に50m、約2,875㎡は未調査のまま住宅地となっているが、この部分にも弥生時代後期後半の住居址が存在していたことは明らかで、その消滅がおしまれてしかたがない。

A溝は西側の中央部が浅く、幅2.55m、深さ0.5mを測り、北側と南側部分に次第に深さをます。

溝の底面の絶対高は、断面2部分が20.13m、南側が20m、北側が18.61mである。

住居址の遺存度から考えて、削平はほとんど受けていない。

A溝内住居址は弥生時代後期後半から古墳時代前期の時期に比定され、古墳時代中期以降の住居址は検出されていない。古墳時代前期の住居址はSC－54を1軒調査しただけであるが数多くの土器・石器群がそのままの状態で廃棄されている。これは弥生時代後期の住居址にも同様なことが伺え、また溝内にも多量の土器・石器等を廃棄している。

弥生時代後期の竪穴式住居址

A溝と同時期の住居址を8軒検出した。すべての住居址の外縁部に小さな柱穴を確認し、調査時から注意しながら調査を行なった。これは遺存度が非常に良く、住居址の壁面が60cmから1m程度まで良く残り、ほぼ完全な形で遺構が残っている可能性が高かった点と、近年弥生時代中期住居址等から住居址の外縁に小柱穴が巡るものの例か増加していることで、同様の住居址の可能性を考えたからである。しかるに調査を行っていくうちに小柱穴が斜めに掘りこまれているのではなく、垂直に掘りこまれていることが確認され、これは従来の考え方を変える重要な問題提起である。しかしながら検出する住居址のすべてが同じ状況を呈することから一つの特徴として考えた。多くの類例を待って復原の予定であったが、奈良国立文化財研究所（現文化庁建造物課主任調査官）の宮本長二郎氏に意見を求め、復原住居の図面を提示し了解を受けた。

以上住居址の特徴について述べる。

SC－18（第8図・PL. 2）

中央部よりやや南側に位置し、南北に長軸を持つ。北側にペット状遺構を配し壁面下に壁溝

を配する。中央部に炉址が認められる。この炉址をはさんで大型の掘り方を持つ柱穴があり四隅に柱穴を配する。外縁には22個の柱穴を持つが、深さは両隅と中央部が深く他は非常に浅い。住居址自体は中央部に近いためか、やや削平を受けているものと考察できる。ベット状遺構までの深さ0.3m、床面までは0.46mを測り、長軸5.4m、短軸5.0mで床面積は27㎡、ベット状遺構6.5㎡を測る。遺物は第16図～28図である。

ＳＣ－21（第９図・PL. 2）

中央部のＳＣ－18より西側に位置する。南北に長軸を持ち、南・北両側にベット状遺構を持つ。壁溝はない。中央部に小さな炉址が認められる。柱穴は四隅のベット状遺構に配されたものと、中央部南北に小柱穴２個を配する。外縁の小柱穴は、東西に３個不明な部位があるが他は縁部に配され、ここでも両側と中央部が深く他はやや浅い形状を呈する。遺構自体がやや削平を受けているものの遺構状況は非常によい。住居址は長軸5.5m、短軸4.8mで床面積26.4㎡を測り、両側ベット状遺構の床面積は11.04㎡である。遺物は細片が多く図示できるものは第16図に示したものがすべてである。

ＳＣ－23（第10図・PL. 2）

ＳＣ－21の北側に位置し、長軸が東西方向にある。南側を残し、三方にベット状遺構を配し壁溝を外壁部に巡らせる。床面に６つの柱穴があるが、４本柱と考えられる。炉址は検出しなかった。遺存状態はよく床面までの深さ0.4mを測る。周辺部の外縁柱穴は良く残り、基本的に四隅の柱穴が深い。出土遺物は多量に出土している。床面張付き土器から弥生時代後期の住居址である。長軸6.2m、短軸4.6mで床面積28.5㎡で、ベット状遺構は15.7㎡である。

ＳＣ－103（第12図・PL. 2）

昭和48年度の試掘時に1/4ほど破壊を受けているが、遺構の依存度は非常によい。ＳＣ－18の南側に位置し南側環濠より16m離れ長軸が北西の方向を向き、北西側にベット状遺構を配する長方形プランの住居址である。長軸方向に２個の柱穴を配し、中央部に炉址を持つ。床面内部に壁溝を配し、深さ0.1mである。外縁の小柱穴は良く残っている。長軸5.3m、短軸3.7m、深さ0.45mを測り、床面積19.6㎡、ベット状遺構３㎡を測る。

ＳＣ－107（第11図）

ＳＣ－103の両側で、南環濠から9.5mの位置にある。長軸は南北に位置し、遺構遺存状態は非常によい。北側にベット状遺構を配し、床壁面に壁溝を全面に有し、主柱は東西（桁側）に位置している。炉址は南西部に位置し中央ではない。床面には、この２主柱しか検出できず、この柱の位置では建物の屋根構造が非常に困難であることを指摘された。外縁部には小柱穴があるが西側下位と南北に広い部分がある。出土遺物は、約３個体の甕形土器と多量の細片が出土していることから竪穴住居址であることは間違いない。桁行5.7m、梁行3.8mで深さ0.5m

を測り、ベット状遺構の床面積は4.8㎡である。

ＳＣ－115（第13図・PL. 1・3・5）

覆屋内弥生時代後期の住居址である。長軸は東西方向にあり、東西両側にベット状遺構を配する。西側と北側の一部に切り合い関係を持つものがあるが、これは時期不明である。ただ弥生後期の住居址から切られていることから、この時期より古いことは明らかである。調査区のほぼ中央部に位置するが、環濠復原の位置からは北西側に位置する。南側の住居址に比べ、かなり削平を受けており、復原すると床面までは70㎝程度と考えられる。ベット状遺構の形状が不揃いであるが、壁溝を巡らし、一方が途中から出ているところから立替の可能性も考えられる。中央部に炉址があるが、大型壺形土器の口縁部のみを寄せあつめ、かまどとしている。このかまどは、北側が開く形状を持つことからその部分が、焚口と考えられる。柱穴は南北に2柱穴のみで、他に小柱穴が北西隅と北東にあるのみで、これも梁行方向に柱穴があるＳＣ－107と同じで、屋根構造が特種なものと考えられる。外縁の小柱穴は、両側を除き外縁にそって配列している。

桁行が6.2ｍ、梁行が4.5ｍで、ベット状環構床面積は8.9㎡でそれを除く床面積19㎡である。土器は炉址の東側に1個体、南側主柱穴側に1個体破損して検出されているが、両方ともほぼ1個体の完形（炉址東側土器は底部がない）に近い。この他、南両隅に鉢と石器（砥石）、北側柱穴内より高坏脚部が出土した。

ＳＣ－54（第12図・PL. 1・5）

覆屋内にある古墳時代前期の住居址である。周辺部に弥生時代終末期の住居址ＳＣ－55～57を切った形で検出した。またこの住居址は奈良末～平安時代の溝状遺構によりほぼ中央部を東から西に幅0.6ｍで切られている。南に張出し部分を持つ長方形の形状を呈し、南側にＬ字状のベット状遺構を配し、この部分に多量の土器（約20個体分）が、集中出土した。床面自体にも土器、石器が出土しており、遺物の遺存状況が非常に良い。柱穴はおそらく4本柱（南西部分の柱穴は遺物のため検出出来ていない）である。外縁柱穴は遺構の切り合いのため検出されなかった。遺構の遺存度は比較的よく、深さ0.6ｍほどがある。桁行6.7ｍ、梁行4.7ｍで床面積28.9㎡を測り、ベット状遺構の床面積は10.6㎡を持つ。

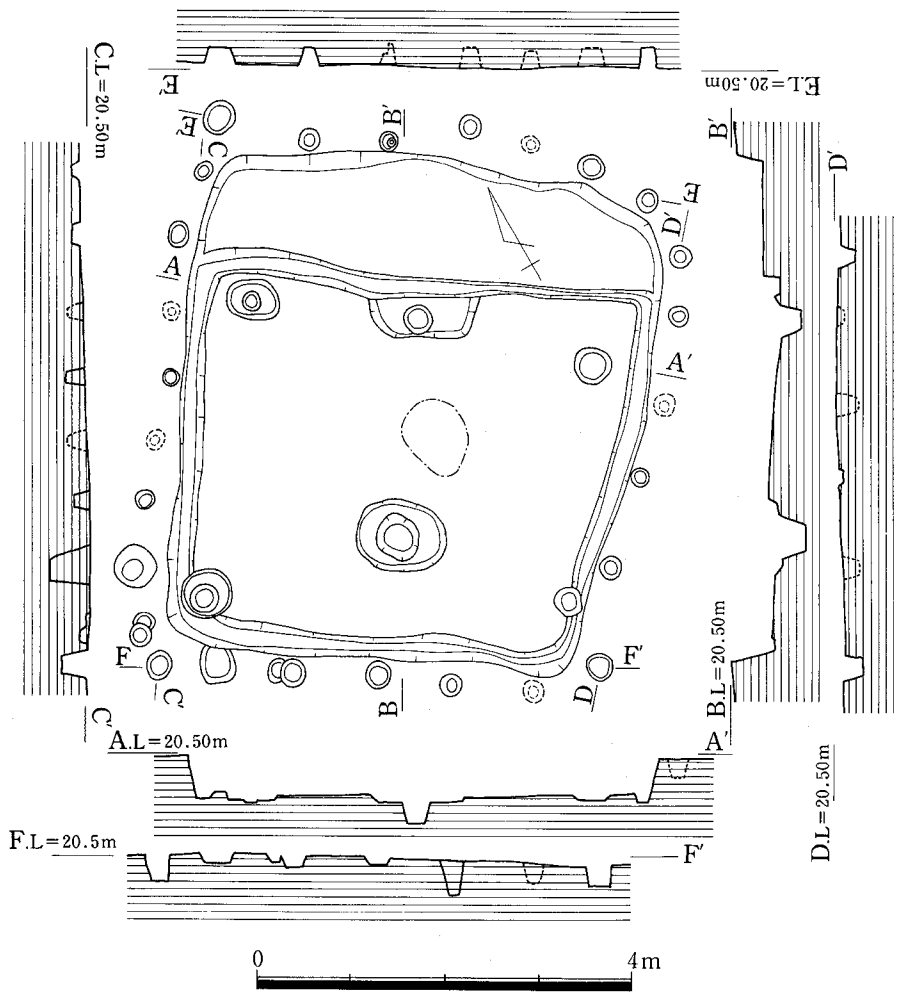
その他の住居址の調査

ＳＤ－001が巡るＡ環濠内に検出された住居址は、146軒である。この内そのほとんどが古墳時代前期の住居址である。完掘した状態ではなく、幅0.5ｍのトレンチを設定し、出土土器からの判断であるため確実性はやや薄い。上記の上げた以外に調査を行なった部分は、石積工事に伴う調査で幅2ｍを東側フェンス沿いに調査を行なった。遺構は調査区の続きで、住居址の端部が検出された。また覆屋建設の場所設置で、ＳＣ－62・63・65・66・67・70を調査した。

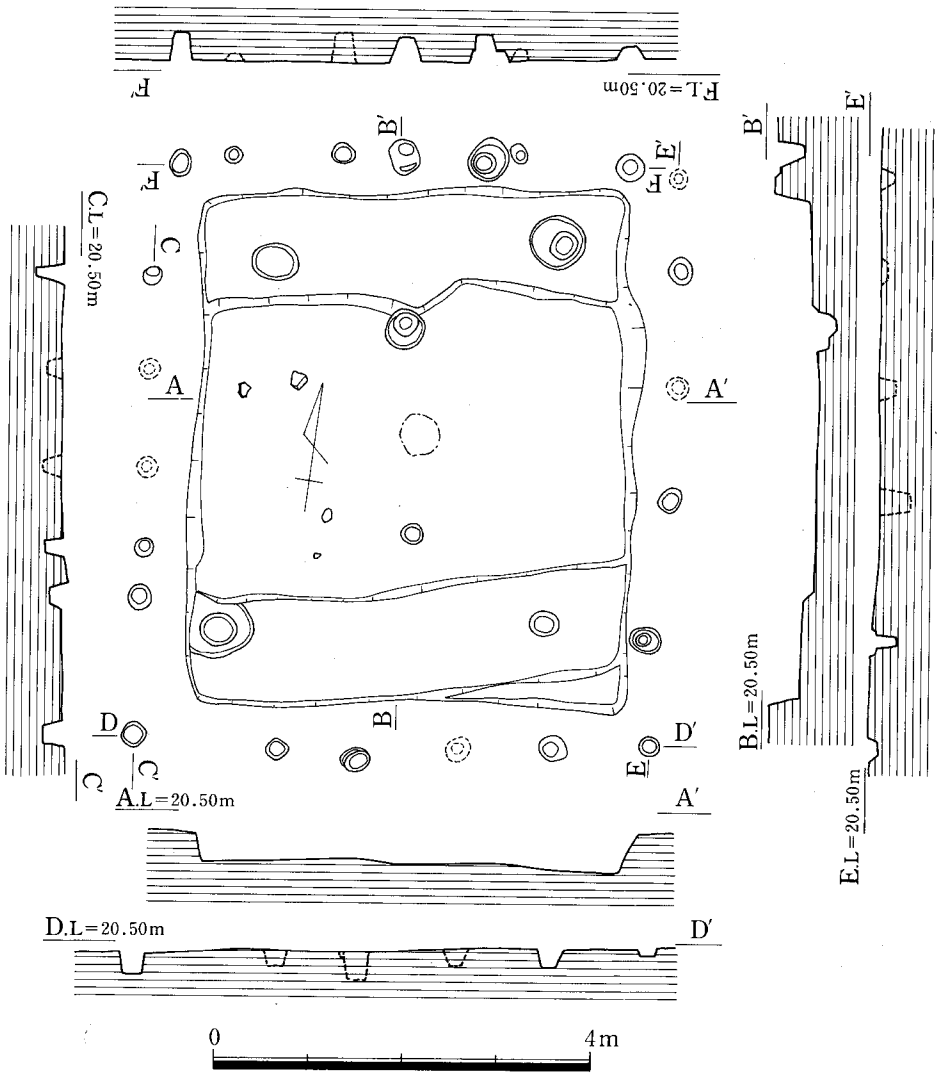
布留併行期がＳＣ－62。庄内併行期がＳＣ－66。庄内から弥生終末期がＳＣ－63・67・70。弥生後期後半がＳＣ－65である。またＳＣ－79・86も弥生時代後期後半の時期と考えられるもので、遺構の遺存状態は非常に良い。この他ＳＣ－07からは、庄内から弥生終期末の土器一括が出土している。予算の都合上割愛しなければならなかったが、機会があれば是非発表したい資料ばかりである。

ＳＤ－002が巡るＢ環濠の調査

Ｂ環濠は、25ｍ×30ｍの規模を有する方形の環濠で、東側間18ｍを開口する。確認調査は、Ｂ環濠が全貌できる40ｍ×33ｍの範囲を調査した。遺構は、住居址23軒・掘立柱建物13棟・溝状遺構４条・土拡状遺構３基等である。竪穴式住居址には、Ａ環濠内確認調査で行った方法と



第８図　Ａ区竪穴式住居址（ＳＣ－18）遺構実測図（縮尺1/80）

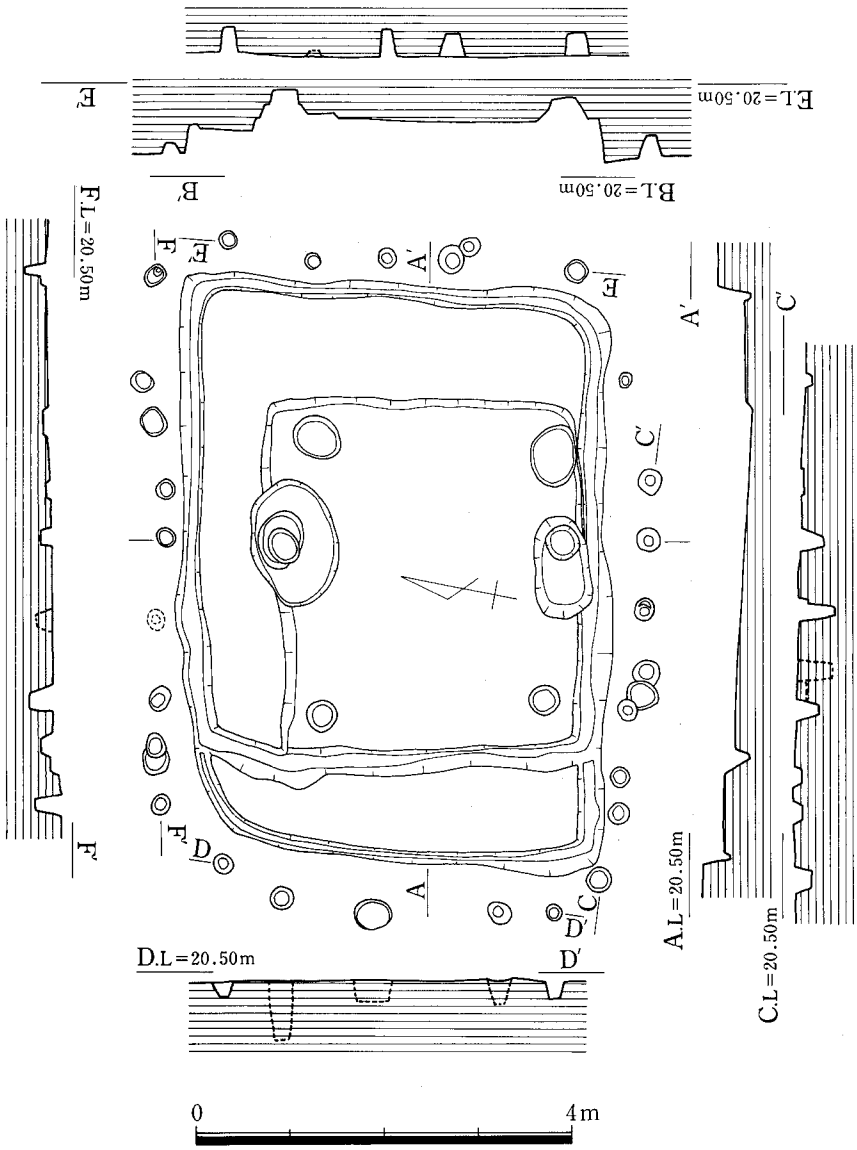


第9図　A区竪穴式住居址（ＳＣ－21）遺構実測図（縮尺1/80）

同じく幅0.5ｍのトレンチを設定し、出土する土器から時期を判別した。掘立柱建物は柱の配列から柱穴を半割し、出土する遺物と柱痕の検出につとめ、出土した遺物から時期を判別する方法をとった。その結果23軒の住居址では、弥生時代終期末から古墳時代前期にかかる時期のものばかりで、ＳＤ－002の時期である弥生時代後期後半の住居址は認められなかった。

掘立柱建物13棟の調査の結果、ＳＢ－02・ＳＢ－06の２棟だけが弥生後期後半の時期に比定でき、他は古墳時代前期の遺物出土である。

ＳＢ－02（第14図）

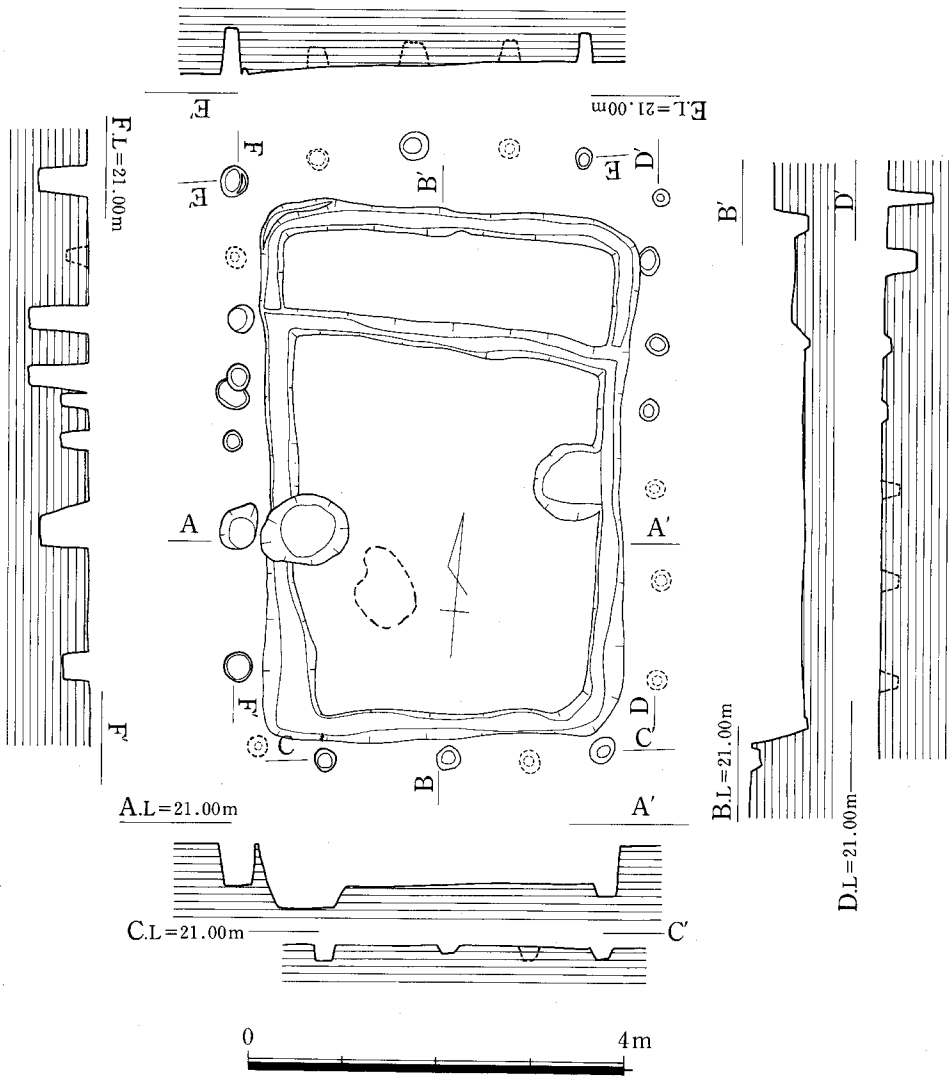


第10図　A区竪穴式住居址（ＳＣ－23）遺構実測図（縮尺1/80）

１×２間掘立柱建物で、柱穴が他の古墳時代のものより大きい。桁行６ｍで梁行が3.6ｍのもので、１つを除いて２つの柱痕跡を有する。

ＳＢ－06（第14図）

１×１間の掘立柱建物である。柱穴の大きさがＳＢ－02と同じである。桁行４ｍ、梁行3.1ｍで、環濠内のほぼ中央に位置する。ＳＢ－02は東西の棟を持ち、ＳＢ－06は南北に棟を有する。



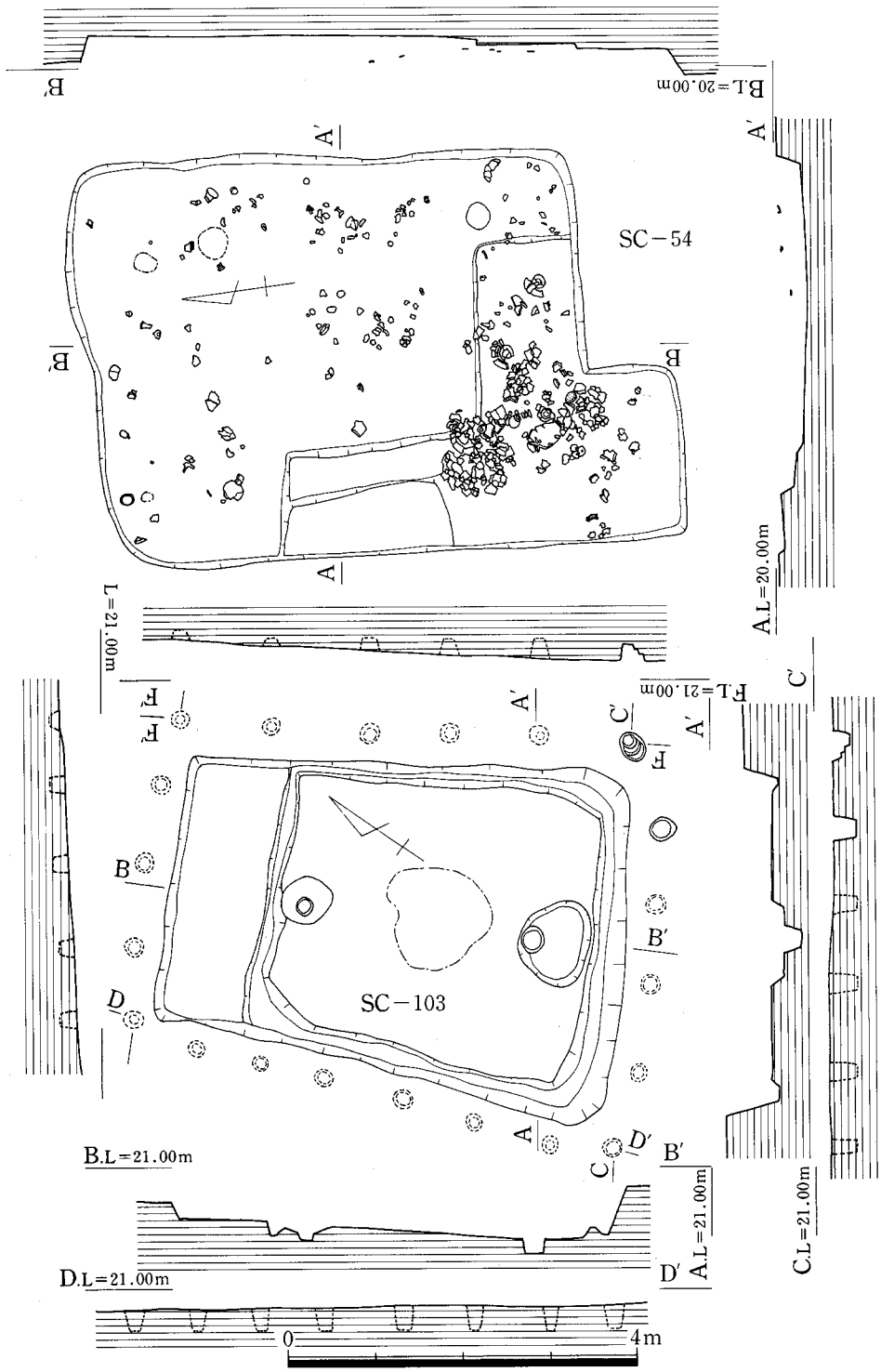
第11図　A区竪穴式住居址（ＳＣ－107）遺構実測図（縮尺1/80）

ＳＤ－001・ＳＤ－002の調査

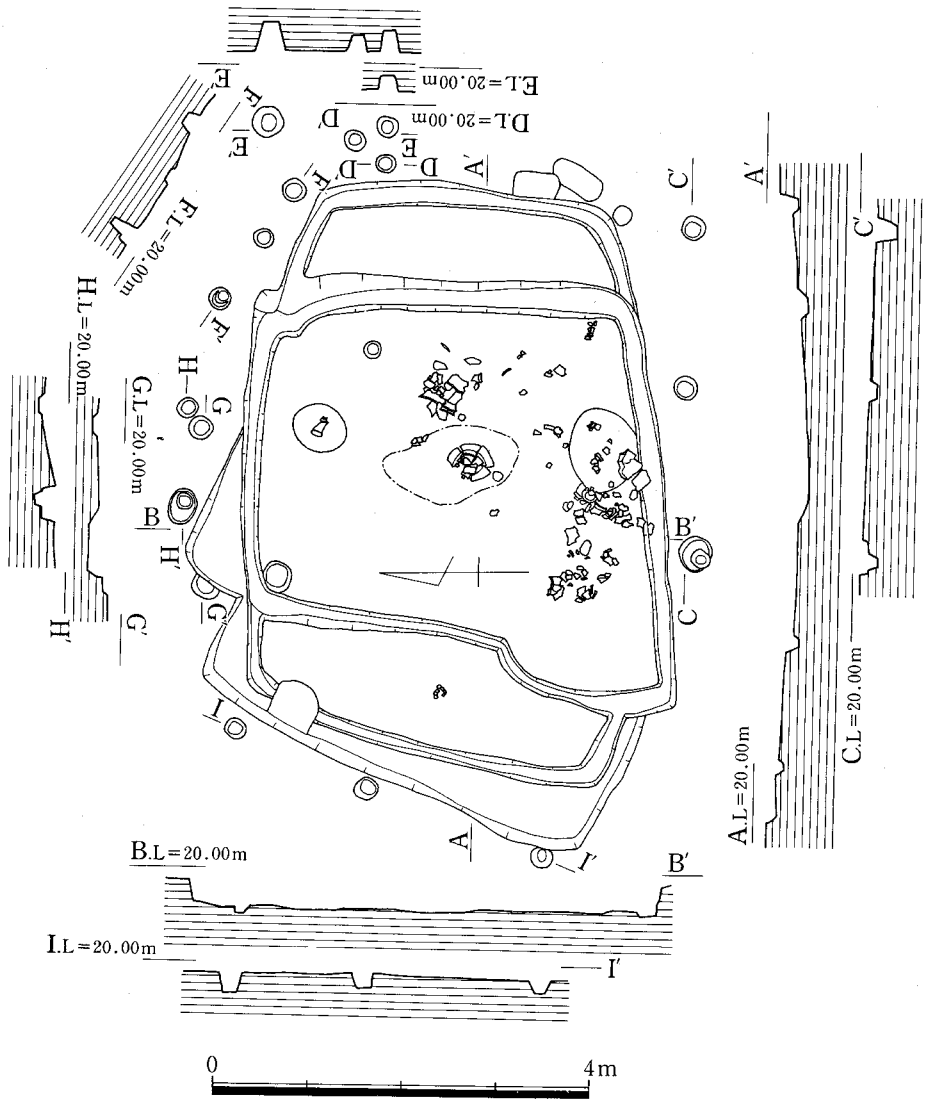
ＳＤ－001は48年の試掘調査の断面清掃程度で終了した。５ヶ所で確認し、一部破壊される石積部分を調査した。断面底部の標高を上げて見ると、断面図１が20ｍ、断面２が西側に位置する部分で標高が20.13ｍ、断面３が北西部のトレンチで標高18.82ｍ、断面４が北側で標高18.61ｍを測る。この結果から断面２を境界として両側に低くなり、十郎川付近ではかなり深くなるものと考えられる。

土　層（第15図・PL. 3）

ＳＤ－001の１断面、Ⅰ層…暗褐色土・Ⅱ層…暗茶褐色土・Ⅲ層…茶褐色土、Ⅳ層…暗茶褐色

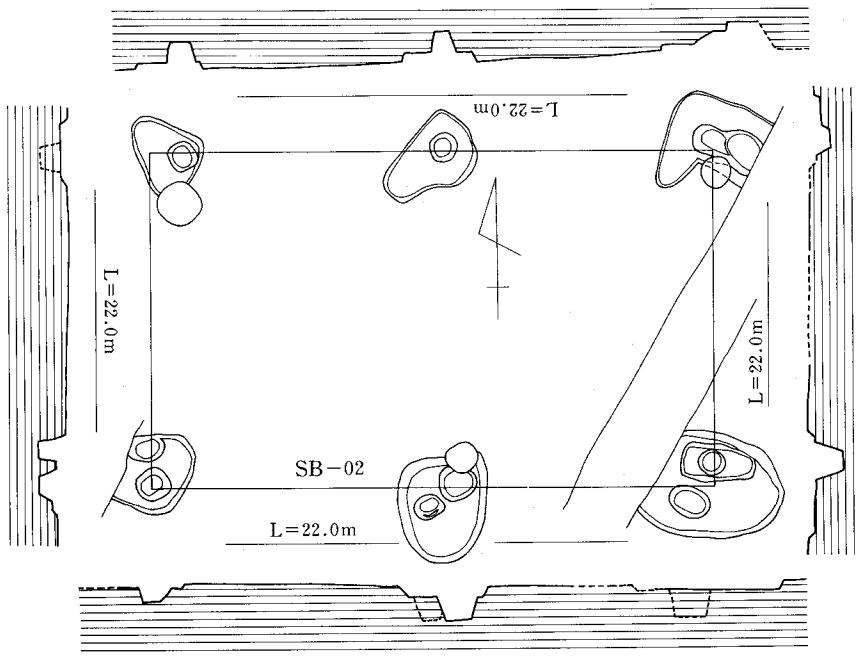


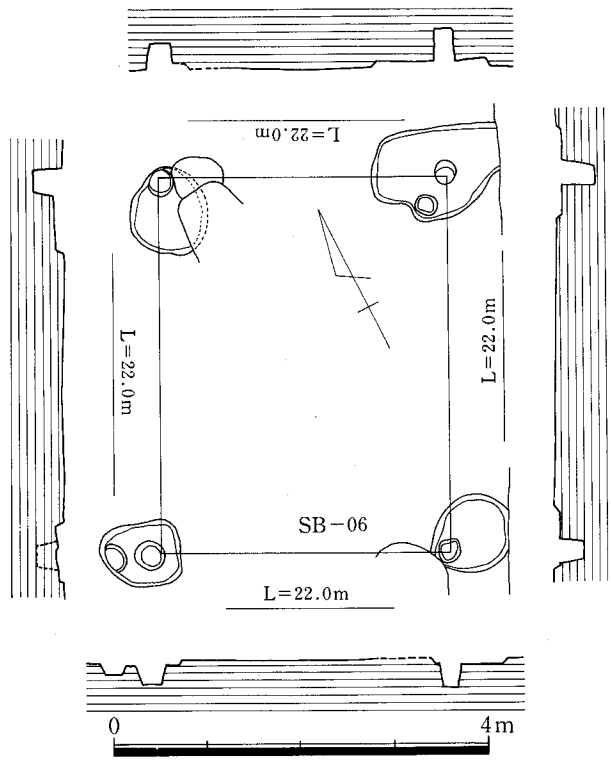
第12図　A区竪穴式住居址（ＳＣ－54・103）遺構実測図（縮尺1/80）



第13図　A区竪穴式住居址（ＳＣ－115）遺構実測図（縮尺1/80）

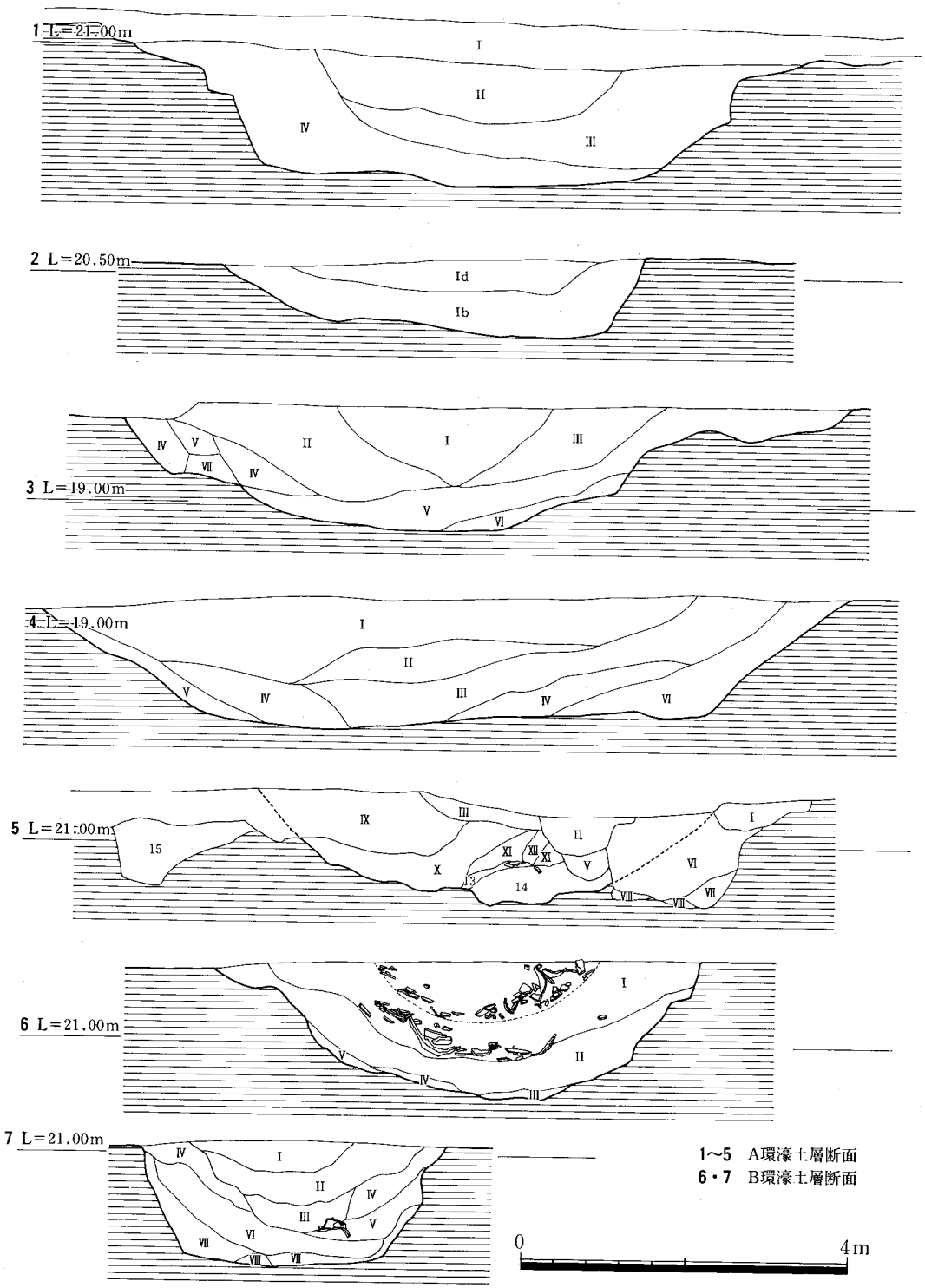
土である。Ⅲ層とⅣ層の状況から一時的に埋まったことを示すもので、土塁の痕跡も考えたが、他の土層と比べて土塁の可能性は、少ないと判断した。２断面の土層は、Ⅰ層・Ⅱ層ともほとんど差異はない。Ⅰ層…暗茶褐色土で色調が濃く、Ⅱ層…暗茶褐色土で色調が淡い。３断面はⅠ層…白色粗砂粒を含む暗灰褐色土である。Ⅱ層…暗褐色土、Ⅲ層…黒褐色土、Ⅳ層…暗黄褐色土、Ⅴ層…暗灰褐色土、Ⅵ層…暗褐色土、Ⅶ層はブロック状にあるもので暗青灰色土である。これらのことからＳＤ－001の断面は逆台形を呈し、出土遺物は底面かそれに近い状態で出土している。ＳＤ－001の全長の長さは265ｍで、長軸115ｍ・短軸110ｍで、十郎川まで達していたと仮定すると面積10,075㎡を有する。





ＳＤ－002も昭和48年の試掘調査時の断面部分を清掃した。５断面の土層は、住居址・土壙等により切られ部分的にしか観察できない。６断面は、南西隅の断面である。Ⅰ層…暗黄褐色土であるが、土器の堆積状況から見て２層に区別できるかもしれない。Ⅱ層…黄褐色土である。７断面はⅠ層…暗黄褐色土、Ⅱ層…黄褐色土、Ⅲ層…黒褐色土、Ⅳ層…明褐色土、Ⅴ層…褐色土、Ⅵ層…明褐色土、Ⅶ層…暗褐色土、Ⅷ層…褐色土である。

第14図　Ｂ区掘立柱建物（ＳＢ－02・06）遺構実測図（縮尺1/80）



第15図 A・B区環濠土層実測図（縮尺1/80）

3．土器

出土した土器は、住居址・環濠・土壙等から多量に出土した。また昭和48年の調査時にも多量な土器・石器・鉄器等が出土しているが、諸般の事情により、61年度確認調査の中で弥生時代後期住居址に伴う土器、A・B環濠内出土土器（昭和48年度分もごく一部掲載）と古墳時代住居址1軒の土器について図示した。他の遺構の遺物については整理し、今後の研究課題として、又の機会に資料を提示したいと考えている。

ＳＣ－18出土の土器（第16図）

ＳＣ－18からは、図示した4点以外にも細片がある。53・54は甕形土器である。54は長胴形の形状を呈し、頸部から大きく外反し、口縁端部をするどくおさめる。底部の造りは、平底で端部はするどい。器面調整は荒い刷毛目で仕上げている。53の口縁は、頸部からわずかに外反し、端部を丸くおさめる。底部は中央部がやや丸くなる平底で、端部の造りも鋭利ではない。器面調整は細かな刷毛目調整を施している。01は鉢形土器で、116は高坏脚部である。

ＳＣ－21出土の土器（第16図）

図化したのは10点である。19・20は壺形土器で、20は二重口縁壺、19は広口壺の口縁部である。21は「く」の字口縁を呈する甕形土器である。器面調整は、3点とも内外面に刷毛目調整を施す。

15～17は底部である。15・16が甕形土器の底部、17は壺形土器の底部である。3点とも平底を呈し、器面調整は刷毛目調整を施す。18は高坏、22は器台脚部である。2は、無頸鉢である。底部は平底で、器面調整は底部付近にヘラ削りを残すが、他は刷毛目調整を施している。23は、口縁がやや外反する鉢形土器で口径25cmを測る。

ＳＣ－23出土の土器（第17・18図）

08・55・117・120が甕形土器である。08は最大径が口縁部にあり、長胴形の形状を呈する。口縁部は、頸部からすぐに外反し、端部は鋭く納める。これは55・117とも同じ特徴を示している。しかし120の口縁端部には指ナデによる凹みがある。4点とも内外面に刷毛目調整を施している。121は壺の底部である。116は袋状口縁壺で、口縁部が内行している点から上記の4点と同時期（後期中～後半）と考えてよい資料である。このほか壺、鉢、蓋付埦、高坏等が出土した。時期的には、埦等の出現により後期後半の時期を考えてよい。

ＳＣ－24出土の土器（第19図）

ＳＣ－24からは、甕形土器27・100と壺形土器25・26・30・33、鉢形土器29、高坏32が出土した。甕形土器27・100は、「く」の字口縁を呈し、底部は、端部が丸く、底部中央部が膨みをもつタイプである。壺は口縁が短くやや外反しておさるめるタイプと26のタイプがある。29の鉢形土器には、タタキの後刷毛目で器面調整を施す終末期のタイプである。他の土器と多少の

時期差が認められる。これは住居址上面からのものであることに要因があると考えられる。

ＳＣ－103出土の土器（第19図）

ＳＣ－103出土の土器の内、39の土器が、古墳時代前期に属するものである。ただこれは、ＳＣ－103の上面覆土中のもので、床面張付きではない。甕形土器の40、49は、「く」の字口縁で内外面とも刷毛目調整を施す。48は袋状口縁壺である。口縁部の形態がくずれているところから後期後半に位置付けられよう。51は鉢形土器である。口縁部が厚く内側に貼付けを行なっている。50は埦形土器で、平底を呈し、刷毛目調整を施す。52は器台、45・47は高坏脚部である。時期的には後期後半（ⅡＢ）に属する。

ＳＣ－107出土の土器（第20図）

甕形土器90・91・95・102がある。95は頸部に一条の三角突帯紋を巡らす。90・91・102の底部は、平底90と中央部がやや膨らむ91・102がある。口縁部は、外反しながらさらに丸みを持たせるタイプ91・102と「く」の字口縁の90がある。３点とも内外面に刷毛目調整を施している。床面張付き土器で、ＳＣ－107の時期決定資料である。92～94は壺形・鉢形土器の底部である。96は鉢形土器の底部である。97は高坏である。ＳＣ－107の時期は、90、91、102の床面張付き土器から時期を決定できる。その時期は、弥生時代後期後半（ⅡＢ）に属する。

覆屋内住居址はＳＣ－115・ＳＣ－54・ＳＣ－55である。

ＳＣ－115出土の土器（第21図）

覆屋内の弥生時代後期の住居址ＳＣ－115出土の土器は、第21図の103・104以外に高坏脚部壺形土器片が出土している。103・104とも同様の特徴を有する。長胴形の胴部を持ち、「く」の字口縁を呈する。口縁端部に凹みを有し、底部は平底であるが丸みを持つ。器面調整は内外面とも刷毛目調整と底部付近ではヘラ削りが残る。口径28cmで器高が42.4cmである。

ＳＣ－54・55出土の土器（第22図）

ＳＣ－54出土の土器は、覆屋内の住居内に展示している所から出土遺物の代表的なものだけを図示する。105は器厚か薄く仕上げられている甕形土器で「く」の字口縁状を呈し、底部はやや丸底に近い平底である。器面は内面ヘラ削り、外面に刷毛目調整を施している。111は、袋状口縁壺である。底部は丸底で、器面調整は、内面ヘラ削り、外面刷毛目調整である。106・108は、内外面にヘラ磨きを行なった高坏である。107・109は埦形土器で、内面がタタキとヘラ削りを行ない、外面はヘラ削り。110は埦形土器の底部に穿孔し、甑状仕上げた土器で、内面は刷毛目、外面はヘラ削りとタタキの後ナデ仕上げを行なっている。112は支脚である。外面全般にタタキ痕を残す。

ＳＣ－55からは小型鉢（113）がある。丸みを持った平底を呈し、内側ヘラ削り、外面刷毛目を施す。

ＳＤ－001・002出土の土器（第23～26図）

昭和48年後のＳＤ－001調査の資料を図示した。甕形土器の内ほぼ２時期がある。22・25・160・162の「く」の字口縁を持ち、内外面とも刷毛目調整を施すタイプと33・57の外面にタタキ痕を残し、刷毛目で整形している。口縁の端部外面もつまみ出しが認められるタイプである。底部は平底である。これは、鉢形土器・支脚等にもタタキ痕跡を残すものがある。ＳＤ－002は土層断面図（第15図－６）で土器層の２つに区別できる。

弥生時代後期後半Ⅰ期として、甕形土器が22・(25)・73・74・75・76・86・99・101・(160・162)がある。壺形土器は、(18・51・61・70)・77・(81)・86・87・89・(108)がある。鉢形土器は03・61・85・91がある。これに対してⅡ期の甕形土器として、(33・57)がある。壺形土器は、(05・12・64・73)・78・88がある。鉢形土器は63がある。支脚は58、高坏は69がある。

ＳＤ－001・002の土器を見るかぎり、弥生時代後期のⅡ式からⅢ式までの土器が含まれ、環濠自体の継続時期もこの時期までと考えてよい。

住居址と環濠の時期は、両方とも弥生時代後期の時期におさまる。この野方遺跡は、弥生時代後期後半から古墳時代前期までの住居址が連続的に営まれていることが判明した。

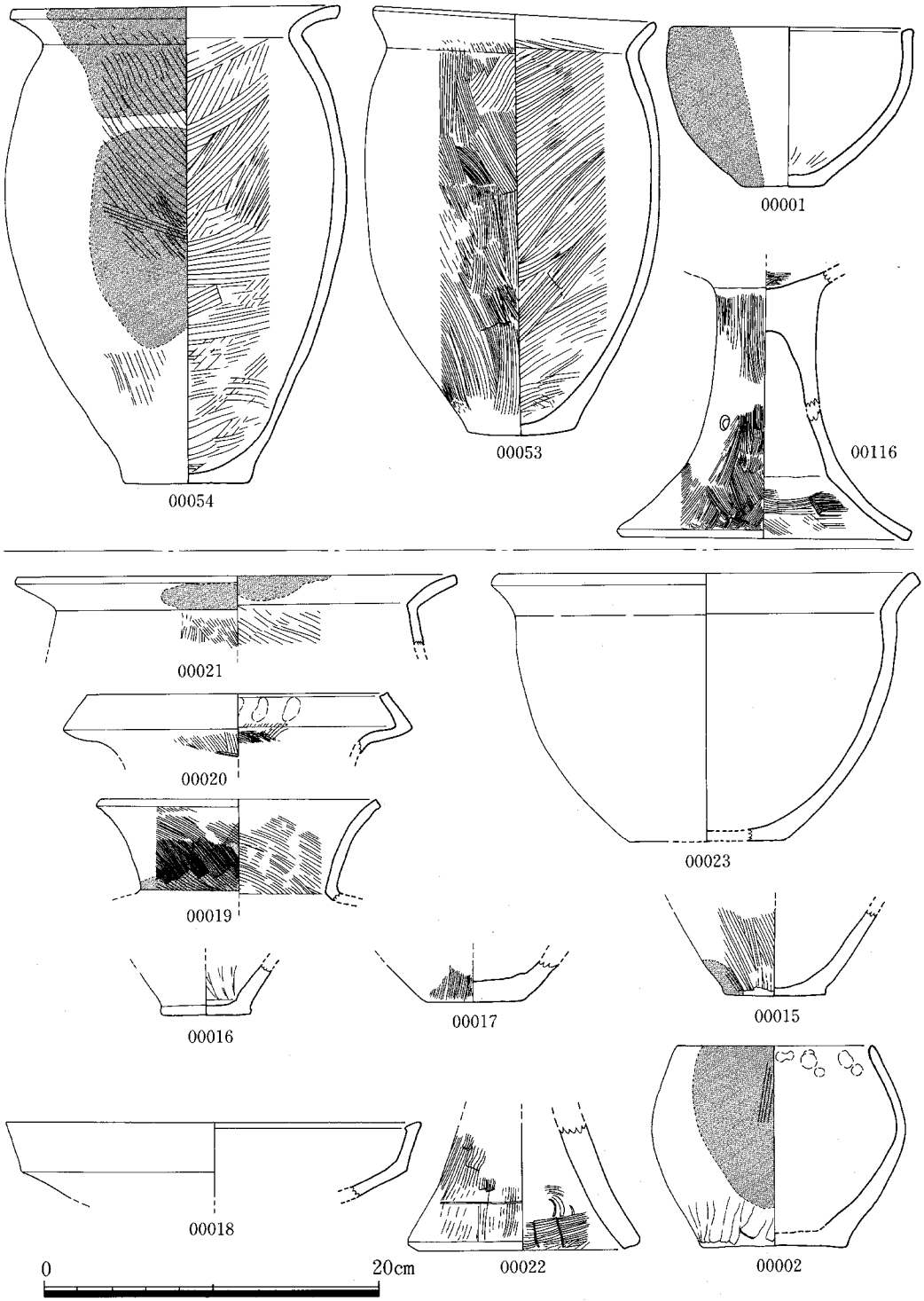
４．石器（第18・19・22・27図）

今回の確認調査で出土した石器は、20点たらずである。このほかに昭和48年調査時のＡ環濠、Ｂ環濠の出土の石器も図示した。10001はＳＣ－103から出土した砥石である。２面を砥石面として使用した痕跡を有する。石材は結晶片岩である。10002・3はＳＣ－23から出土した磨石と石錘である。02が滑石製石錘で、下條信行氏分類の博多湾型である。03は玄武岩製の磨石で一部使用痕がある。ＳＣ－54（古墳時代前期住居址）からの出土である（10001～3）166～168は滑石製の石錘で10002と同型式を呈する。(10004) は磨製石斧の刃部である。玄武岩製である。このほかにＡ環濠内より出土した（10005・10006・10007・10008・10009・10010・10011・10012）があるが、これは昭和49年に報告された概報の実測図である。またＢ環濠から出土の遺物も同様に概報に写真図版が組まれているものである。註（　　）内は遺跡番号7304である。

５．鉄器（第27・28図）

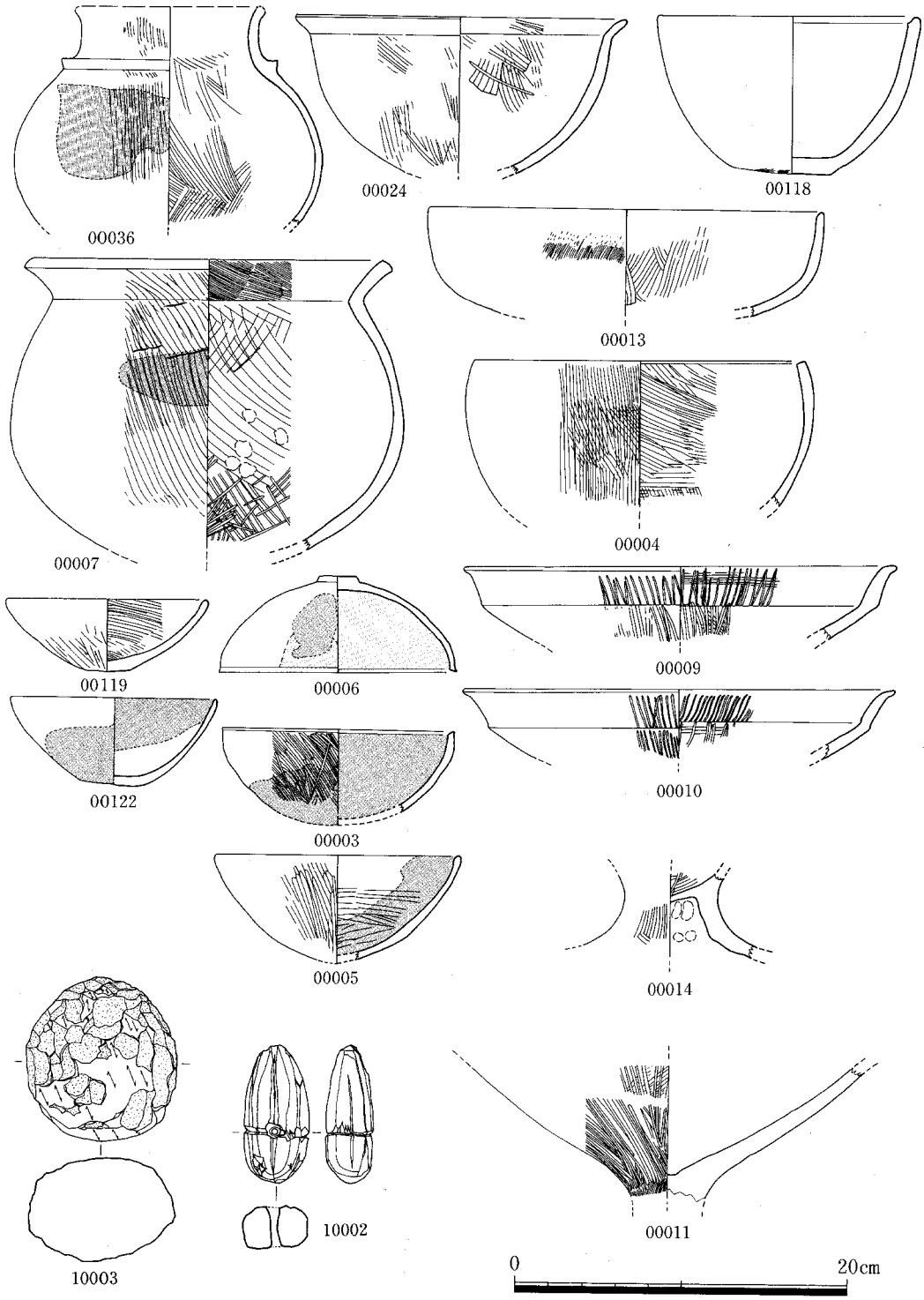
第27図の鉄器は石器と同様に昭和49年報告の「野方遺跡調査概報」内に写真図版が掲載されている実測図である。これ以外の鉄器は、48年度調査と61年度の調査時に出土したもので大庭康時が文章、挿図を担当した。

1973年度調査・1986年度調査を通じて、91点の鉄製品が出土した。市報報第30集で報告した９点を除き、主要なものについて報告する。なお、鉄鏃の分類は、大庭1991年（脚注）による。

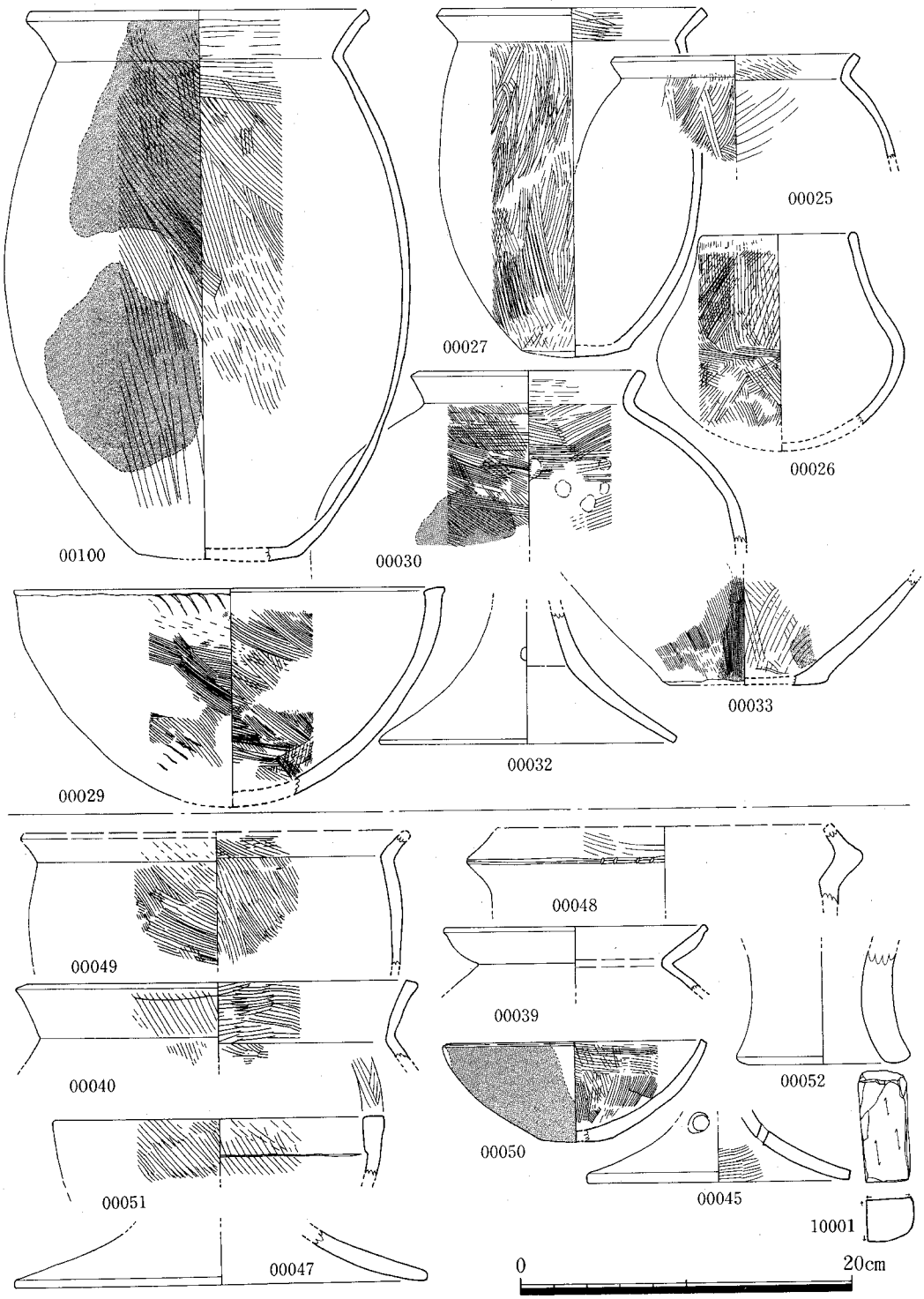


第16図　出土土器実測図－１（縮尺1/4）

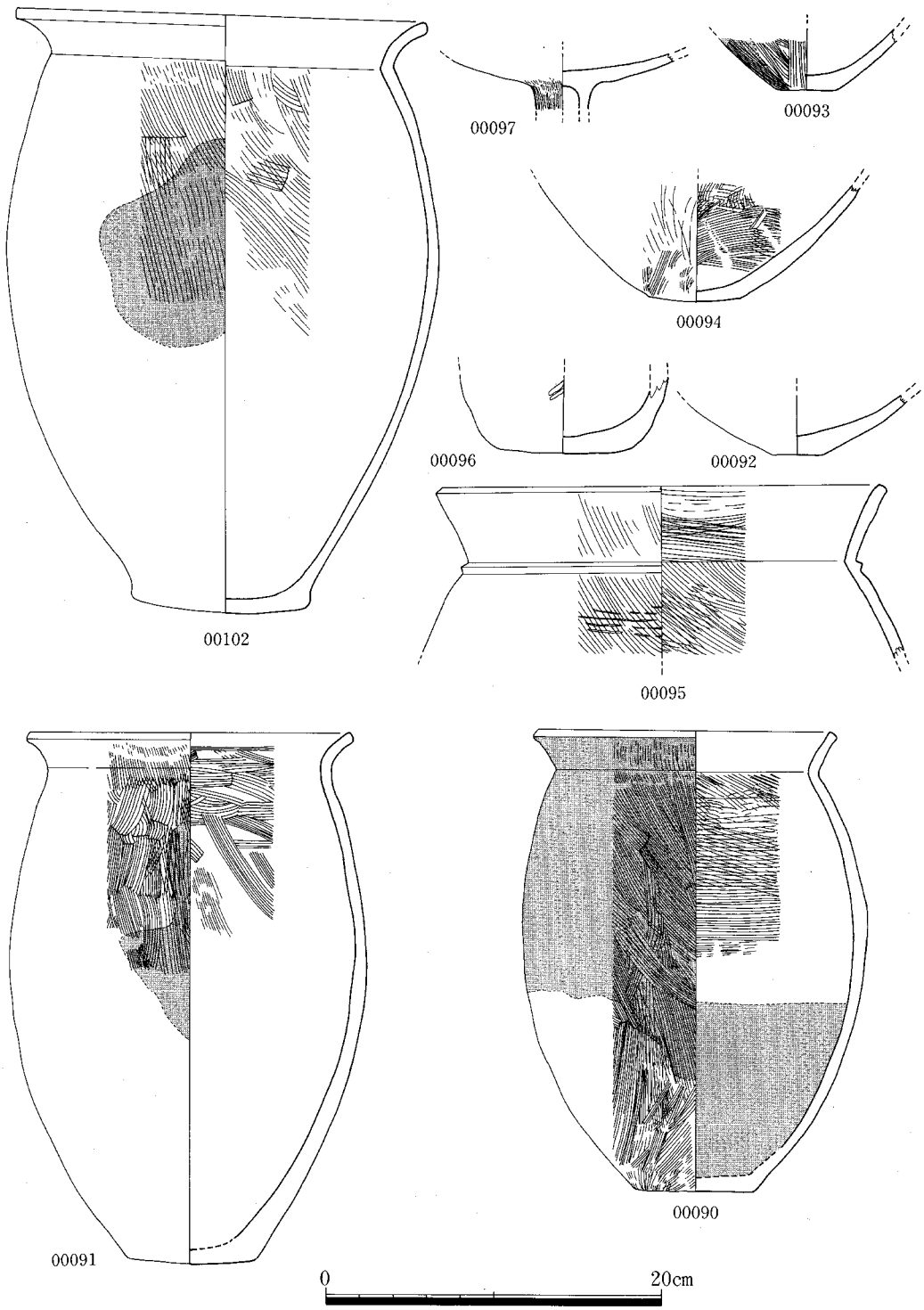
第17図　出土土器実測図－２（縮尺1/4）



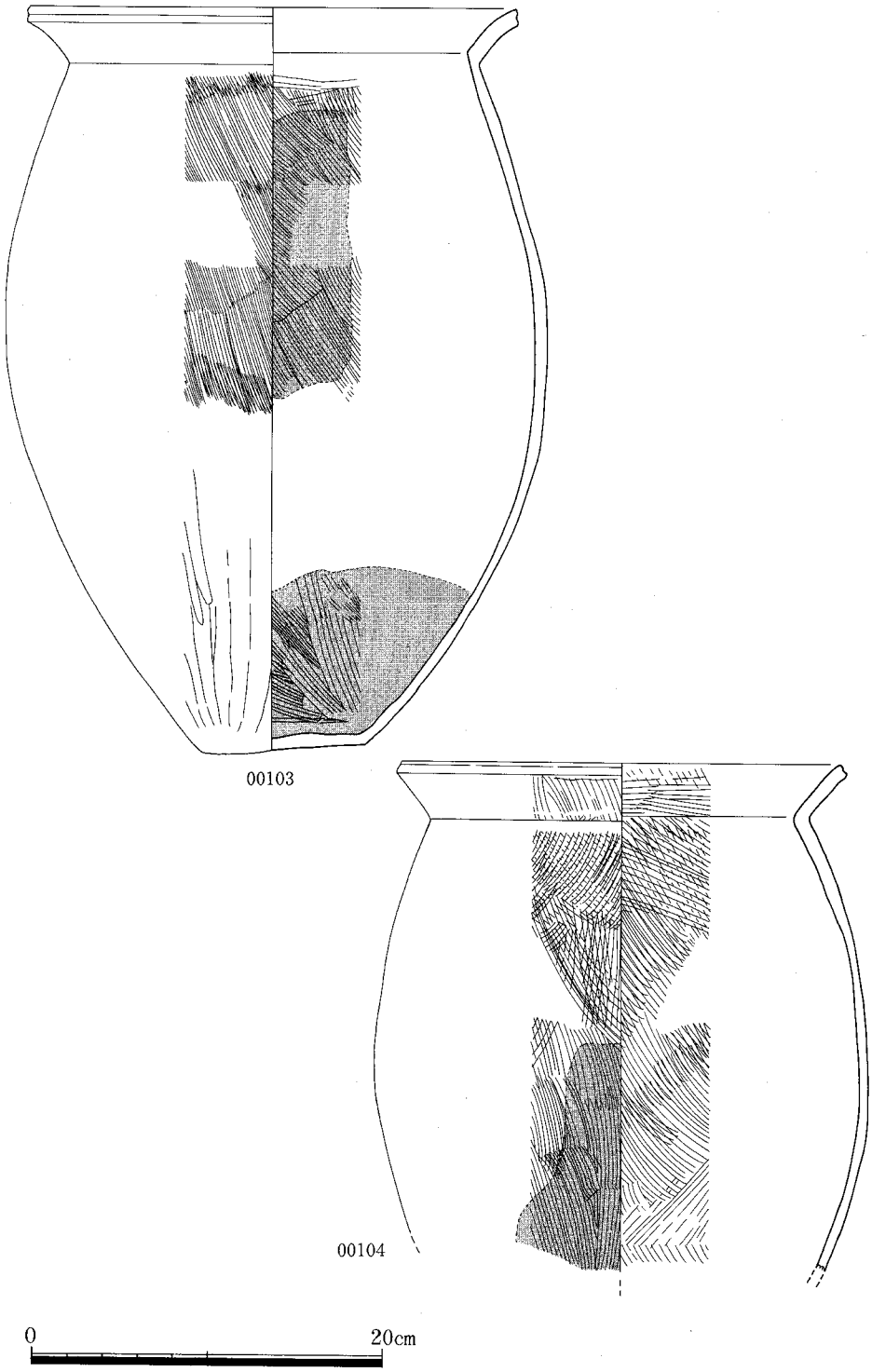
第18図　出土土器・石器実測図－３（縮尺1/4）



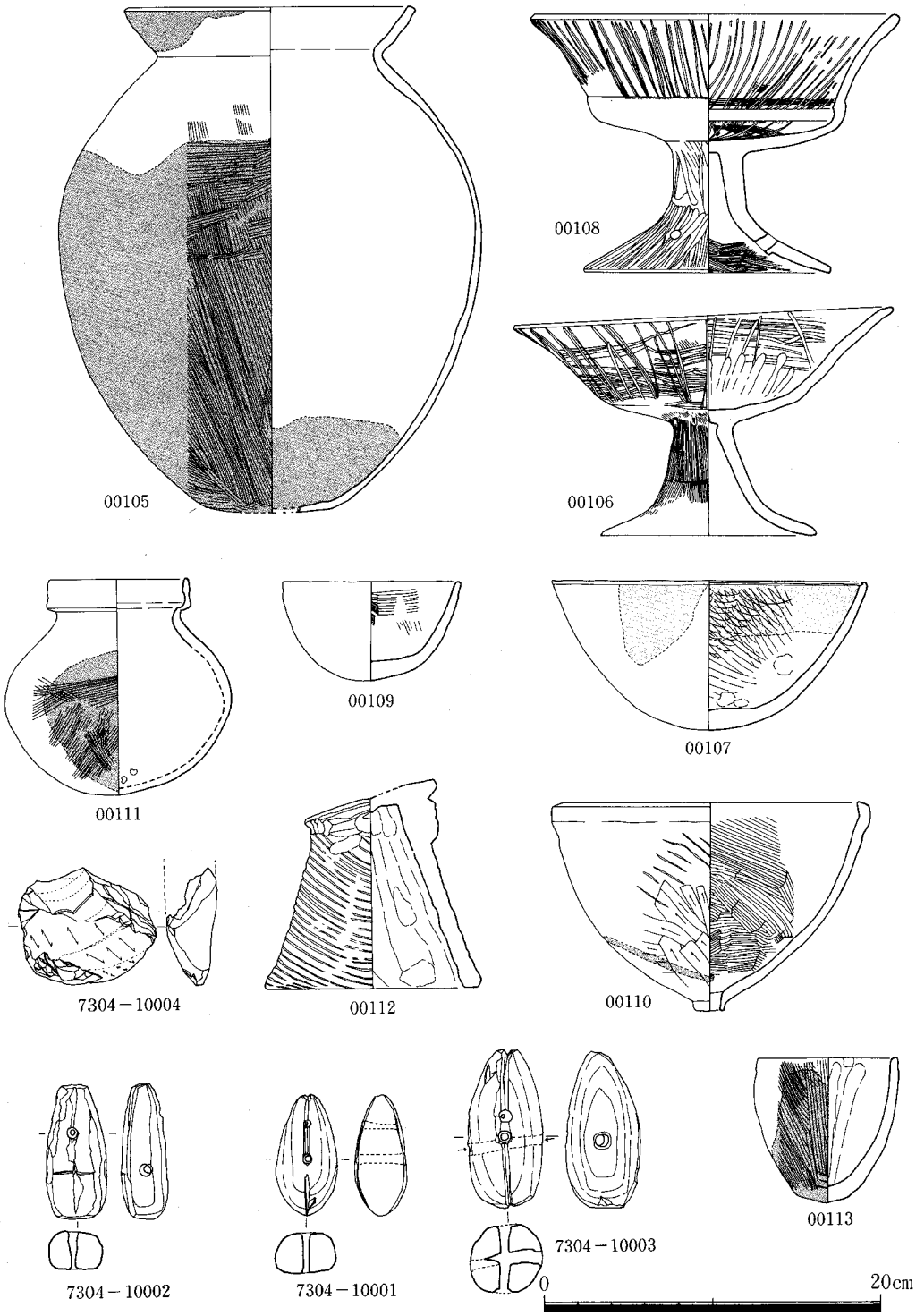
第19図　出土土器・石器実測図－４（縮尺1/4）



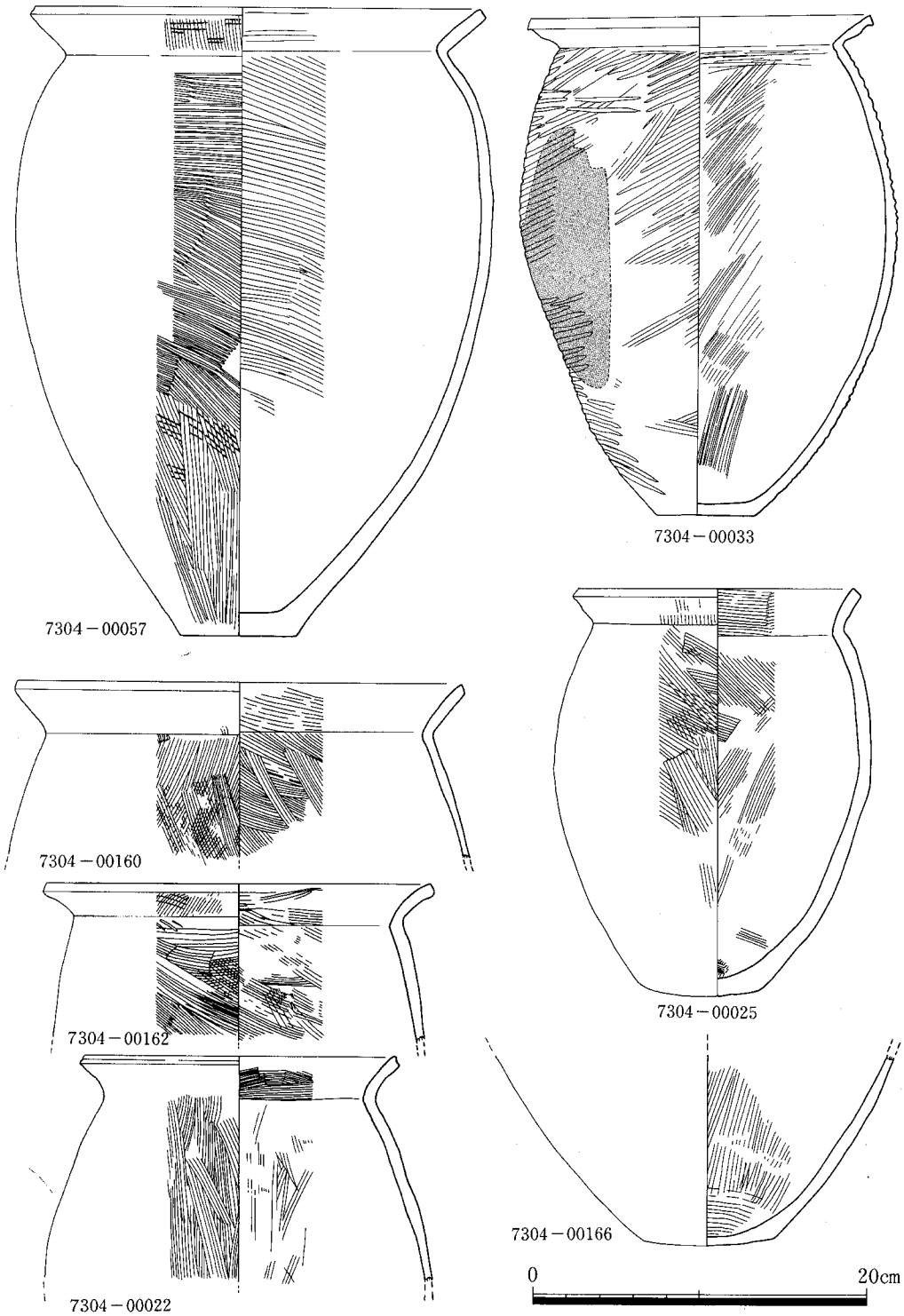
第20図　出土土器実測図－５（縮尺1/4）



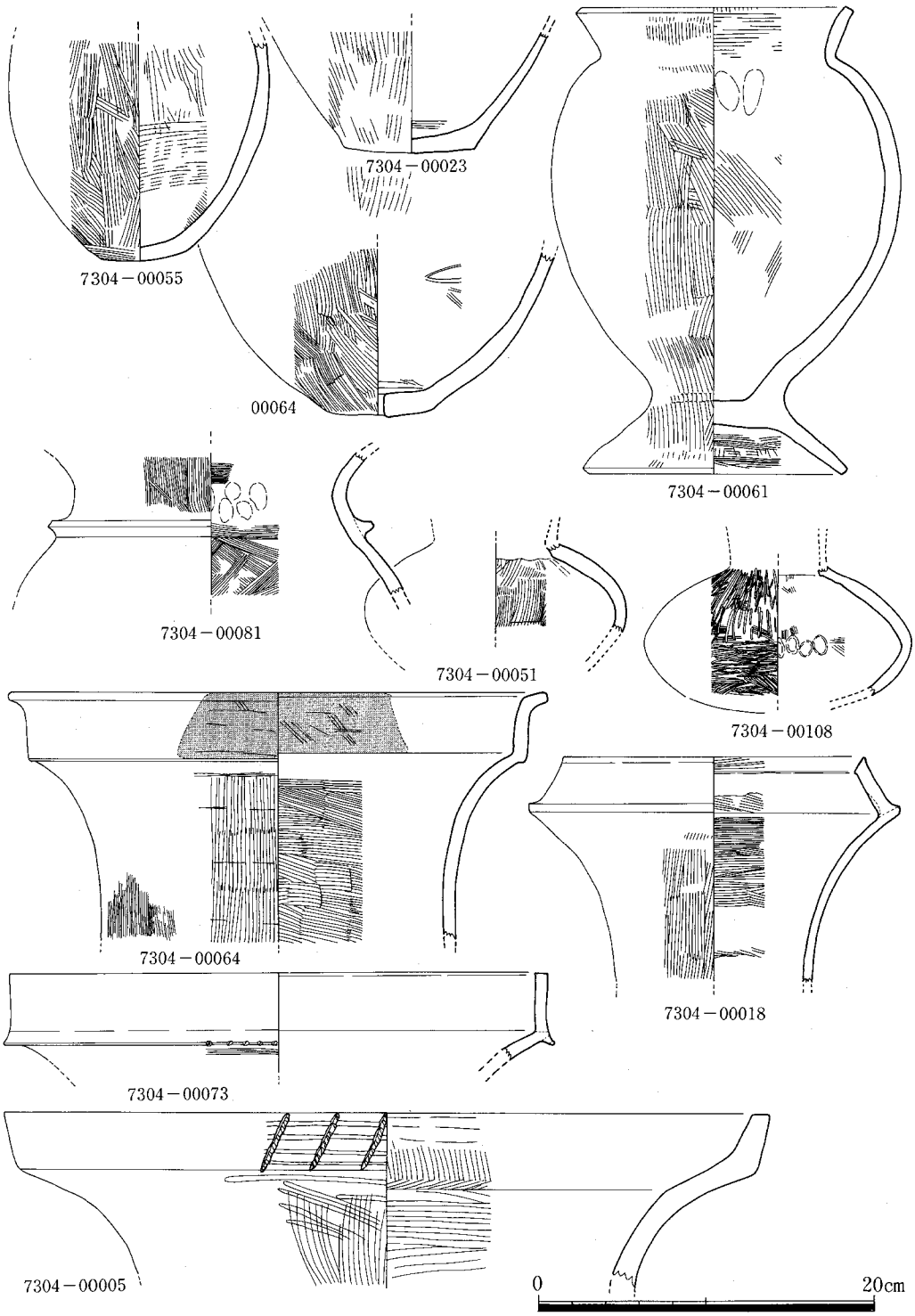
第21図　出土土器実測図－６（縮尺1/4）



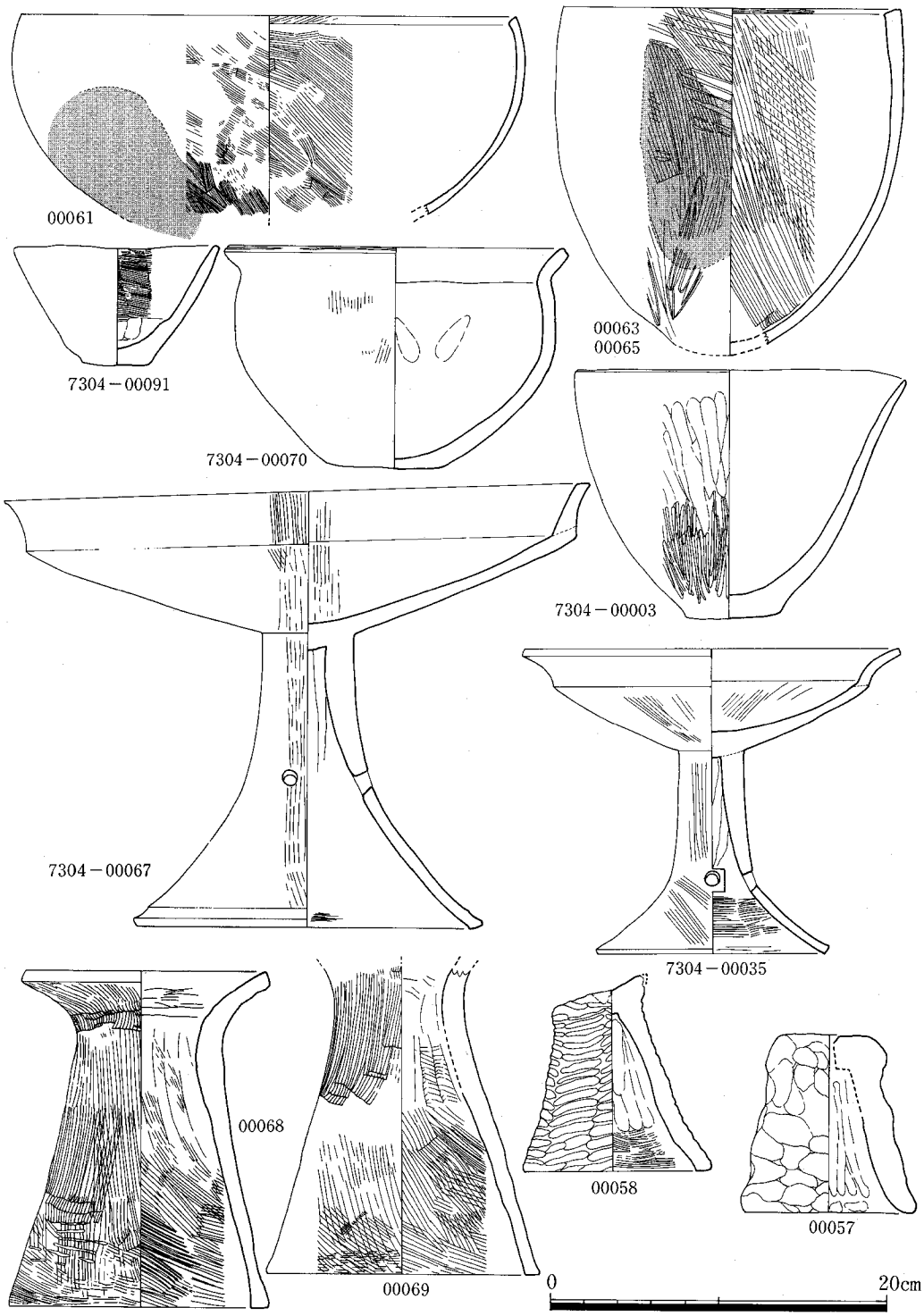
第22図　出土土器・石器実測図－７（縮尺1/4）



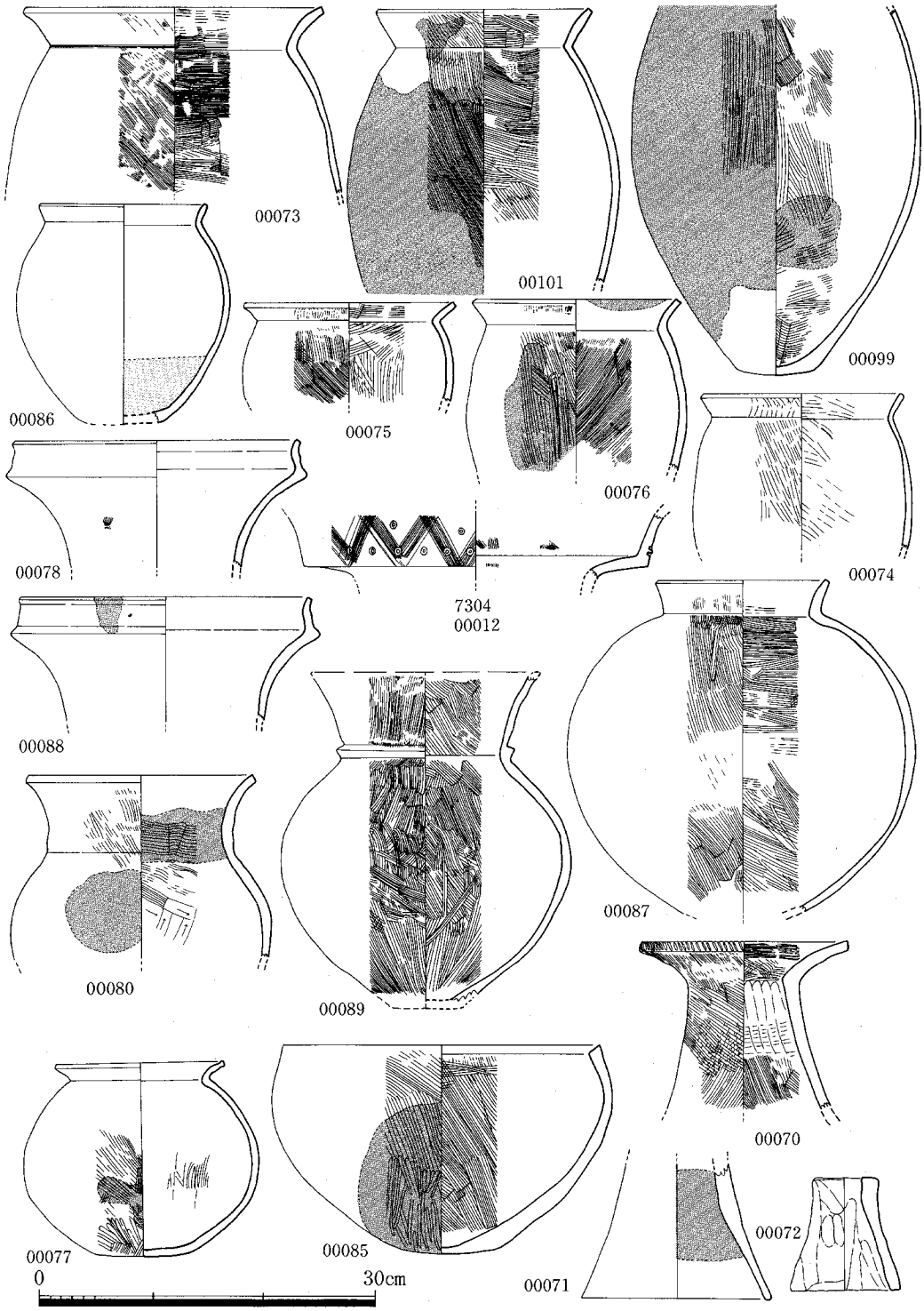
第23図　出土土器実測図－８（縮尺1/4）



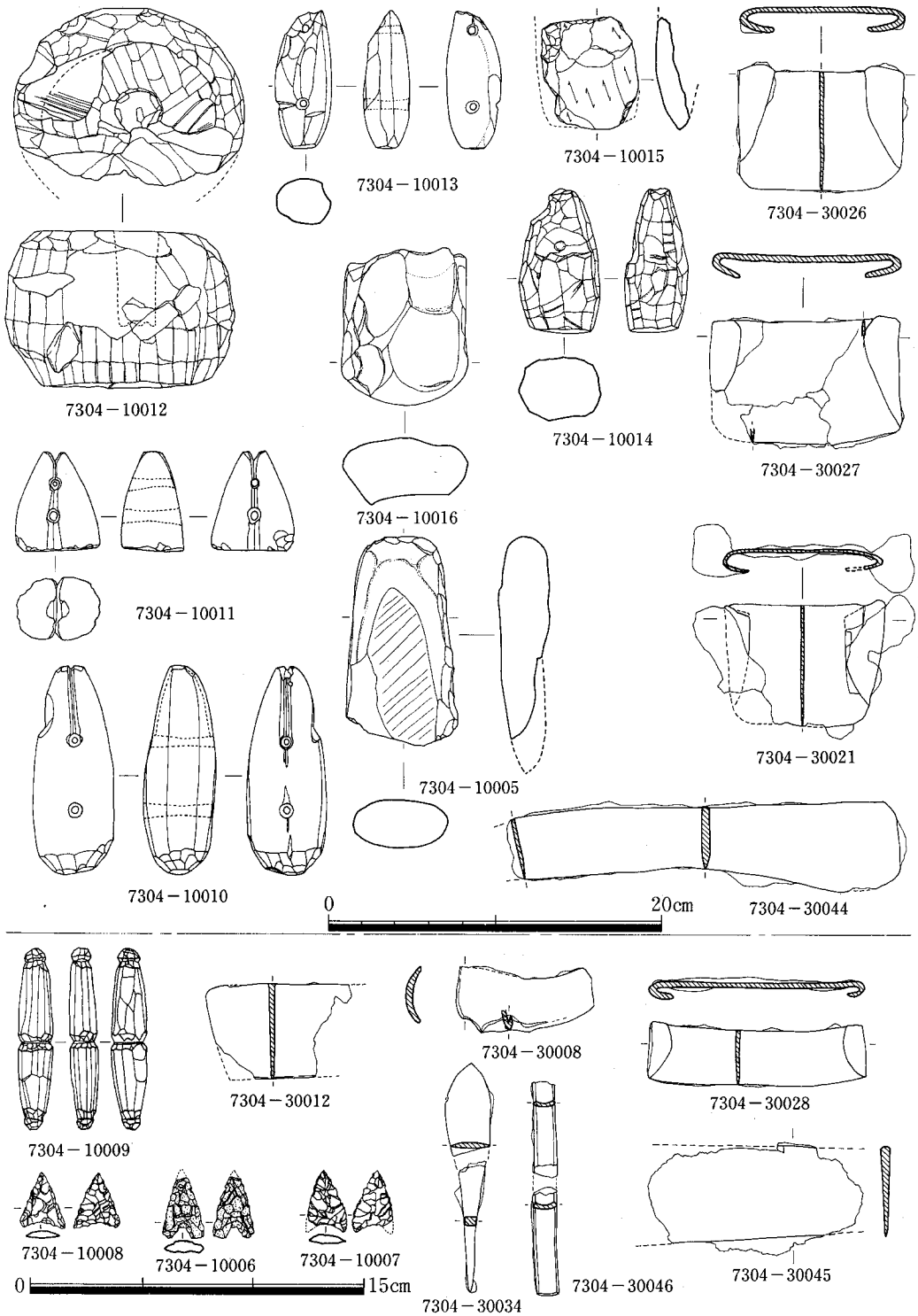
第24図　出土土器実測図－９（縮尺1/4）



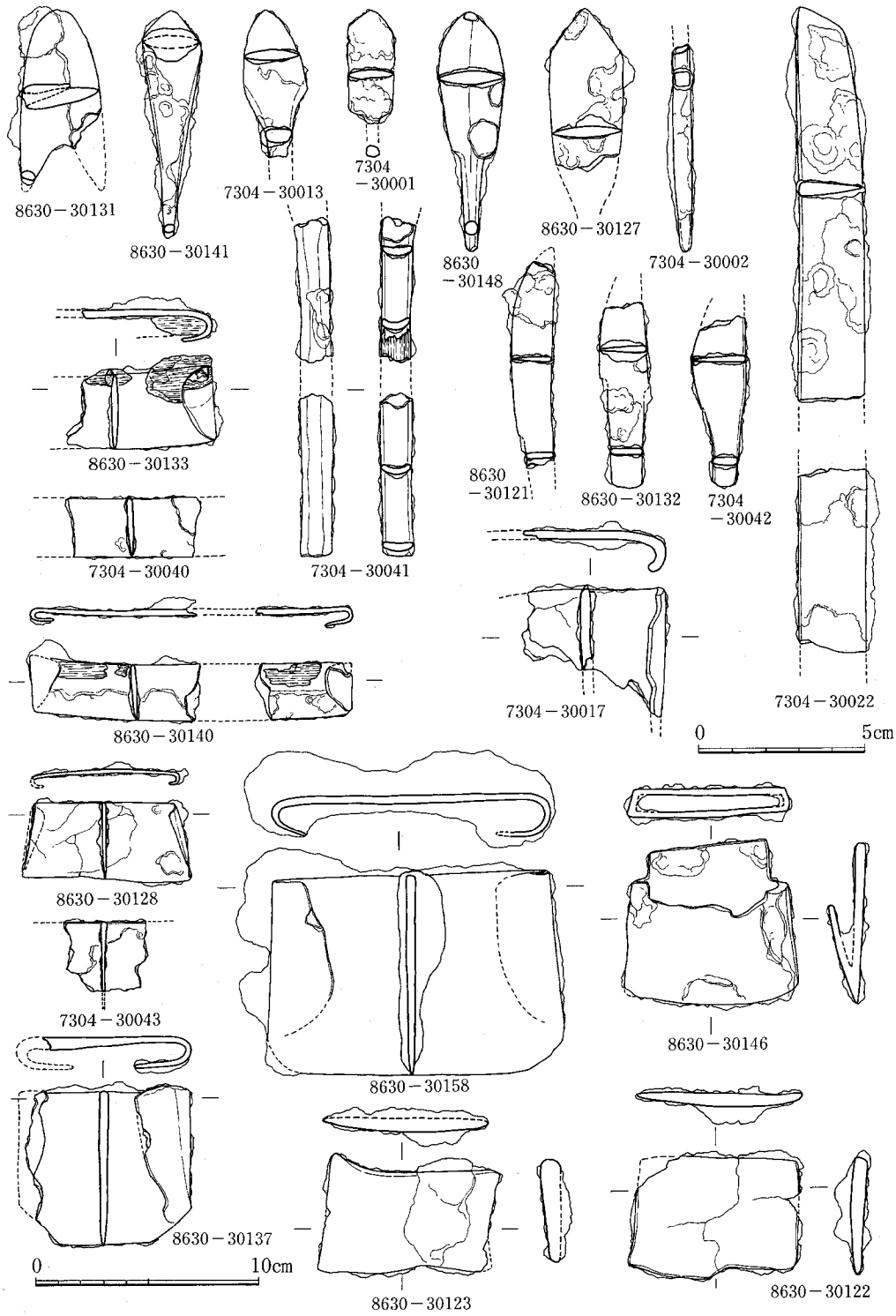
第25図　出土土器実測図－10（縮尺1/4）



第26図　出土土器実測図－11（縮尺1/6）



第27図　出土石器・鉄器実測図（縮尺1/3、1/4）



第28図　出土鉄器実測図（縮尺1/2、1/3）

鉄鏃8630-30131は、無茎凹基式である。身の半ばで鍛造面が剝離し、割れている。現存長5.25cm、復原長5.45cm、復原身2.5cm、ＳＣ－55出土。8630-30141は、有茎無刺三角式である。頭部の２辺にのみ刃を作る。全長6.8cm、身幅1.8cm、ＳＣ－68出土。３も有茎無刺三角式である。現存長4.4cm、身幅1.93cm。1973年度調査、包含層出土。7304-30001は、有茎無刺五角式である。両側辺と胴部に付刃する。現存長3.4cm、幅1.4cm。1973年度調査、Ａ地点出土。8630-30148は有茎無刺鏃で、剣身形の身を持つ。銹のため、区の形状ははっきりしない。身の中央に、薄く鎬が立つ。全長7.15cm、身部長4.15cm、身幅2.0cm、ＳＣ－59覆土出土。8630-30127は、有形無刺五角式の身である。現存長4.9cm、幅2.25cm、ＳＣ－23覆土出土。7304-30002は、有茎鏃の茎である。Ｐ－45出土。

鉄製穂摘具（摘鎌・手鎌）8630-30133は、端部の折り返しにはさまれて、柄の木質が遺存する。折り返し部は、柄の厚味に沿って湾曲しており、柄をはさんだ後に締めつけたことを示す。また、折り返し上部の外面には樹皮が認められ、折り返した上に樹皮を巻いたものと思われる。ＳＣ－62出土。7304-30040は、身の一部である。1973年度調査、Ａ地点出土。8630-30140は、身の一部を欠き、5.1cmと3.0cmの２片にわかれる。幅1.7cm。ＳＣ－68の床面ベットより出土した。

鉋　7304-30041は、鉋の身部である。２片にわかれている。実測図上の１片については、断面形の類似性から天地を推定した。一部に、柄の木質が銹着して残る。Ｐ－45出土。

刀子　8630-30121は、切先と茎尻を欠く。現存長6.3cm。ＳＣ－13出土。8630-30132は、身部上半を欠く。現存長5.55cm。ＳＣ－61出土。7304-30042は、切先を欠く。現存長5.1cm。1973年度調査、Ａ地点出土。

鉄刀　7304-30022は、11.9cmと5.45cmの２片で、身の中央と区以下を欠く。遺存する２片の長さから推定して、刃部長は20cmをこえよう。身幅は、2.0cmをはかる。1973年度調査出土。

鉄鎌　7304-30017は、折り返し部分の破片である。折り返しの幅が小さく、ゆるく曲げるのみである点、棟が破損部分付近で弧を描いて曲る点から、鉄鎌と判断した。1973年度調査出土。

鉄製鍬・鋤先　8630-30128は、一方の折り返し部を欠損する。刃縁は段をなして屈曲しており、使用・研ぎによる変形と思われる。刃部長7.5cm、幅3.6cm。ＳＣ－37出土。7304-30043は、身部の棟側破片であろう。1973年度調査、Ａ地点出土。8630-30137も、片側の折り返し部を欠く。また、欠損部付近は、銹でふくれ断面が変形している。刃部長3.8cm、幅7.2cm。ＳＣ－62出土。8630-30158には、原形を知り難い程に、銹が付着している。刃部長13.2cm、幅9.15cm。1986年度調査、Ａ溝出土。

鉄斧　8630-30146は、鋳造の袋状斧である。刃部長7.8cm、幅7.3cmをはかる。ＳＣ－86出土。

鉄製品素材　8630-30122・30123は、未製品と思われる板状鉄製品である。ともにＳＣ－18より出土。

その他、鉄鏃３点、鉄製穂摘具１点、刀子３点、鉄製鍬・鋤先３点、鉄滓が出土している。

註、大庭康時1991年「北部九州における弥生時代の鉄鏃」「児島隆人先生喜寿記念論集古文化論叢」

調査番号	遺物番号	処理番号	材質	器　種		遺　構
8630	30101	6485	鉄	?		
8630	30102	6486	鉄	刀子？		P-21
8630	30103	6487	鉄	?		Pit-25
8630	30104	6488	鉄	?		Pit-42
8630	30105	6489	鉄	刀子？		Pit-55
8630	30106	6490	鉄			Pit-58
8630	30107	6491	鉄	鏃か刀子？		Pit-63
8630	30108	6492	鉄	?		Pit-72
8630	30109	6493	鉄	?		Pit-95
8630	30110	6494	鉄	刀子		Pit-107
8630	30111	6495	鉄	?		Pit-124
8630	30112	6496	鉄	?		Pit-137
8630	30113	6497	鉄	鎌		Pit-222
8630	30114	6498	石			P-315
8630	30115	6499	鉄	?	?	Pit-338
8630	30116	6500	鉄	?	?	Pit-345
8630	30117	6501	鉄	?	?	Pit-376
8630	30118	6502	鉄	?	?	Pit-377
8630	30119	6503	鉄	?	?	Pit-378
8630	30120	6504	鉄	?		Pit-448
8630	30121	6467	鉄	刀子		SC-13
8630	30122	6505	鉄	板状		SC-18
8630	30123	6506	鉄	?		SC-18
8630	30124	6507	鉄	?		SC-21
8630	30125	6508	鏃	鏃		SC-21, PiT-2
8630	30126	6509	鉄	鎌？		SC-21,床
8630	30127	6510	鉄	鏃		SC-23
8630	30128	6469	鉄	方形板刃先	鏃が鋤の先	SC-37
8630	30129	6511	鉄	刀子？		SC-44, R
8630	30130	6512	鉄	釘	近・現代	SC-54
8630	30131	6513	鉄	刀子・鏃	銹着	SC-55
8630	30132	6514	鉄	刀子		SC-61
8630	30133	6515	鉄	方形板刃先	鍬か鋤の先	SC-62
8630	30134	6516	鉄	鏃		SC-62
8630	30135	6517	鉄	鏃？		SC-62, R
8630	30136	6518	鉄	鎌？		SC-62,上
8630	30137	6519	鉄	方形板刃先	鍬が鋤の先	SC-62,上
8630	30138	6520	鉄	鏃		SC-65
8630	30139	6521	鉄	手鎌		SC-66
8630	30140	6522	鉄	手鎌		SC-68
8630	30141	6523	鉄	鏃		SC-68
8630	30142	6524	鉄	?		SC-70付近
8630	30143	6525	鉄	刀子か鎌？		SC-78
8630	30144	6526	鉄	鎌		SC-78
8630	30145	6466	鉄	?		SC-79
8630	30146	6527	鉄	斧	鋳造	SC-86
8630	30147	6528	鉄		鋳瘤	SC-107,上
8630	30148	6468	鉄	鏃		SC-59, 覆土
8630	30149	6529	鉄	?		SX01
8630	30150	6530	鉄	滓？		表土
8630	30151	6531	鉄	?		包含層
8630	30152	6532	鉄	?		包含層
8630	30153	6533	鉄	鏃		包含層
8630	30154	6534	鉄	刀子？		包含層
8630	30155	6535	鉄	滓？		包含層
8630	30156	6536	鉄	釘	近・現代	包含層
8630	30157	6537	鉄	?	近・現代	包含層
8630	30158	6547	鉄	方形板刃先	鍬が鋤の先	A溝
8630	30159	6552	青銅	鏡		
7304	30001	6471	鉄	刀子		A地点
7304	30002	6472	鉄	鉋		P-45
7304	30003	6473	鉄	?		P-63
7304	30004	6474	鉄	?		
7304	30005	6475	鉄	滓？		
7304	30006	6476	鉄	滓？		
7304	30007	6477	鉄	滓？		
7304	30008	6478	鉄	鎌		P-4元, 2
7304	30009	6479	鉄	?		SC-66
7304	30010	6480	鉄	刀子		3層
7304	30011	6481	鉄	滓？		一・二層
7304	30012	6482	鉄	方形板刃先	鍬が鋤の先	溝最上層
7304	30013	6483	鉄	鏃		包含層
7304	30014	6484	鉄	方形板刃先	鍬が鋤の先	包含層, 3
7304	30015	6538	鉄	斧	Fig. 47-4, 30集	
7304	30016	6539	鉄	?		
7304	30017	6540	鉄	鎌		
7304	30018	6541	鉄	?		
7304	30019	6542	鉄	U字形刃先	５Ｃ以降	3層下位
7304	30020	6543	鉄	刀子		
7304	30021	6544	鉄	方形板刃先	鍬か鋤の先	
7304	30022	6545	鉄	刀子		
7304	30023	6546	鉄	斧？		
7304	30024	870915	鉄	釘	近・現代	
7304	30025	6554	青銅	鏡		一号石棺
7304	30026	5971	鉄	方形板刃先	Fig. 47-1, 30集	B溝
7304	30027	5974	鉄	方形板刃先	Fig. 47-2, 30集	B溝
7304	30028		鉄	手鎌	Fig. 47-3, 30集	A溝
7304	30029	5972	鉄	斧	Fig. 47-5, 30集	E4区
7304	30030	5973	鉄	鎌	Fig. 47-6, 30集	E10区
7304	30031		鉄	鎌	Fig. 47-7, 30集	E7区
7304	30032		鉄	鎌	Fig. 47-8, 30集	E10区
7304	30033		鉄	鏃	Fig. 47-9, 30集	E10区
7304	30034	870914	鉄	鏃	Fig.47-10,30集	A溝
7304	30035		青銅	獣帯鏡	Fig. 37-1, 30集	
7304	30036		青銅	内行花文鏡	Fig. 37-2, 30集	
7304	30037		青銅	鋤先		
7304	30040		鉄	手鎌		A地点
7304	30041		鉄	鉋		P-45
7304	30042		鉄	刀子		A地点
7304	30043		鉄	鍬鋤先		A地点
7304	30044		鉄	鎌		F4区溝
7304	30045		鉄	鎌		B5　溝

Tab. 1　野方遺跡出土鉄器一覧

第Ⅲ章

野方遺跡基本計画

Ⅰ．計画の前提

1）計画の位置付け

野方における遺跡の存在はすでに大正年間から推定されていたが、最初に発見されたのは昭和35年９月頃である。

その後、昭和48年４月の福岡県労働者住宅生活共同組合による住宅団地の造成工事の際に大量の遺物が発見され、大集落の存在が予想されたため、施主側と協議を行って工事の中止を要請し、同年６月から遺跡の範囲を確認するため緊急に試掘調査を行なった。その結果、遺構が集中している扇状地の中央部の約21,000㎡を本調査の対象区域とすることになり、本調査は同年８月から翌年の１月まで続けられ、約5,000㎡が調査された。しかし、未発掘の部分が多く遺構の内容については概括的な把握にとどまった。

この区域の内、16,145㎡について昭和49年８月に福岡市土地開発公社によって先行取得を行ない、また2,626㎡について国の補助事業として昭和50年３月に取得を行なった。先行取得の償還は国の補助金を受けて昭和54年度までの５ヵ年で終了した。

史跡の指定は、取得地のほか公園地、公有地を含め21,166㎡について昭和50年６月27日に行われた。

そこで本計画は、遺跡の保存と共に広く市民に親しまれ、学校教育、社会教育に資する史跡として環境整備を行なうものである。

2）計画地周辺の概要

2－1　位置

野方遺跡は、福岡市の中心地である天神から西南西へ約10kmの西区大字野方に所存している。福岡市の地形は、北の海を除く三方を山で囲まれており、平尾丘陵によって東の福岡平野と西の早良平野に二分されている。また、早良平野の西縁を形成する山魂によって糸島平野と接している。

当遺跡はこの山並みの一つである叶岳の麓に位置し、弥生時代に存在が知られている伊都国と奴国とを結ぶ広石峠越え福岡側の出口に当り、平安時代に額田駅が置かれた様に古くからの交通の要所である。遺跡は、この道に北面し十郎川が叶岳の麓に形成した扇状地の上に広がっ

ている。

一方、当遺跡周辺ではまだ緑が多いとはいえ、近年ベットタウンとして急速に開発が進んでおり、当遺跡が発見された野方台団地をはじめ壱岐団地、拾六町団地などの大規模団地が形成されている。

2－2　自然的条件

遺跡は飯盛山・叶岳・長垂山と南から北へ延び山魂の東側山麓部に形成された扇状地に立地し、早良花崗岩を母岩とした山並みに対し，扇状地は、花崗岩バイラン土で形成されている。又・飯盛山・叶岳に源を発した十郎川が、扇状地の南から東に沿って北流し博多湾に注いでいる。

気候は一般に温暖で、年平均気温は15度前後、年間降水量は約1,700㎜。１ヶ月の平均気温は、東京より1.4度程高いが，玄界灘から吹き付ける北西季節風が卓越して曇天の日が多く、体感気温は割合低い。

自然植生域は、海抜800ｍ前後までが照葉樹林域で、それより高地が落葉樹林域である。照葉樹林域の自然林は、平野部等ではシイータブ林を主体とし、一部にアラカシ、イスノキ林などが見られる。しかし、その大半は市街地・村落等によって占められ、またその他の地域でもスギ・ヒノキを主木とした二次林によって覆われているのが現状である。

2－3　社会的条件

遺跡周辺は第１種住居専用地域に指定されており、計画地周辺も、全て低層住宅によって囲まれている。また、高度地区も隣接している事から、将来増々住居地としての開発が進められて行くものと予想される。

また周辺の公園緑地としては、団地内の遺跡であるため、数多くの児童公園が分布しており、当遺跡内にも野方西児童公園・平底幼児公園が開園されている。

2－4　周辺の遺跡

早良平野の中で当遺跡と関連する弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡としては、半径５㎞の範囲内に西新・重留遺跡、また３㎞以内では有田・五島山遺跡、さらに1.5㎞以内は宮の前・湯納遺跡が位置しており、これらの中には野方塚原遺跡のある時期と共存した遺跡が含まれており、当遺跡で発掘された遺構・住民址・箱式石棺等から、他の遺跡との比較調査により右表のような調査結果が得られている。

弥生時代 後期後半 終 末 期	A溝 (J9) B溝	K-1 | K-3 ⋮	⋮ (S-1 S-3 S-6) ⋮ S-9	宮の前Ⅰ式
古 墳 時 代	J 507 J 518 F 5区 a J 516 J 1001 J 1003			宮の前Ⅲ式 (+) 有田Ⅰ期
	J1002			

3） 計画地の概要

3－1 計画地の条件整理

■ 当計画地は、面積約21,166㎡（内、野方西公園1,020㎡・平底公園560㎡）を有する南北に長い敷地である。

■ 計画地は、南側を扇頂とする扇状地上にあり、南北の高低差は約6.0m余りある。

■ 開発前は畑であったため、およそ４つの平面に区分されていたが、発掘調査後、盛土で覆っているため、その地形は変化している。

■ ２ヶ所の公園との高低差は、法面によって処理されている。

■ 南側は１m程高い住宅地と接しており、さらに１m程ウォールが設けられているため敷地内からは約2.0mの壁面が続いて見える。

■ 南側を除く３辺は、道路と接しており、東側は道路が約0.8m低く、また西側の一部では逆に0.5m高くなっている。いづれもその高低は法面にて処理されている。

■ 外周道路をはさんだその周辺地域は全て住宅地である。

■ ２ヶ所の公園内の植樹以外に、特に保存及び移植する樹木はない。

■ ２ヶ所の公園とはH＝0.9mのネットフェンスで区切られている。

■ 南側に周辺のランドマークとしての飯盛山を望む事が出来る。

3－2 遺跡の概要

野方遺跡は伊都国のあった糸島平野と、奴国の中心の福岡平野を結ぶ交通路の中間にあたる早良平野に面した、広石峠の出入り口に位置し、標高17～20mの扇状地にあり、南北600m、東西200mにわたって南北に広がっている。史跡に指定されたのは、このうちの遺構が集中し

ている中部の約21,166m²についてである。

遺跡の内容は、弥生時代の終末期及び古墳時代前期に形成された集落の複合遺跡である。

弥生時代の遺構は、A溝及びB溝と名づけられた大小2つの環濠を有している。

A溝は直径約100mの楕円形で、東側は十郎川に面した崖面に続き、全体の3分の1を欠いて全周していない。溝の断面形は、上面幅3.7m、下面幅2.3m、深さ0.87mの逆台形状をなしている。溝の中からはこの時期の甕棺・土器・石器・鉄器など多量の遺物が出土した。溝の内側には竪穴住居址のほか、壺棺があり、弥生時代末期の集落であった事が分かる。

B溝は20×30m程の四辺形状の溝であるが、それも全周していない。この中には集落に付属する高床倉庫などの施設が設けられていたものと推定される。

古墳時代の遺構は、弥生時代の環濠が埋した後に形成されている。住居址は中央部一帯に、100軒以上確認されており、相当大規模な集落が形成されていた事が推定される。また、扇状地の北西端部に箱式石棺が集中して確認されており、集落と墓域が区別されていたものと推定される。箱式石棺墓の中には土器を供献したり、舶載鏡を副葬した首長墓的性格のものも存在するようになっている。また、箱式石棺の中からは、中国の舶載鏡・勾玉・管玉・素環頭刀子・鉄刀などの貴重な遺物が出土している。

Ⅱ　現況の把握

1．計画地とその周辺の状況

周辺の状況

・計画地の周囲は低層の住宅地となっており、東、北、西の3面が道路と接している。

・西側の道路がバス通りとなっており、利用者のメインアプローチとなる。

・南側の住宅地は間知ブロック積みとブロック塀で計画地と接しており、修景的配慮が必要である。

計画地の状況

・計画地の内、南側の半分で詳細な発掘調査を実施し、今回の環境整備計画では、この部分を中心に遺構の保存・復原を行なう。

・遺構面のレベルが周辺道路のレベルより高い部分があるので、敷地の処理には注意を要する。

2．野方遺跡の特色

・弥生時代の後期～古墳時代前期に形成された集落の複合遺跡である。

・特に南側は十郎川につながる楕円形の環濠に囲まれた竪穴式住居址と、四辺形状の環濠に囲まれた高床式倉庫跡によって構成された大規模な環濠集落と推定される。

・環濠集落は住居址や出土品から弥生時代後期のものと推定される。

・住居址の柱穴は２本、４本、６本の主柱で構成されるが、今回の調査で明らかになったことは、住居址の周辺に小さな柱穴が検出されたことである。これは今まで考えられてきた柱穴とは異なり桁行、梁間などからおろされた木材を固定する材を埋めた柱穴ともと考えられる。この事実は今後多くの類例をまって検討する必要がある。

・住居址からは多数の土器が出土し、中央に炉の跡が明瞭に残されたものもある。

・住居址の中で大形壺形土器の口縁部を打ち割って、炉跡（カマド）としたSC－115がある。これも非常にめずらしい物である。

・Ａ溝（ＳＤ－001）Ａ溝は楕円形を呈するが両辺とも東側に流れる十郎川に流れ込む状況が検出されている。溝と十郎川の比高差は４～５ｍ程度であることから、溝の役目として、排水、防御などと考えられる。溝内からは多量の土器、石器（石錘）とともに魚骨、獣骨、木の実などの自然遺物も検出した。

・Ｂ溝（ＳＤ－002）は直径約30ｍの隅丸方形を呈する。全周することはなく東側17ｍに溝はない。Ａ、Ｂ溝とも出土する土器は弥生後期後半に位置付けられ同一時期に併存したと考えられる。

・環濠の一部には溝を修復したと推定される箇所や、溝の中に廃棄したと思われる土器類が多数出土している。

・Ｂ溝内では弥生後期の住居址は検出できず掘立柱建物２棟を検出した。

・Ａ溝内では弥生時代後期から古墳時代初期にかけての住居址が少なくとも140軒以上検出した。この中で弥生時代後期後半の住居址は８軒検出し、中央部に広場をもつ形状で配列する。

・古墳時代初期になるとＡ、Ｂ溝とも埋められ住居址、掘立柱建物などが数多く検出され、特に南側に集中することが上げられる。また北西部の一ヶ所に墓域が設定され、箱式石棺などが12基以上検出されている。中でも第１号石棺から出土した獣帯鏡、第３号石棺から出土した内行花文鏡がある。

・遺跡で最も盛行した時期は古墳時代初期で、舶載鏡を所有し、鏡片を世襲する被葬者を彷彿させる。

・野方遺跡の場合、弥生時代後期のＡ・Ｂ溝と集落のあり方、古墳時代初頭の集落と墓域の設定についての２つのメインテーマを持つ。

今回の整備計画では弥生時代後期の遺構に対して整備を行うこととした。

Ⅲ　計画理念と基本方針

1．野方遺跡環境整備の基本理念

野方遺跡の環境整備にあたっては、遺構の出土状況が非常に良く、また質が高いことから、次の３本の基本理念に添って環境整備を実施する。

1）遺構の実物を残す

発掘された遺構の内、特に状況が良い部分を覆屋により実物を保存する。

2）住居・倉庫跡を復原する

同時代と推定される住居址・倉庫跡を集落単位の中での配置が分かるような形で復原する。

3）住居・倉庫を復原する

住居、倉庫の建物をそれぞれ１～２棟復原する。

以上、３つの基本理念の流れの中で、より深く野方遺跡の内容を理解し、遺跡発掘、復原のプロセスを理解できる環境整備を行なう。

2．野方遺跡の機能的構成要素

文化施設としての野方遺跡の機能的構成要素は、大きく A．見る　B．知る　C．する という３つのカテゴリーはさらに 人　場　行為 によって構成される。

A．見る

最も基本的な機能である、展示施設・サイン・全体のランドスケープが対象となる。

B．知る

知識集積施設としての覆屋・展示施設・解説板などが対象となる。

C．する

実際に生活様式等を体験するための企画・運営・指導が対象となる。

これが一体となって、学ぶ施設・場としての野方遺跡が有効に機能することとなる。

3．計画の基本方針

1）弥生時代の生活空間の再現

見る…興味をもたせるために。

a．住居・倉庫・環濠など生活施設の再現。

b．生活の場としての集落単位（ムラ）のトータルな空間再現。

c．当時の植物（有用植物・自然植生）の再現。

2）弥生時代の生活様式の展示

知る…確認するために

a．覆屋による遺構面の保存・展示。

b．遺構の復原展示と、住居・倉庫の復原展示。

c．覆屋での室内展示。（パネル解説・出土品展示）

d．屋外での解説、サイン展示。（施設解説・植物解説他）

3）弥生時代の生活様式の体験

行動する…より深く理解するために

a．衣・食・住の製作体験。

b．道具類の製作体験。

4）文化財の保存技術の体験

見る・知る・行動する…文化財保存の意義とプロセスを総合的に理解するために

a．発掘過程の解説展示。

b．本物の出土品に直接さわり、組み立てる。

生活空間と生活様式の構成

衣 ――・布を作る
　　・布を着る

食 ――・食物を採取、栽培する
　　・食物をストックする
　　・食物を料理する
　　・食物を食べる
　　・残りを捨てる

住 ――・建材を採取する
　　・住居・倉庫を建てる
　　・住む

弥生時代の衣と食

a．衣

- 毛皮 ― イノシシ・シカ
- 布
  - 織布 ― カラムシ・麻
    - 木綿
      - カジノキ
      - コウゾ
  - 編布 ―「もじり編み」による線維製品 ― ワラ
  - 絹
- 装身具
  - 貝
  - 石・玉
  - 歯・骨
  - 青銅
- 色
  - 赤 ― 酸化鉄、水銀朱
  - 黒 ― マンガン鉱物、炭素

b．食

- ドングリ類 ― アク抜き（煮沸，水さらし）
  - ― 粉，顆粒状に加工
- 穀類
  - コメ
  - ムギ類他雑穀（出土例少ない）― 粉食でなく粒食（ムギはオオムギが主）
- 動物肉
  - 動物
  - 鳥類
- 魚肉
  - 海水魚
  - 淡水魚
- 貝類
  - 海水貝　二枚貝が多い
  - 淡水貝
- 海そう
- 調味料
- 酒

1）計画の基本方針

『歴史とふれあううるおいのある町創り』を目指して

■ 弥生時代と古墳時代の複合遺跡としてユニークなものであり、かつわかりやすい遺跡であるので、市民に広く親しまれ、また学校教育・社会教育に資する史跡として整備する。

■ 出来るだけ弥生時代及び古墳時代の旧状に復原し、当時の集落のあり方と共に、生活内容が分かるようにする。

■ 当時の生活様式を復原しながら、「周囲の環境に調和した空間創りを目指す。」

2．基本計画

ソーニング計画

1．空間構成

1）ソーニング

今回の環境整備では、環濠に囲まれた住居址と倉庫のある南側を中心に保存、復原整備を行う。北側の部分は将来の詳細発掘調査に備えて、芝生の広場を中心とした史跡広場とし、史跡来訪者や周辺住民が自由に使える広場として整備する。

2）利用者動線計画

バス停のある西側をメインエントランスと設定し、住居址と倉庫跡を見渡すことができる中央まで来訪者を引き込んだ所に、総合解説板のある解説広場を設ける。そこから住居址ゾーンと倉庫跡ゾーンの回遊ルートを主動線として設定する。

3）管理動線計画

遺跡の環境をできるだけ自然に整備することと、園路の混乱を防ぐことから、利用者の主動線と兼ねることとする。

4ｔ車クラスの通行を考慮した断面構成と、巾員3.0mを確保する。

■ 遺構全体を弥生時代遺跡ゾーン、古墳時代ゾーンの２つに分ける。

■ 敷地西側の野方遺跡公園前バス停付近をエントランスゾーンとする。

■ 管理上及び遺構保存上の視点から、遺構覆屋をエントランスゾーン内に設ける。

■ 遺構覆屋中心に、復原した遺跡を結ぶ動線を設定する。

■ 敷地外周は、周辺環境との調和、また遺跡らしさを演出する植栽ゾーンとする。

■ 弥生時代遺構ゾーンは、復原住居址ゾーン・復原墓域ゾーンで構成する。

■ 各々の遺構ゾーンと動線は一体として計画する。

展示施設計画

1）解説広場

住居址と倉庫跡から構成される集落単位としての全体を見渡しながら、総合解説板により遺跡の全容を紹介する。

2）覆屋

住居址の遺構そのものを出土した土器類や炉の跡も含めて、発掘された状態のままで展示・解説する。

同時に弥生時代の生活様式、環溝集落の成り立ち、遺跡発掘調査のプロセスなどパネル・出土品などを用いて展示、解説する。

3）住居址ゾーン

住居址の柱跡、炉の跡など、実際に触れても良い状態で復原するとともに、住居を2棟復原することによって、さらに実感として弥生時代の生活様式を理解できるよう展示、解説する。

4）倉庫跡ゾーン

住居址ゾーンと同様、高床式倉庫を2棟平面表示し、当時の食料事情などを中心に展示、解説する。

5）復原環濠

環濠集落であることが野方遺跡の大きな特徴であり、発掘された形状に近く、できるだけ自然な形となるよう復原・展示するとともに、環濠のもつていた役割などを解説する。

6）集落単位

全体がひとつの集落であったということが認識できるような園路・広場の形態・素材とし、植栽も当時の有用植物・自然植生を中心に構成し、解説する。

造成排水計画

■ 原則的に遺構保存の視点から盛土（厚さ1m程度）を行なう。

■ 復原住居・環濠・住居址等は盛土盤の上に設置する。

■ 外周の植栽地は、1.5m程の盛土を行なうものとする。

■ 排水方法は出来る限り表面排水によって集め、さらに開渠による集水方法を優先し、管渠は極力避ける。

■ 復原環濠の雨水は、暗渠排水によって処理する。

■ 外周はH＝0.6m程度の低い石積によって土留処理を行なう。

植栽計画

■ 周辺住民にとって緑溢れる空間となる様に配慮する。

■ 史跡らしさを演出すると共に、当時自生していたと思われる様な樹種選定を行なう。

■ 食栽は1.0m程の盛土盤上で行なうが、地形のボリューム感と合せ、低木・中水・高木配置により、より一層厚みのある緑のマツスを形成する。

■ 北側の食栽地には、壁面を遮蔽する様な配植を行なう。

■ 市民にうるおいを与え、自然の変化を楽しめる四季感溢れる樹種を選定する。

■ 史跡全体を芝生で覆い、環濠は他の地被類等で法面を保護する。

□ 高木

マツ・イチョウ・クスノキ・タブノキ・ヤマモモ・モチノキ・ヤナギ・ヤマモミジ・ヤマザクラ・アンズ・コナラ等

□ 中木

ヤマツバキ・サザンカ・カクレミノ・ネズミモチ・ウメモドキ・コブシ等

□ 低木

イヌツゲ・ヤマツツジ・ヤツデ・カンツバキ・ハギ・ヤマブキ・ウツキ等

□ 地被類

ノシバ・クマザサ等

尚当時自生していたと思われる樹種選択資料として、板付遺跡における弥生時代遺物包含層の花粉分析による結果に基づく。

2－4　施設計画

野方遺跡環境に際し、下記に示す施設を設置する。尚、整備は全て遺構確認調査の後に行なう。

遺構保存覆屋

・ 遺構保存覆屋は、他に展示室・管理室及び便所を含めた建築物とする。

・ 出来る限り覆屋部分を広く取るように配慮する。

・ 出土品の展示は、展示コーナーの他に壁にパネルを掛け、遺跡の案内や説明を行なう。

・ 遺跡全体を展望出来るテラスを２階に設ける。

・ 延面積
- 遺構部分 —— 127.0㎡
- 展示室 —— 42.0㎡
- 管理室 —— 14.6㎡
- 便所 —— 18.9㎡
- 通路 —— 66.3㎡
- テラス —— 31.5㎡
- 計 —— 300.3㎡

弥生時代復原住居及び高床倉庫

- 竪穴住居１棟、高床倉庫２棟を平面表示し、竪穴住居は１棟骨組の状態で復原する。
- 出来る限りオープンな見せ方をするが管理上、復原住居を低木で囲む可能性もある。(復原住居を囲む方法としては、１棟づつ囲む方法と、全体を囲む方法が考えられる。)

復原環状溝

- Ａ溝・Ｂ溝共、発掘調査通りの位置・形状で復原する。
- 溝内は地被植物で保護する。(ex・クマザサ)
- 環状溝の雨水は、暗渠で排水する。

古墳時代住居址

- 住居址の形を低木で表現し、柱跡や炉跡を丸太等で示す。
- 住居址の内部は砂利等を敷いて柱跡等の形を明確に表現する。

復原墓域

- 墓跡として、甕棺・土拡墓・箱式石棺をそれぞれ違った方法で復原する。
- 甕棺は外周を雑石で囲み、棺の形や大きさを表現する。
- 土拡墓・箱式石棺は、外周を雑石で囲み、内は低木で覆う。

外周土留

- 高さ0.6ｍの雑石石積で外周を囲み、史跡の持つ地味な雰囲気を表現する。
- 管理上高さ1.5ｍのフェンスを設ける。材質は黒の角パイプとし、重厚な趣を演出する。

園路

- 管理車も通行を考慮し、園路巾員は３ｍとする。
- 園路横断は片勾配とし、側溝を兼ねた雑石縁石を片方だけ設置する。
- 舗装材は土舗装とする。

木橋

- 復原環状溝と園路が交叉する箇所（２ヶ所）は橋を設置する。
- 構造的にフレームは鋼材で組むが、仕上げ素材は全て木材を使用する。
- 幅３ｍ、長さ５ｍ程の太鼓橋とする。

説明板・ベンチ

- 史跡広場に野方遺跡の地図を含めた総合説明板を設置する。
- 各復原遺構ごとに、説明板を設置する。
- 復原住居付近にベンチを設置する。
- 説明板・ベンチ共に材質は木材とする。

照明灯

- 史跡広場付近にのみ、常夜灯を4基設置する。

Ⅲ　事業計画

1）実施計画

史跡全体を整備するためには相当な期間を要するが、用地取得後すでに10年余りを経過しており、早急に市民の憩いの場として活用できるようにするという要請もあるため、当面昭和61年～平成3年度の6年間で、一応公開できるだけの整備を行なう。

昭和61年度

弥生時代遺構ゾーンを中心に造成工事・施設工事及び植栽工事を行なう。なお、復原住居は除く。

昭和62年度

古墳時代遺構ゾーンを中心に造成工事・施設工事及び植栽工事を行なう。

昭和63年度

エントランスゾーンを中心に遺構保存覆屋・復原住居等の施設工事を行なう。

平成元年度

覆屋建設等の施設工事を行なう。

平成2年度

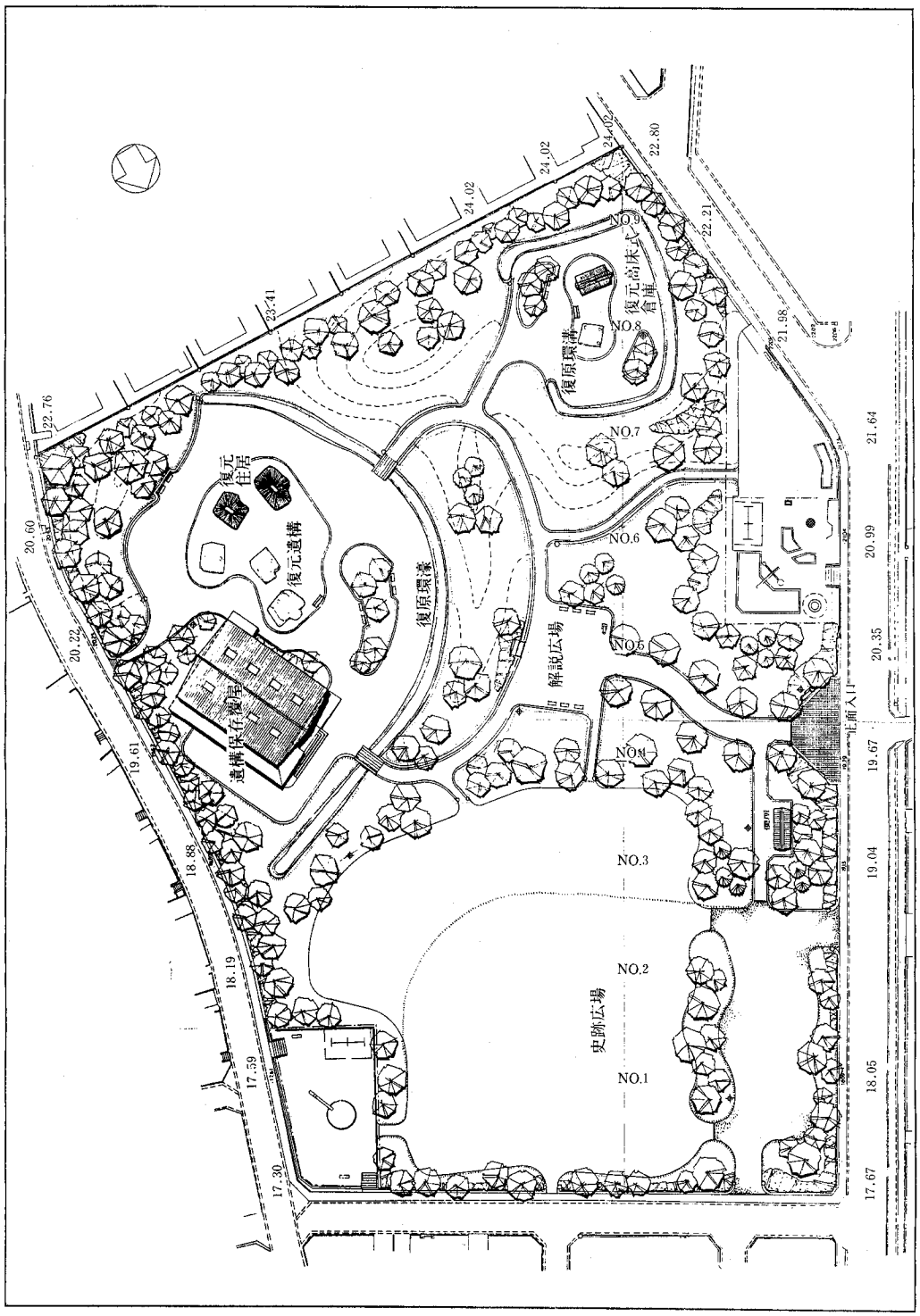
A環濠の復原・平面住居の復原、植栽工事を行なう。

平成3年度

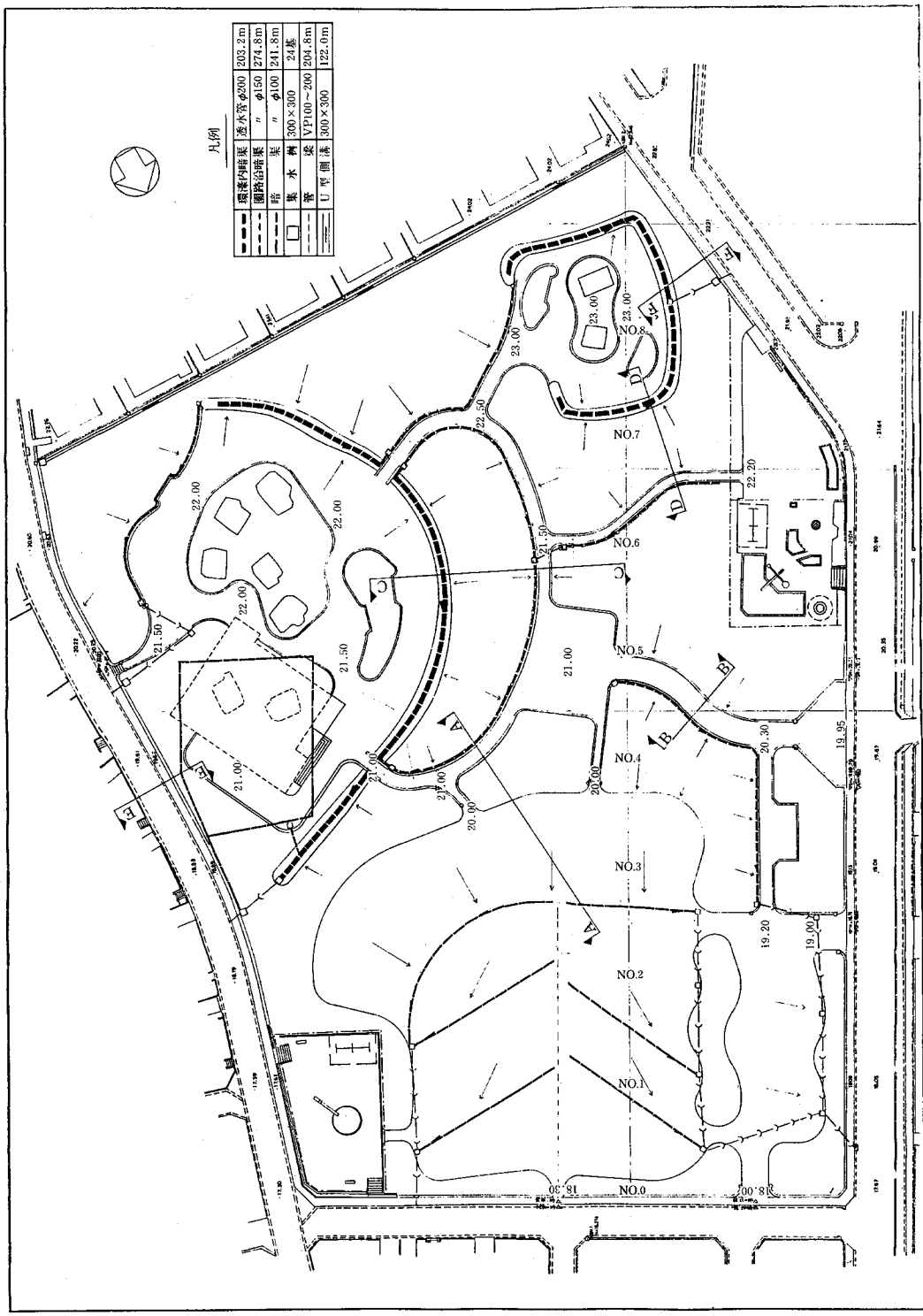
復原住居・骨組だけの住居等の施設工事及び植栽工事等を行なう。

第Ⅳ章

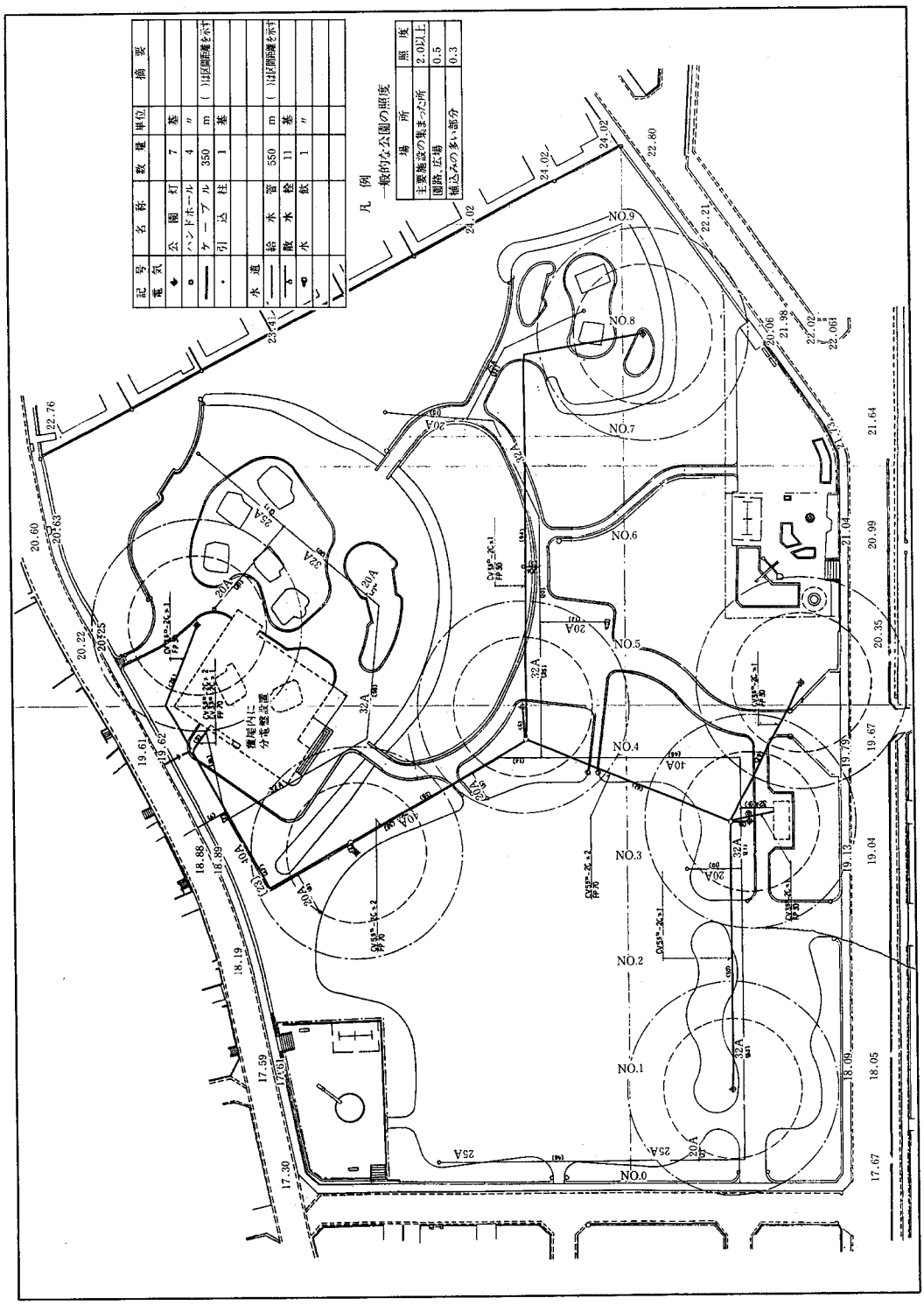
野 方 遺 跡 基 本 設 計 図



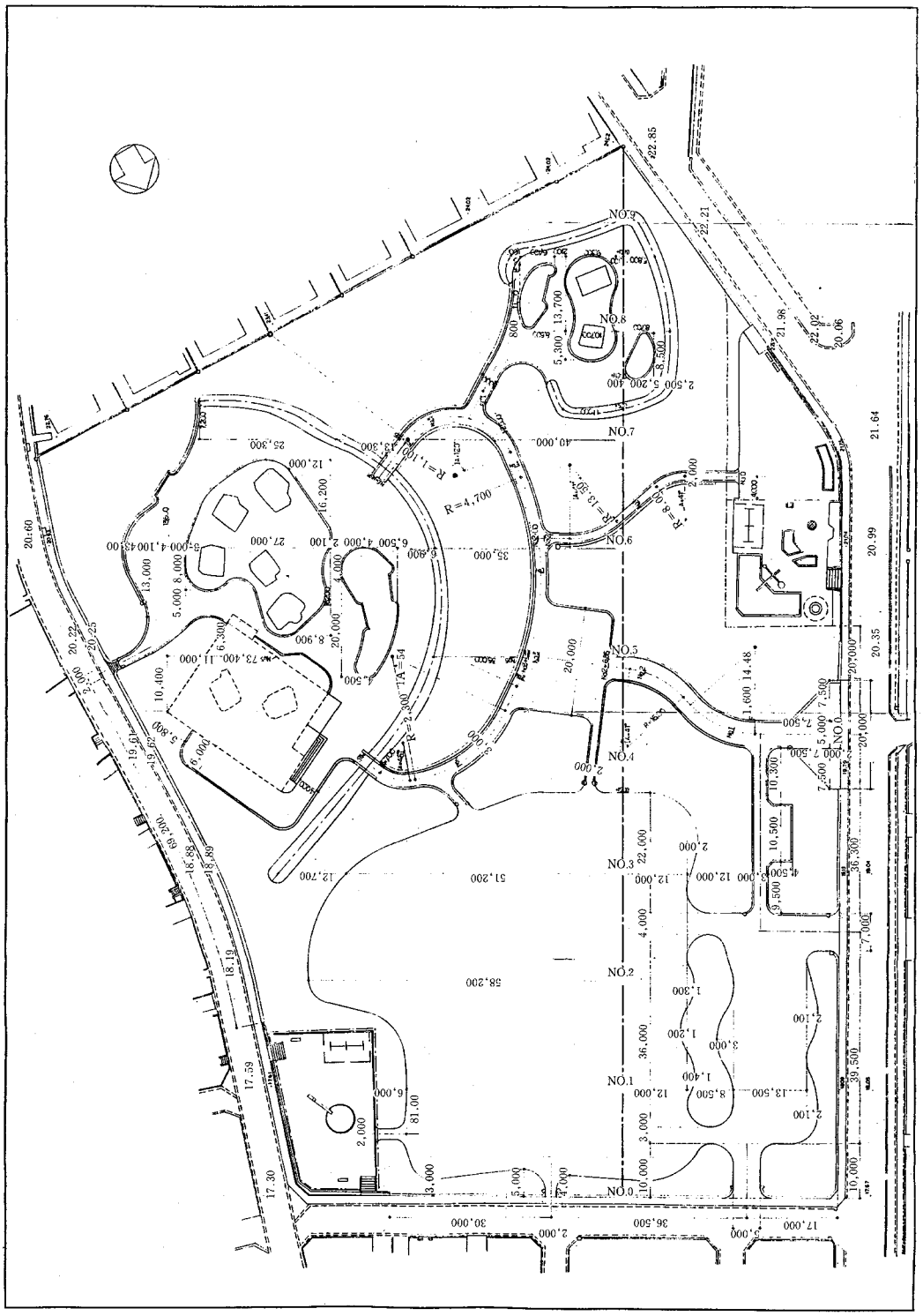
第29図　野方遺跡環境整備基本設計平面図（縮尺約1/1,000）



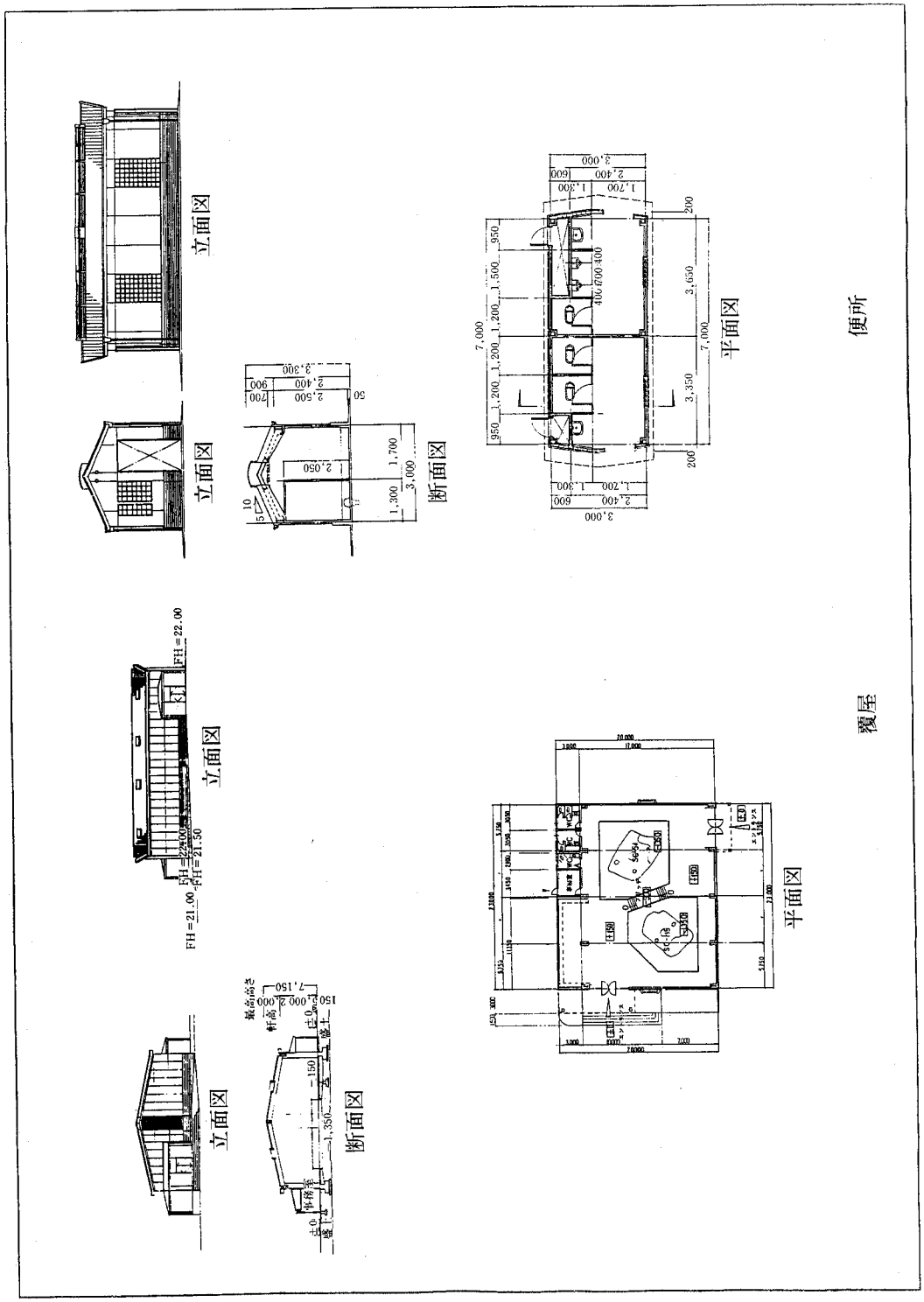
第30図　野方遺跡環境整備基本設計排水計画図（縮尺約1/1,000）



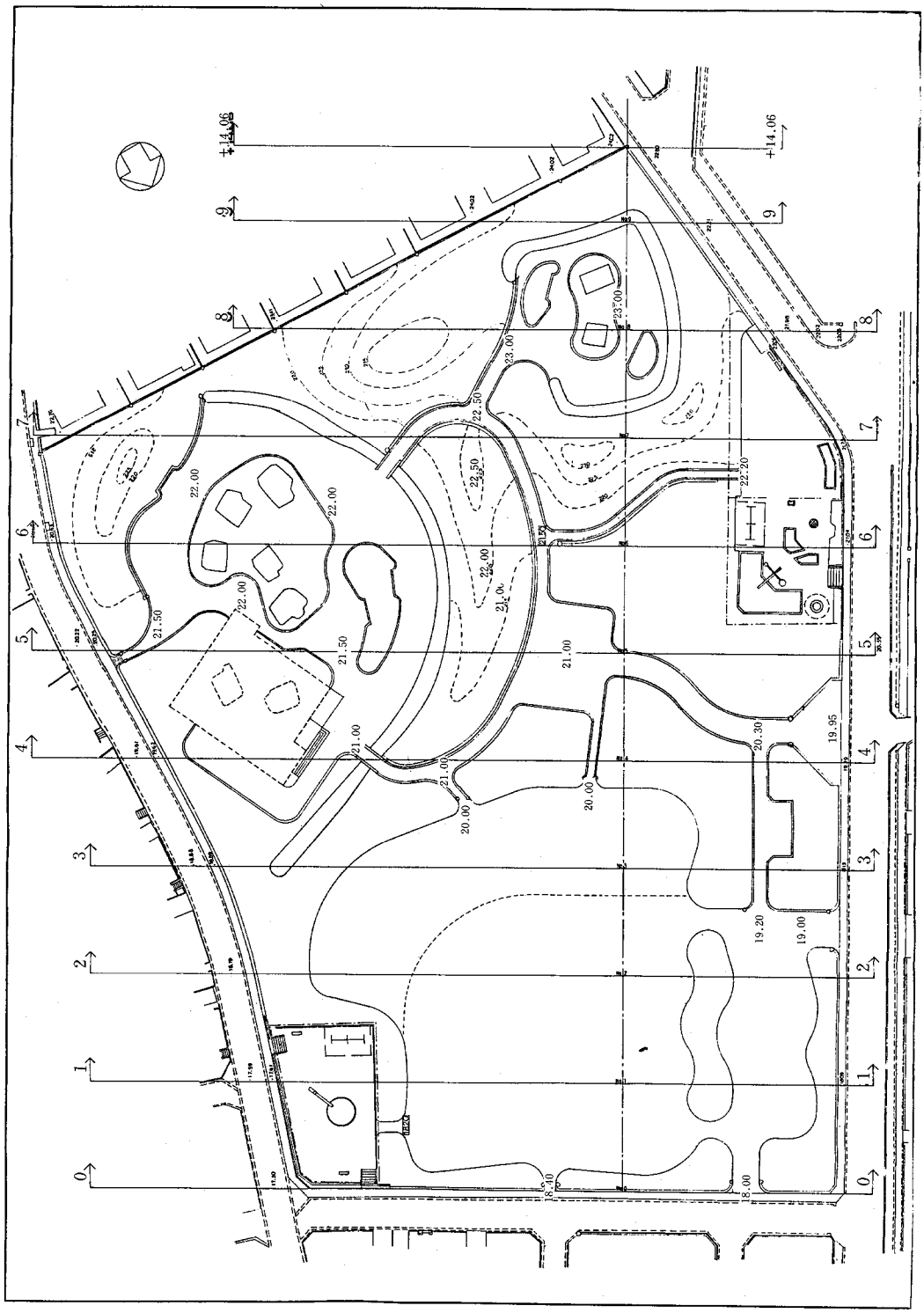
第31図　野方遺跡環境整備電気・水道配管平面図（縮尺約1/1,000）



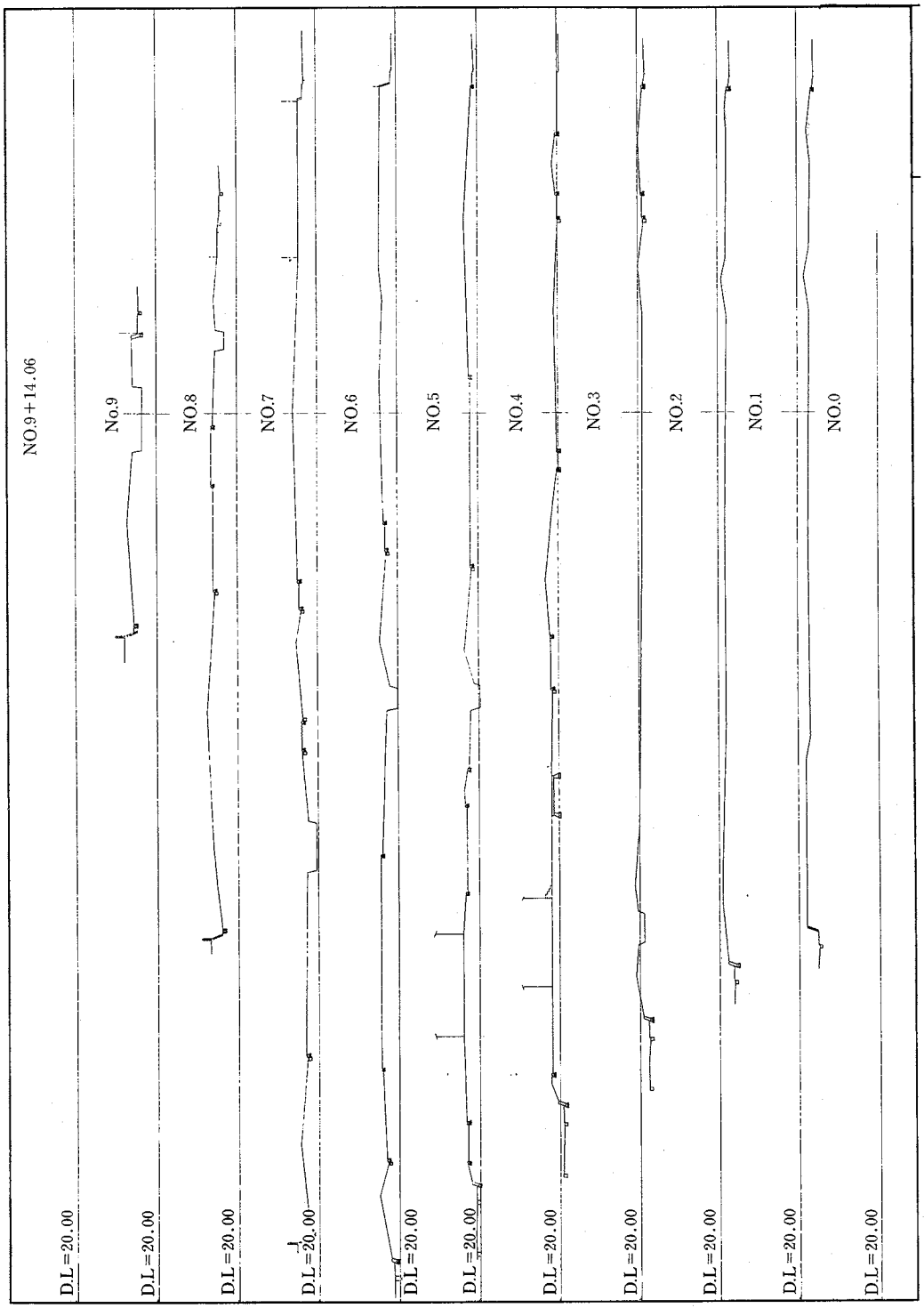
第32図　野方遺跡環境整備基本設計施設割付図（縮尺約1/1,000）



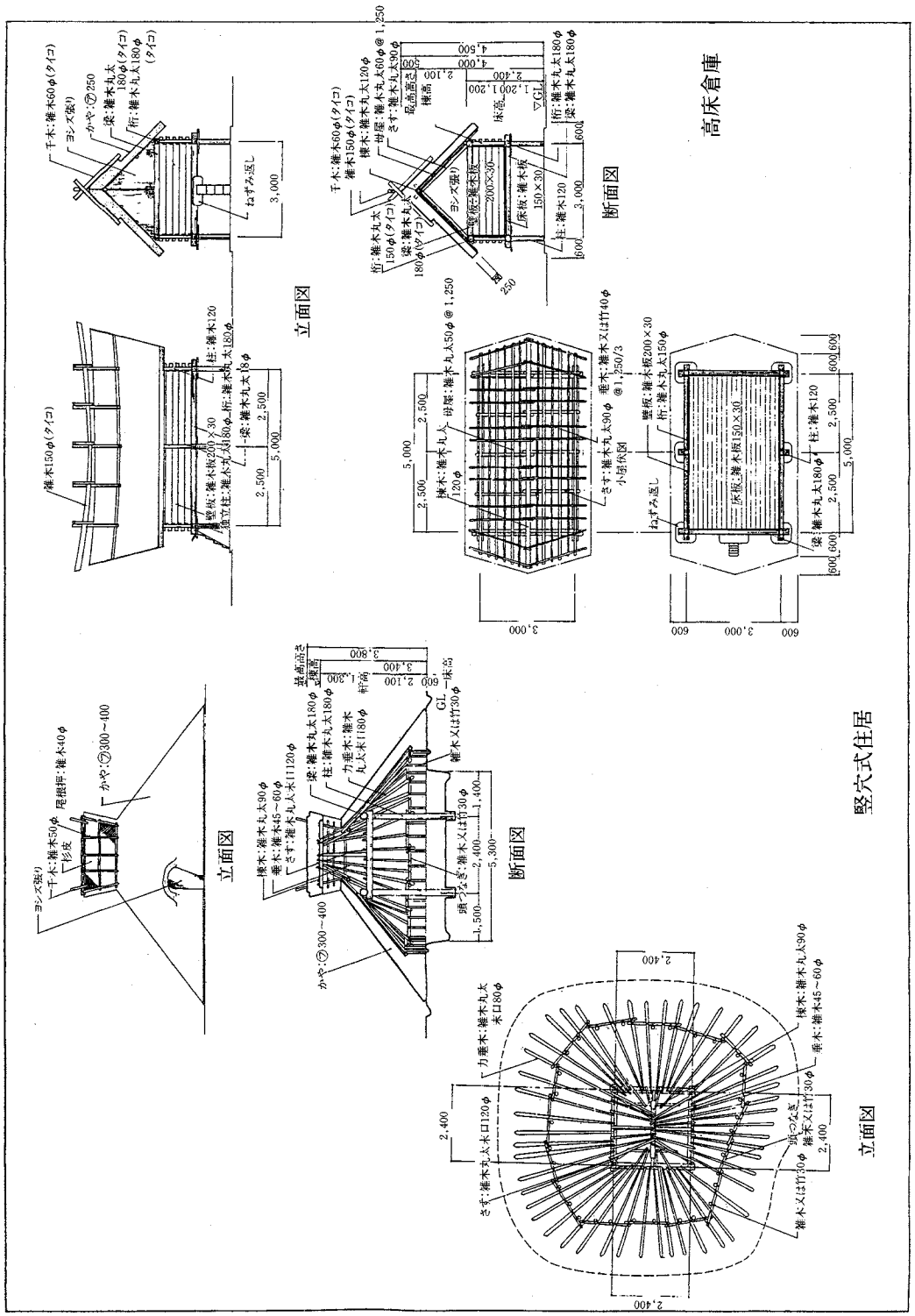
第33図　野方遺跡環境整備基本設計覆屋・便所図（縮尺約1/50）



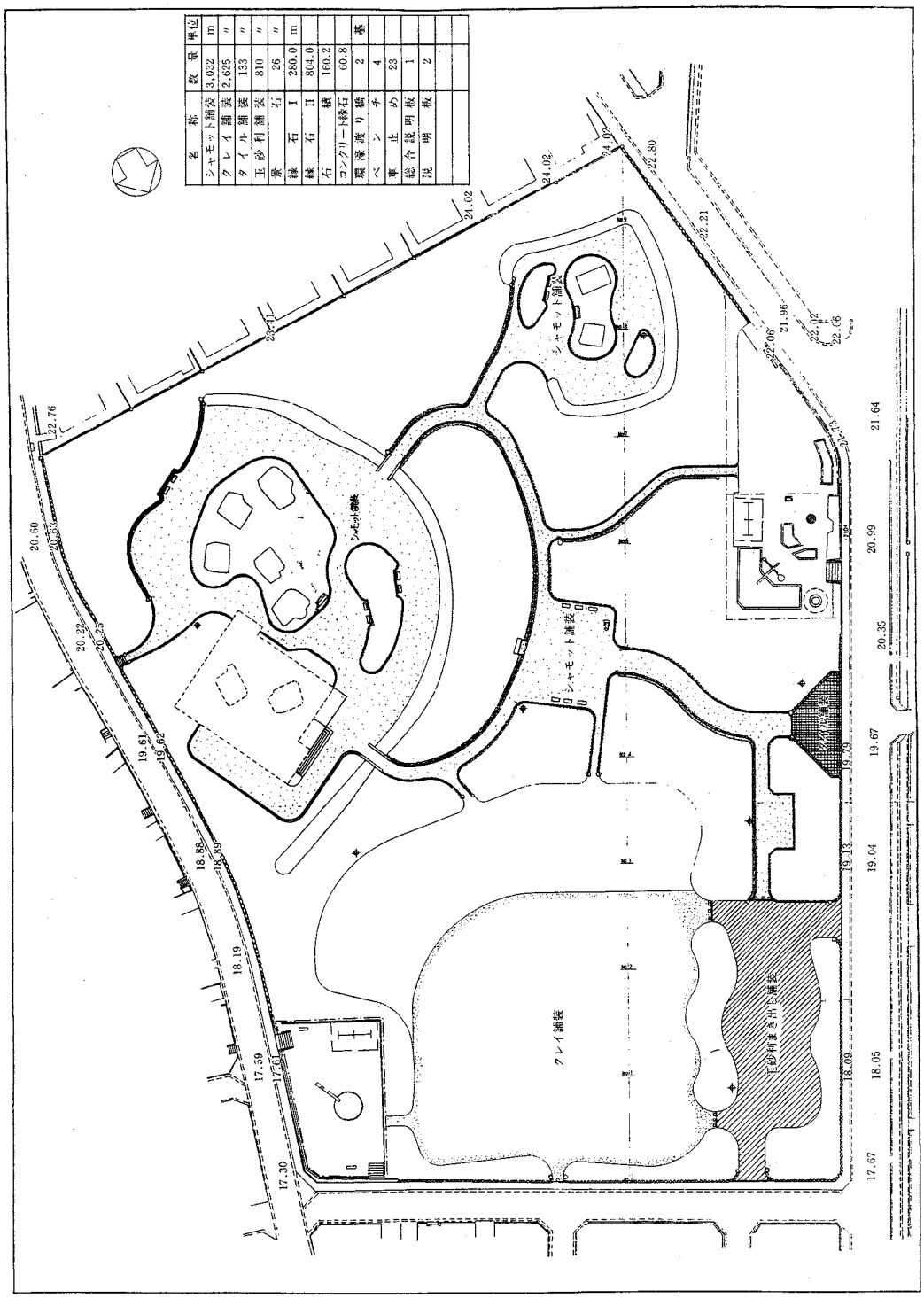
第34図　野方遺跡環境整備基本設計縦断断面割付図（縮尺約1/1,000）



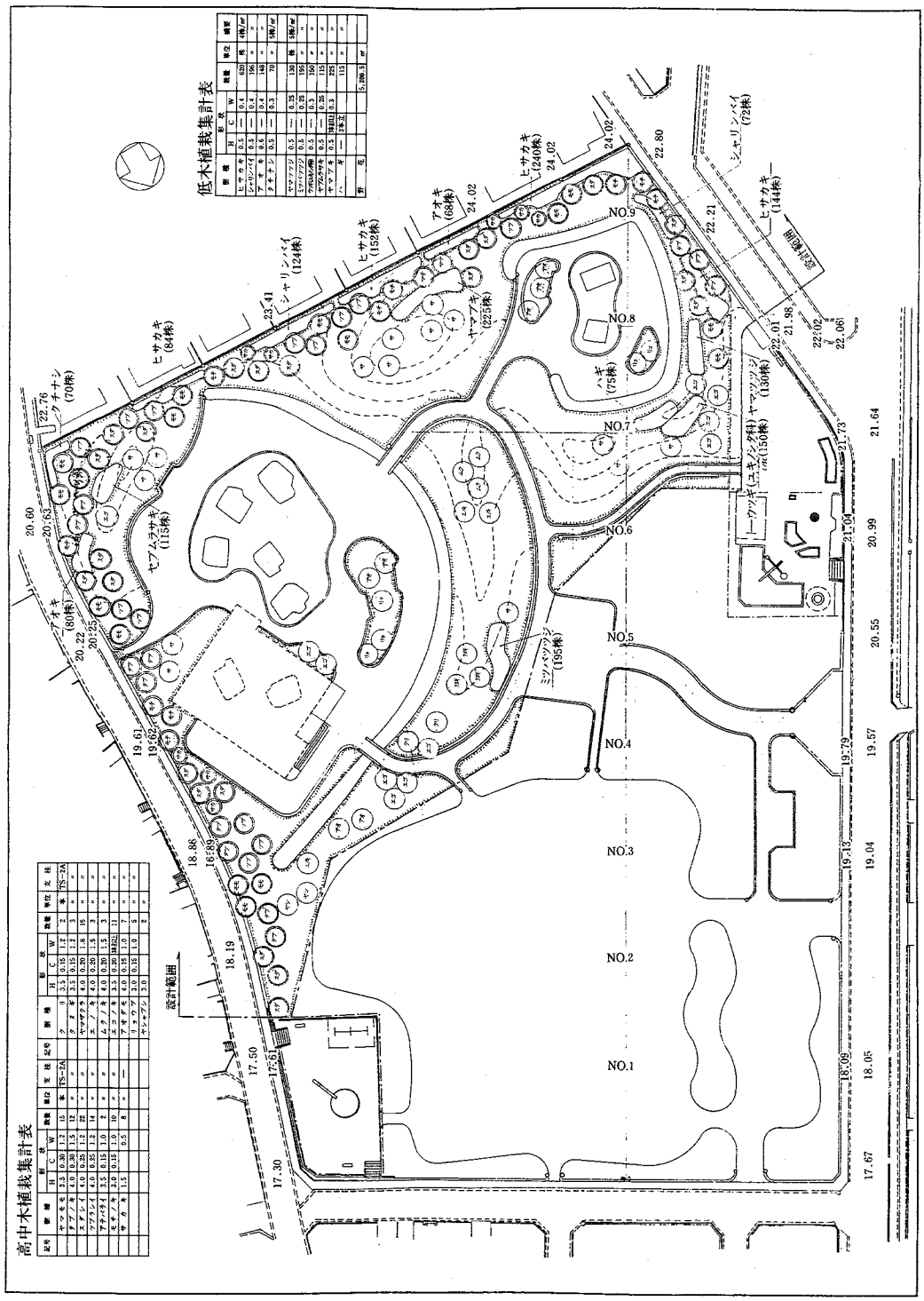
第35図　野方遺跡環境整備基本設計縦断断面図（縮尺約1/50）



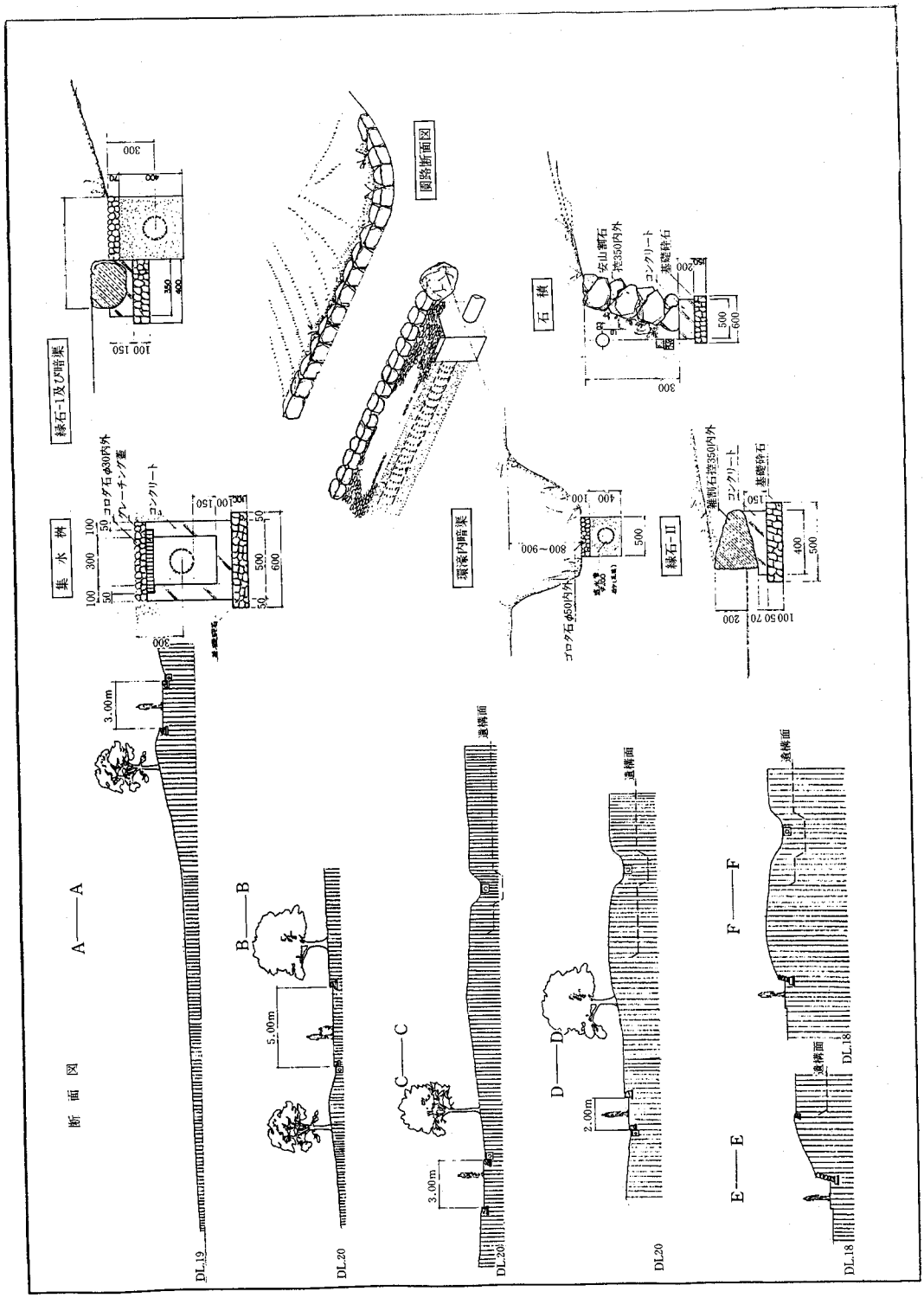
第36図　基本設計復原住居、高床式倉庫平面図（縮尺約1/1,000）



第37図　野方遺跡環境整備実施設計施設割付図（縮尺約1/1,000）



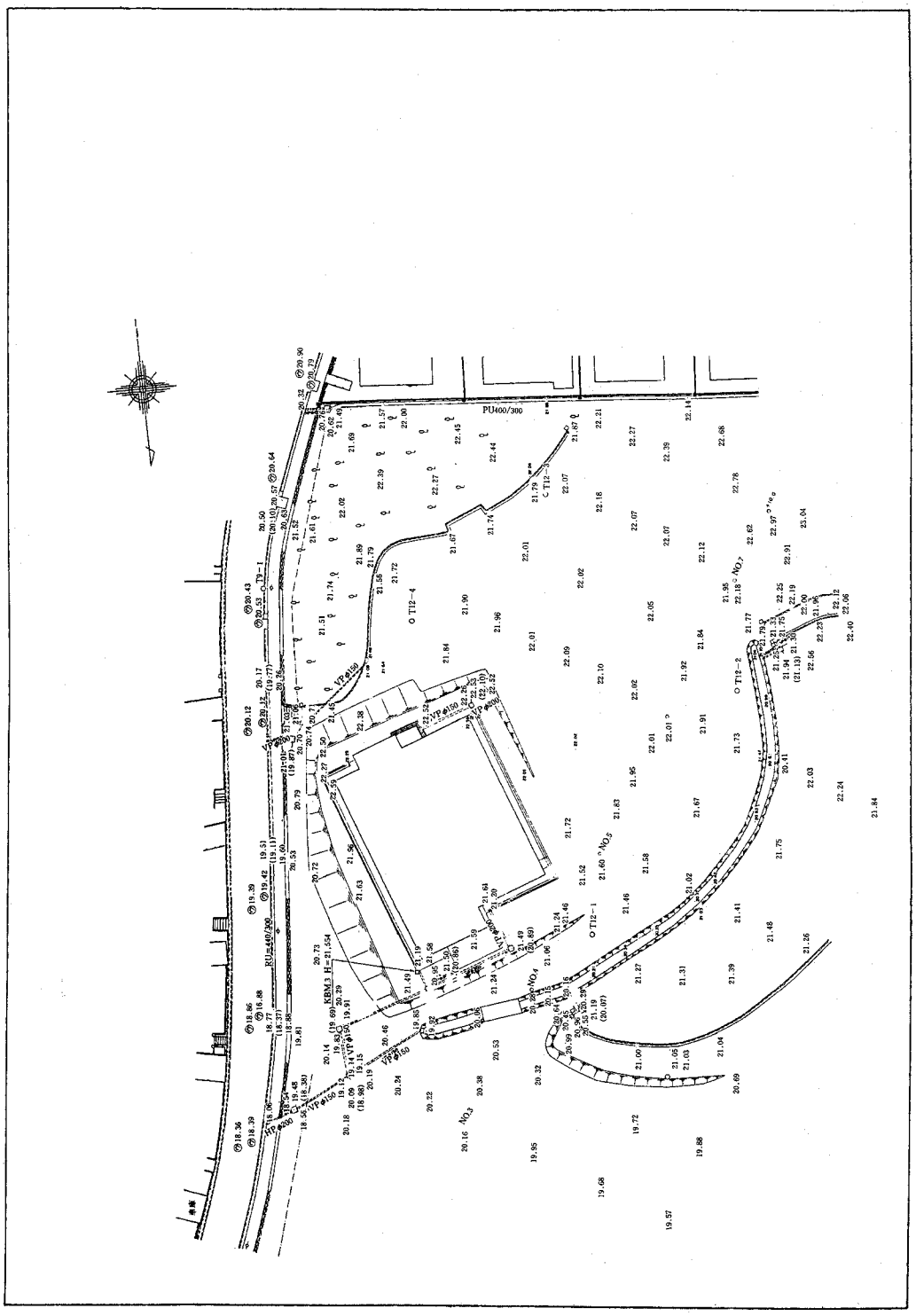
第38図　野方遺跡環境整備実施設計植栽配置図（縮尺約1/1,000）



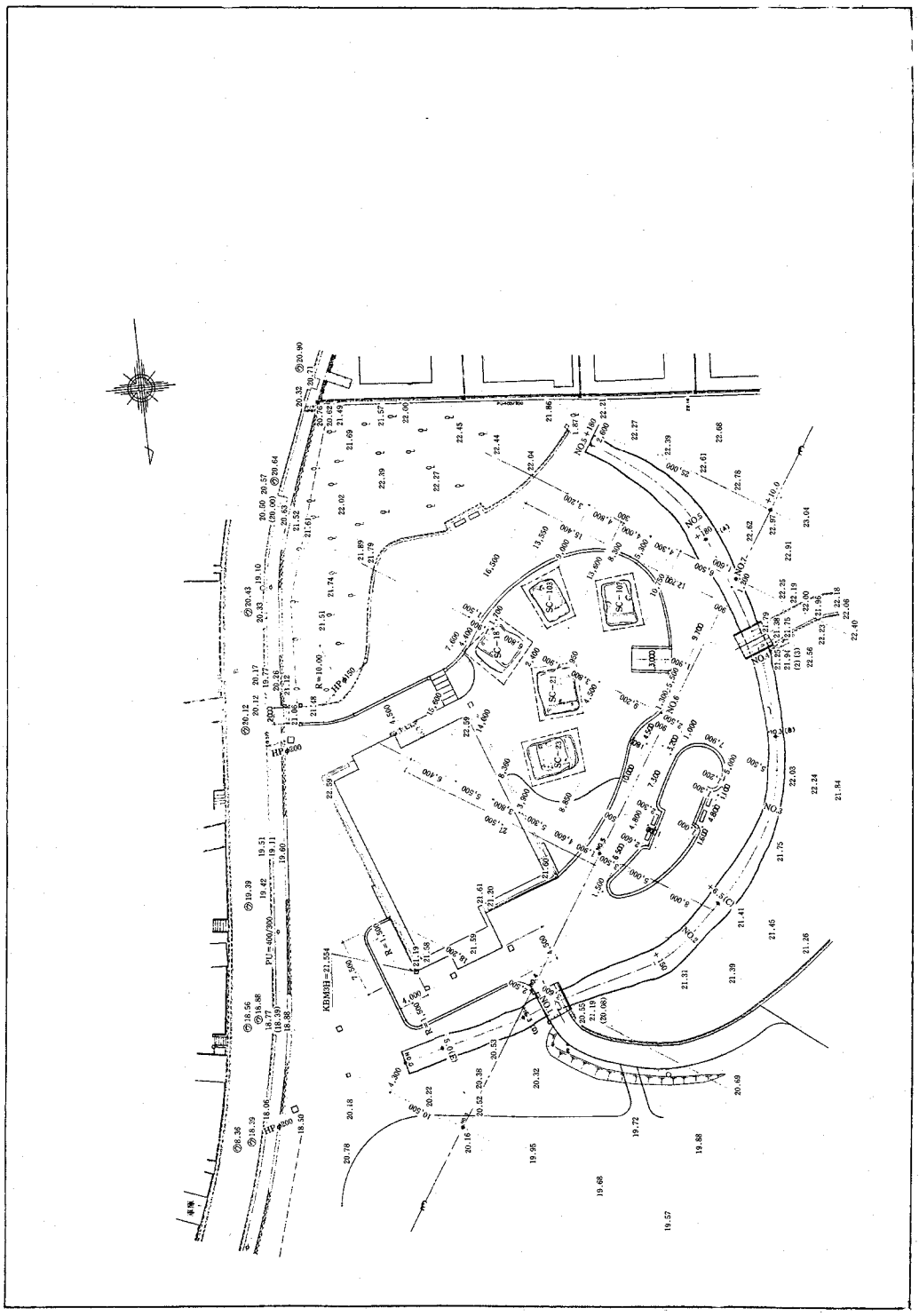
第39図　野方遺跡環境整備実施設計詳細図（縮尺約1/30、1/50、1/200）

第V章

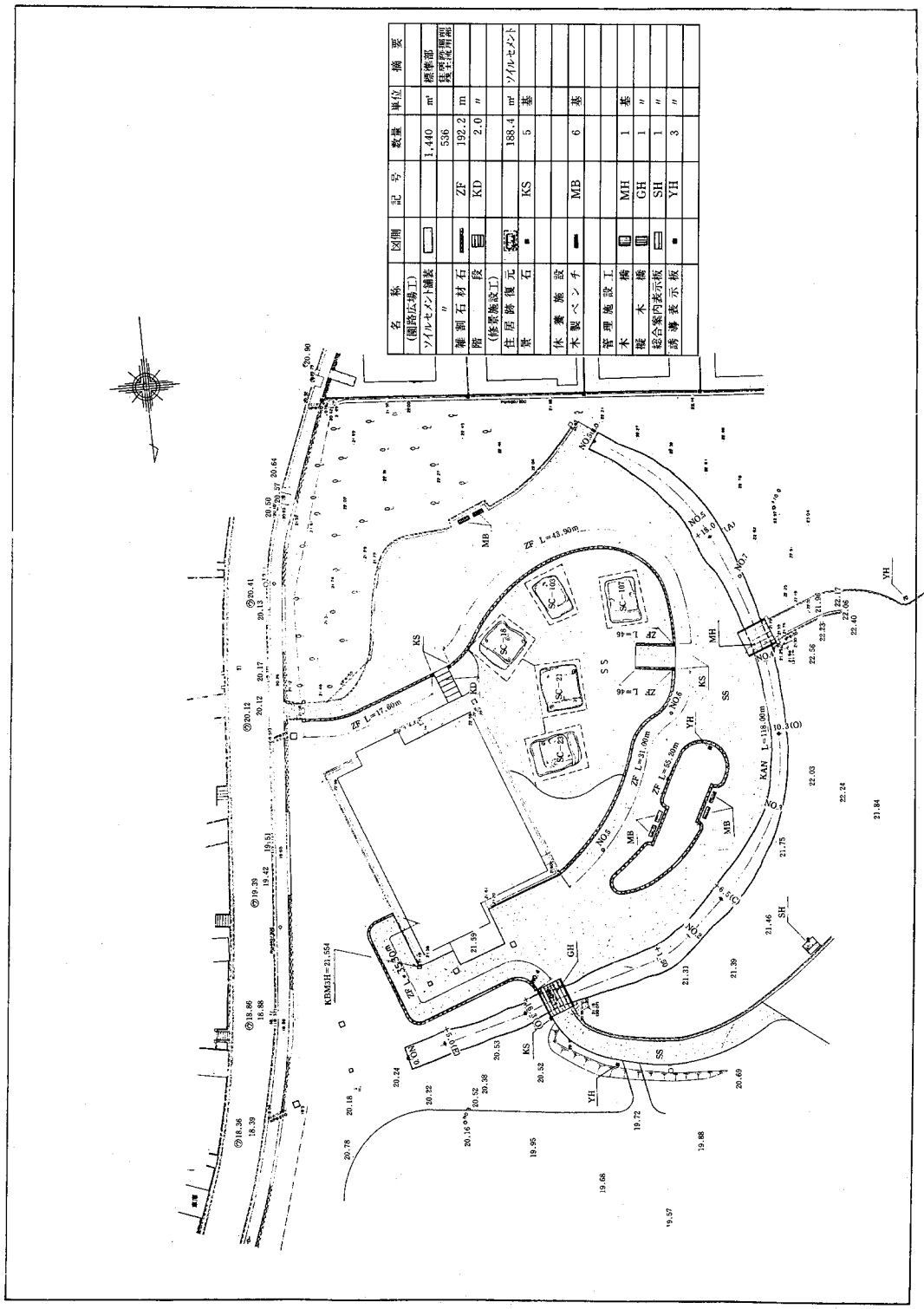
野方遺跡実施設計図



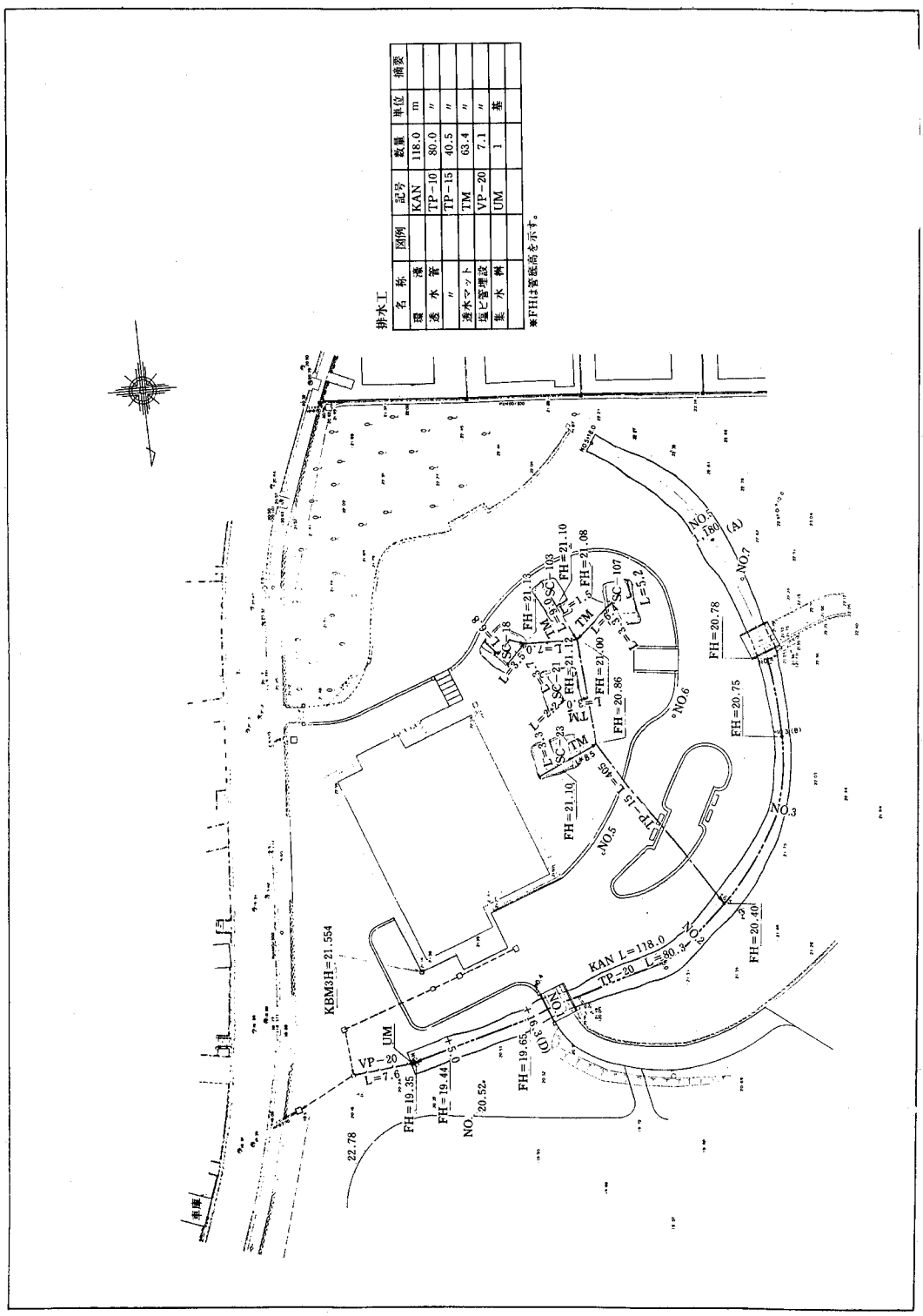
第40図　野方遺跡整備計画平面図（縮尺約1/1,000）



第41図　野方遺跡環境整備実施設計施設割付図（縮尺約1/1,000）



第42図　野方遺跡環境整備実施設計施設配置図（縮尺約1/1,000）

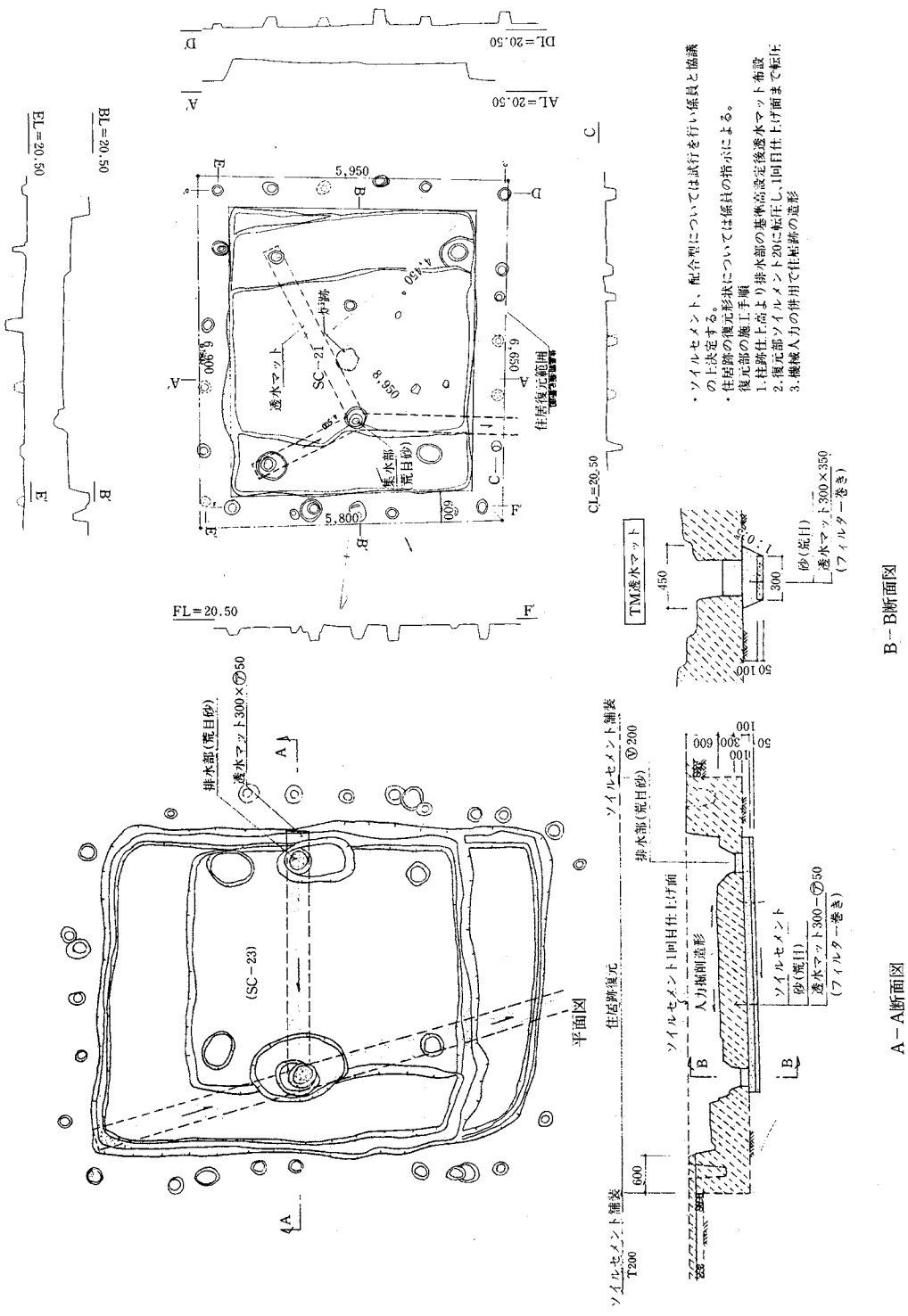


排水工

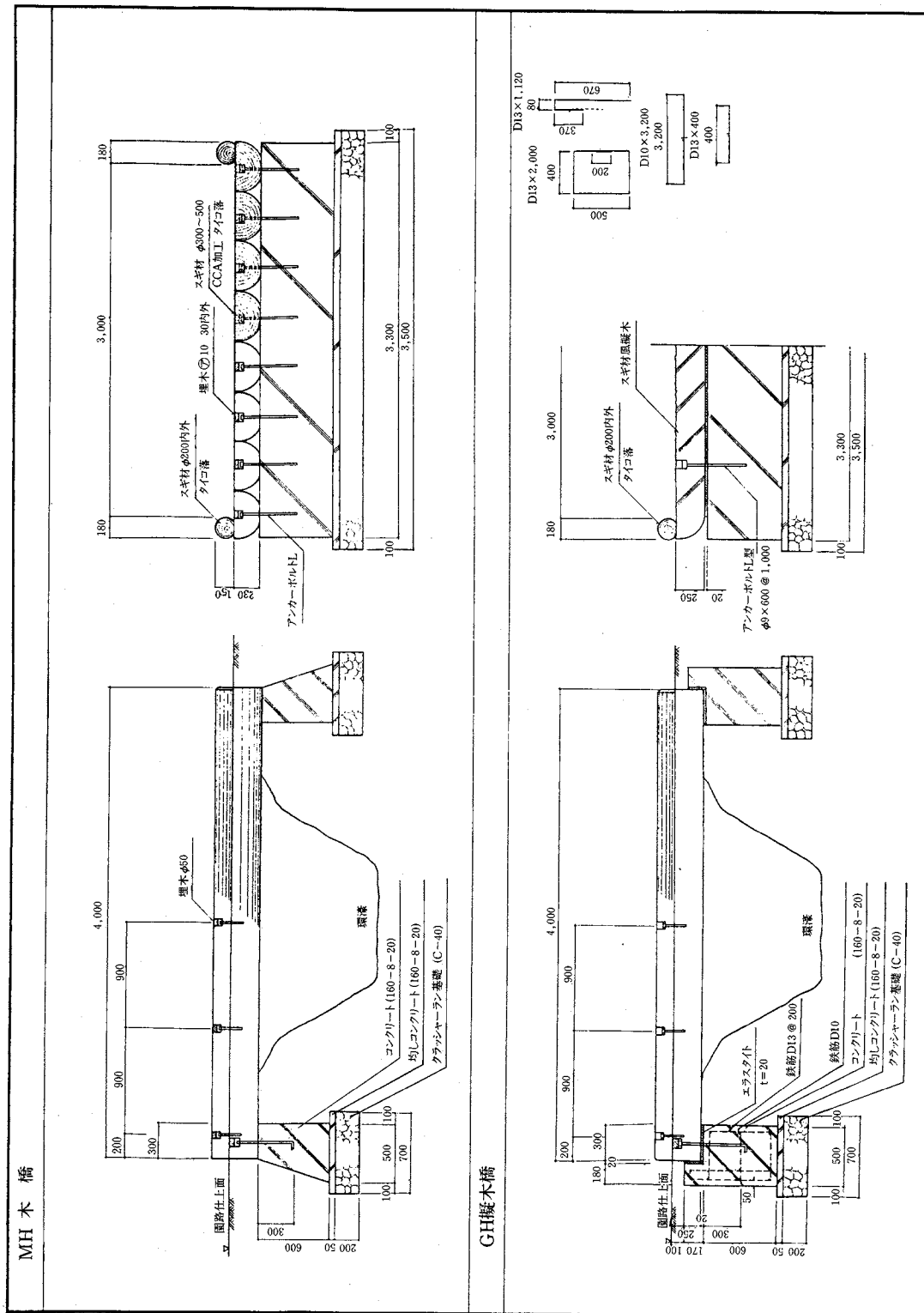
名称	図例	記号	数量	単位	摘要
環溝		KAN	118.0	m	
透水管		TP-10	80.0	〃	
〃		TP-15	40.5	〃	
透水マット		TM	63.4	〃	
塩ビ管埋設		VP-20	7.1	〃	
集水桝		UM	1	基	

※FHは管底高を示す。

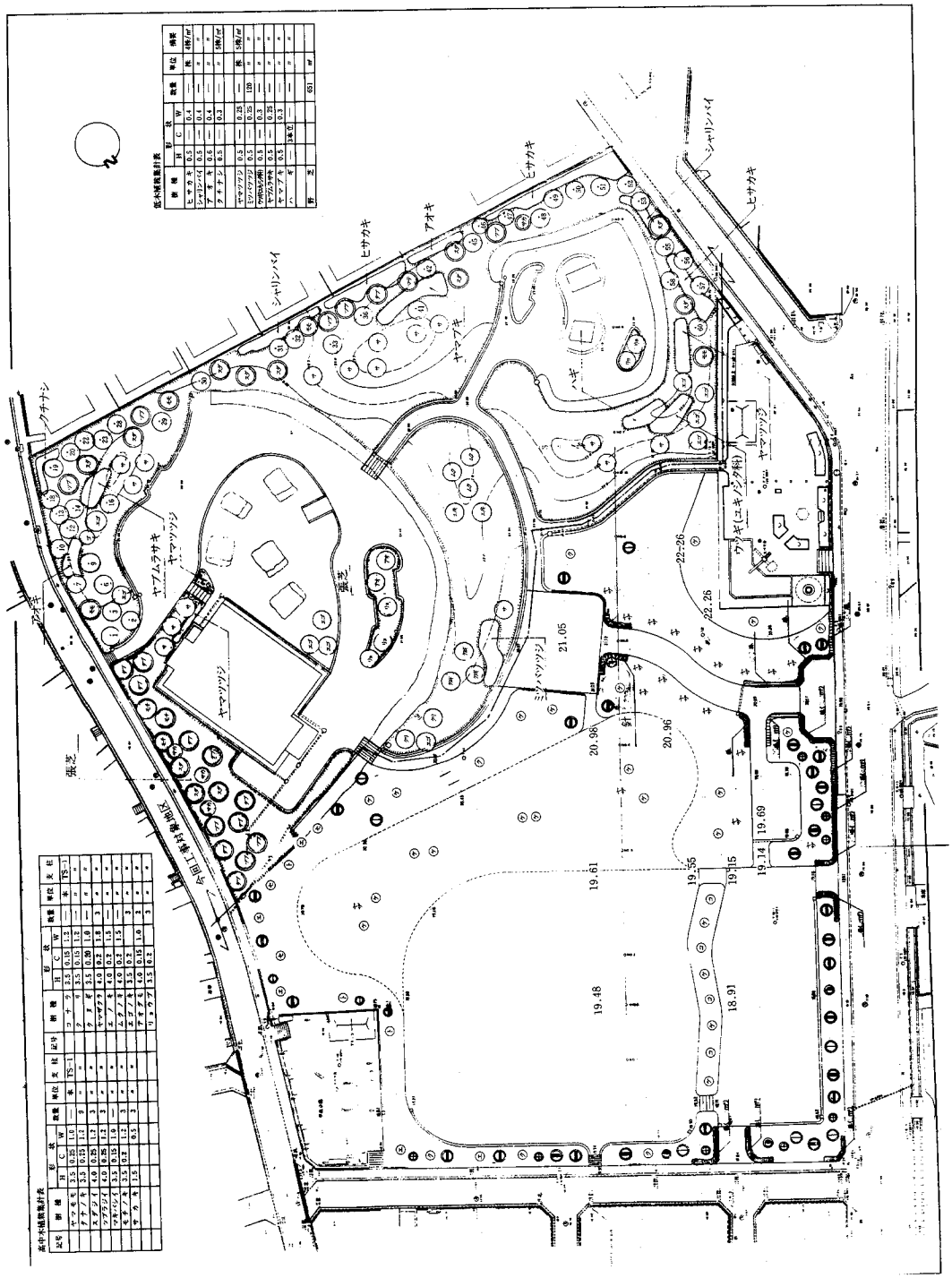
第43図　野方遺跡環境整備実施設計排水計画図（縮尺約1/1,000）



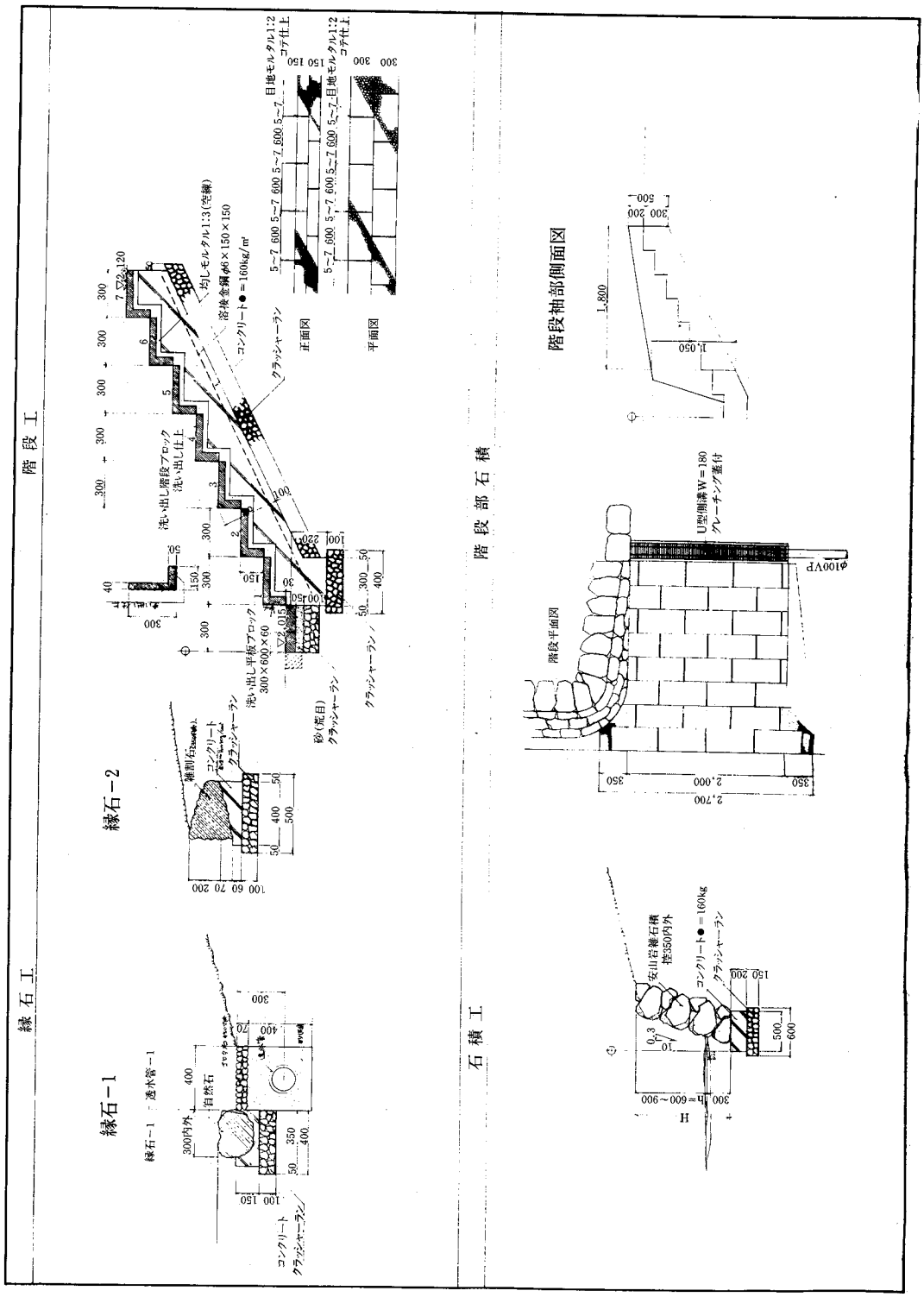
第44図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址標準断面図（縮尺約1/50）



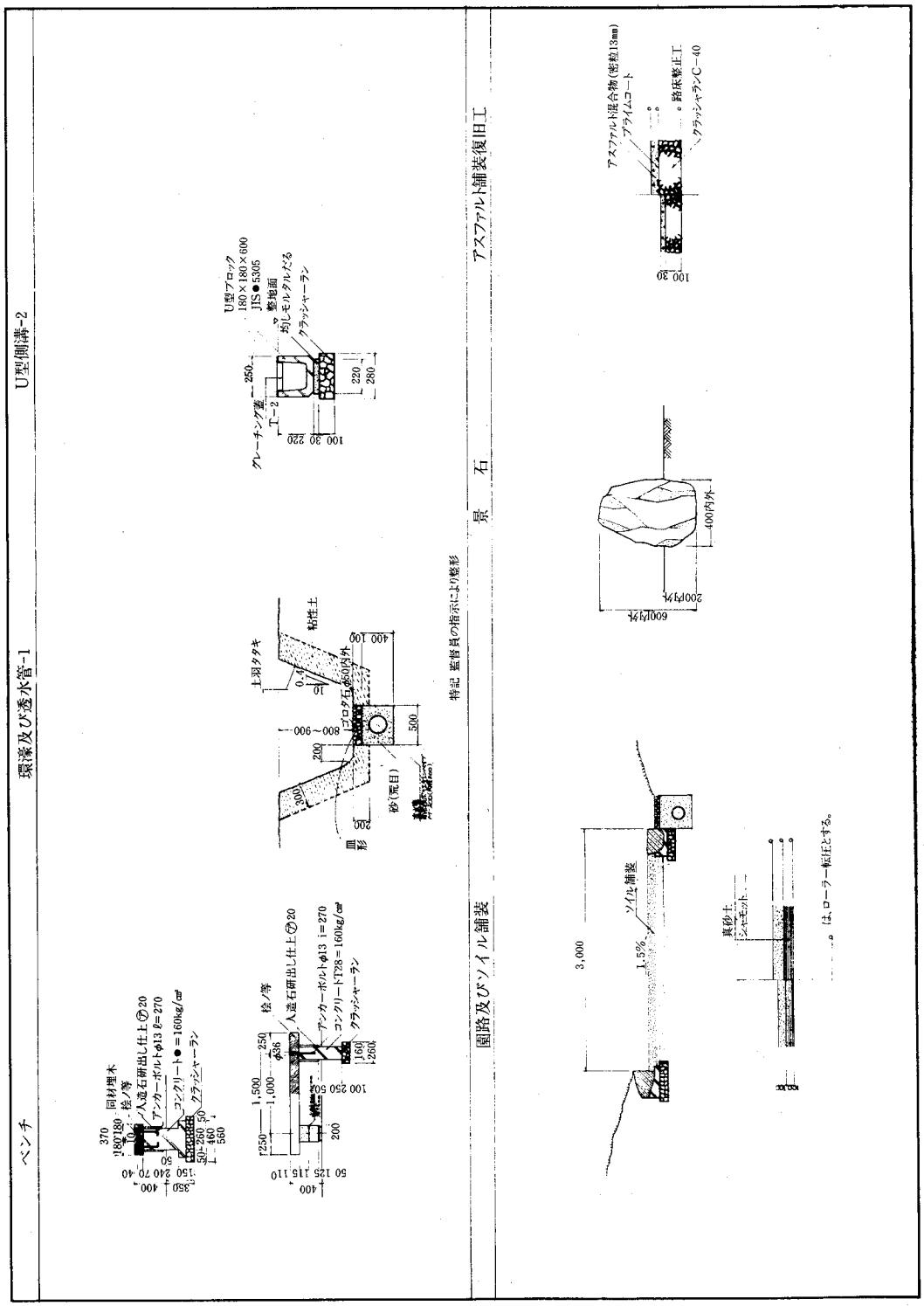
第45図　野方遺跡環境整備実施設計詳細図（縮尺約1/50）



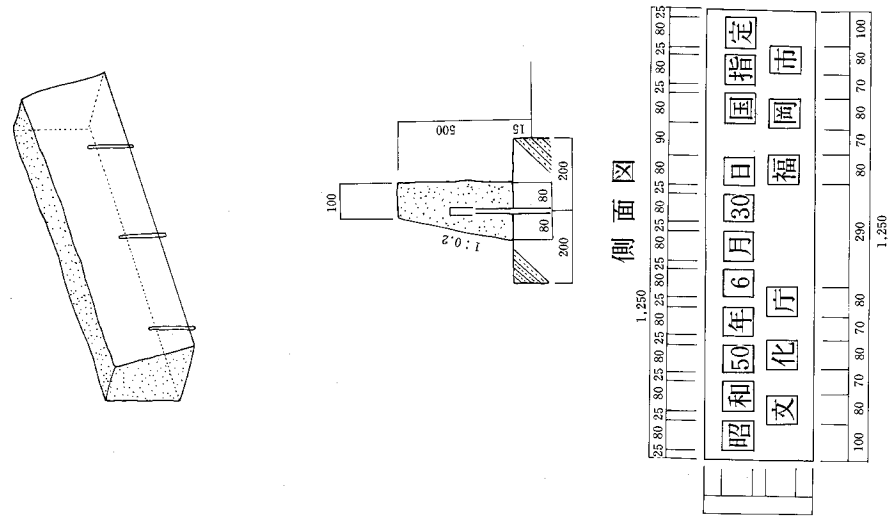
第46図　野方遺跡環境整備実施設計全域植栽配置図（縮尺約1/1,000）

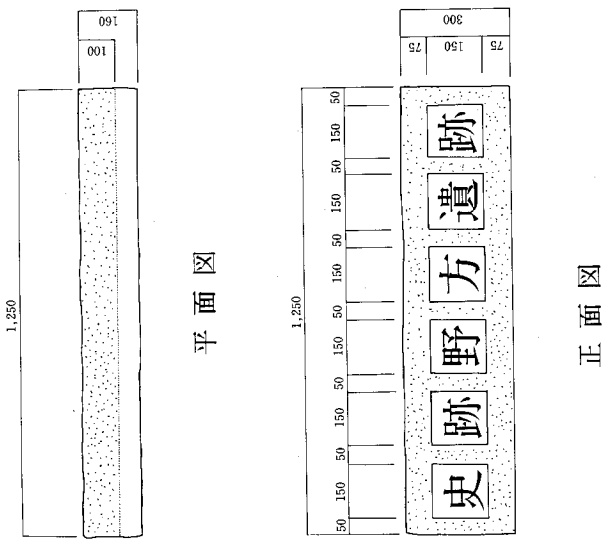


第47図　野方遺跡環境整備実施設計詳細図（縮尺約1/50）



第48図　野方遺跡環境整備実施設計詳細図（縮尺約1/50）

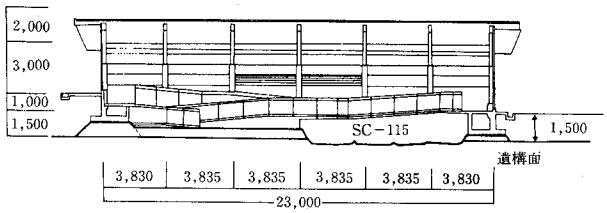




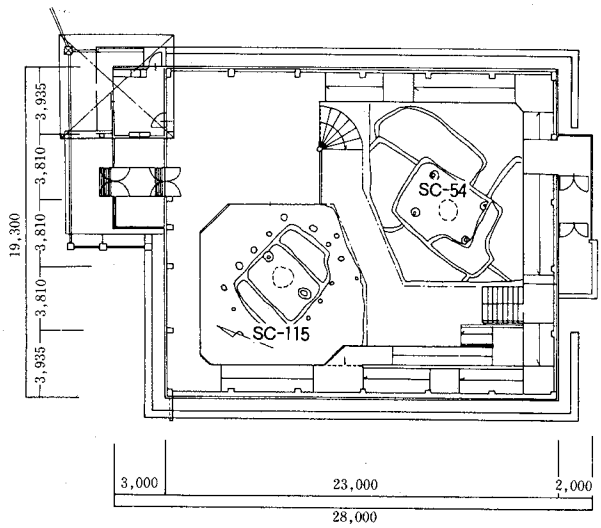
第49図　野方遺跡環境整備実施設計標石図（縮尺約1/16）

第50図　野方遺跡覆屋候補地遺構実測図（縮尺約1/40）

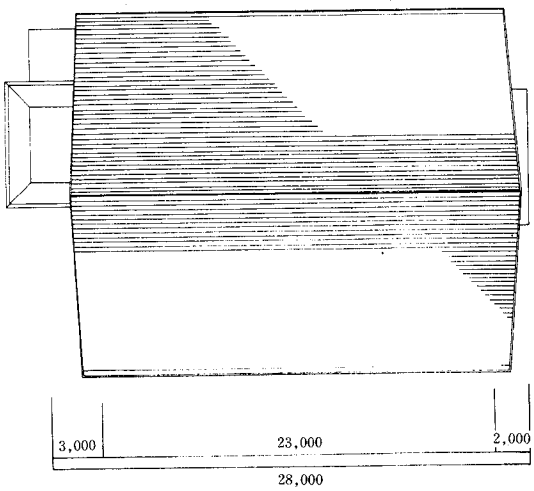
▼野方遺跡覆屋



断面図

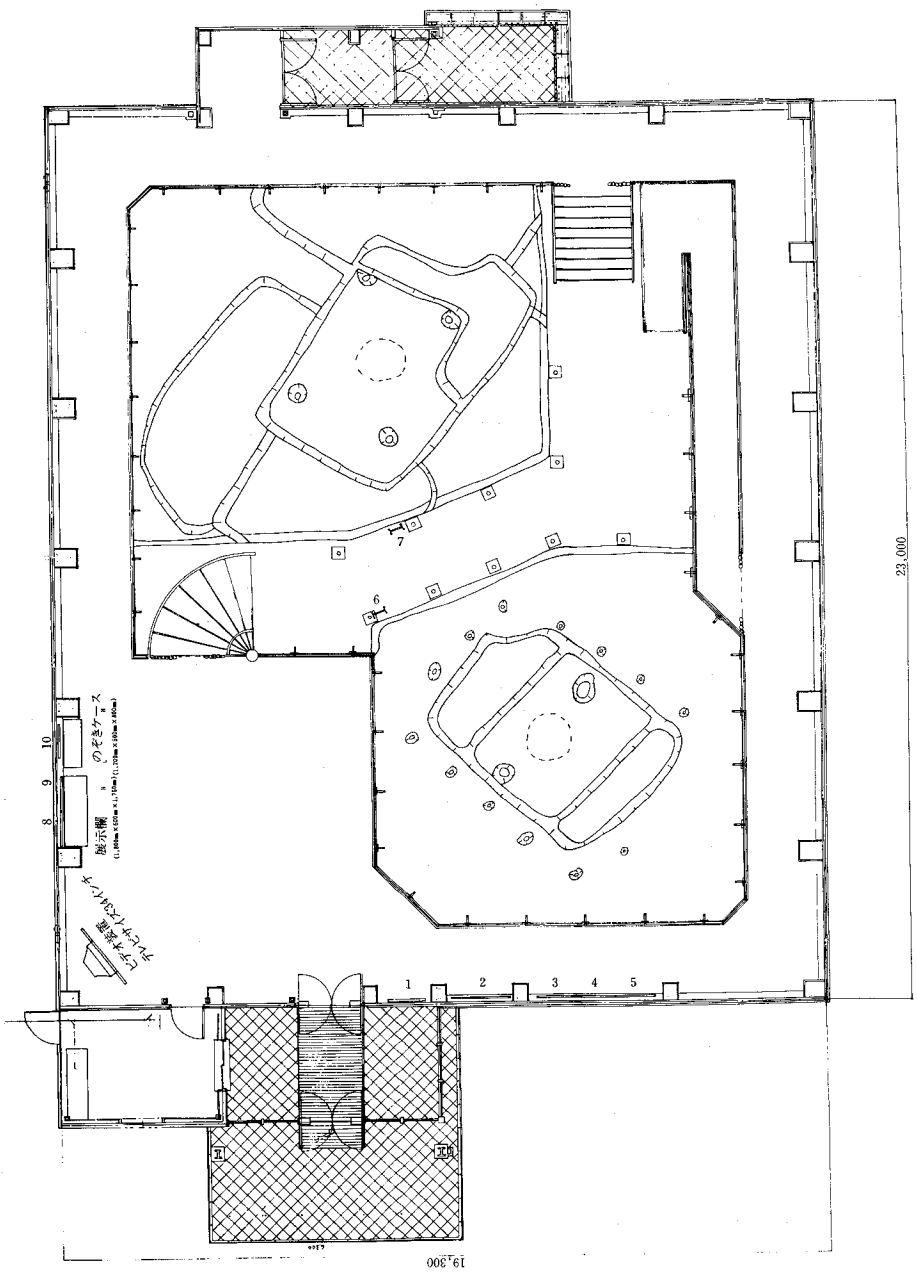


平面図



屋根伏図

第51図　野方遺跡覆屋平面図（縮尺約1/380）



1. 弥生時代・古墳時代住居址の変化
(プロローグ)(写真、図面、写植)
(900mm×900mm)

2. 弥生時代前期・中期の住居址
(写真、図面、写植文字)
(1,500mm×900mm)

3. 弥生時代後期住居址
(写真、図面、写植)
(900mm×900mm)

4. 弥生時代高床倉庫
(写真、図面、写植)
(900mm×900mm)

5. 古墳時代住居址
(写真、図面、写真)
(900mm×900mm)

6. 遺溝説明パネル
弥生時代後期住居址復元
(写真、図面、写植)
(900mm×900mm)

7. 遺構説明パネル
古墳時代住居址復元
(写真、図面、写植)
(900mm×900mm)

8. 展示ケース内パネル
弥生時代後期の土器説明
(写真、図面、写植)
(900mm×900mm)

9. 展示ケース内パネル
古墳時代の土器説明
(写真、図面、写植)
(900mm×900mm)

10. 展示品説明パネル
土器・鉄器・石器の説明
(写真、図面、写植)
(900mm×900mm)

第52図　野方遺跡覆屋展示平面図（縮尺約1/50）

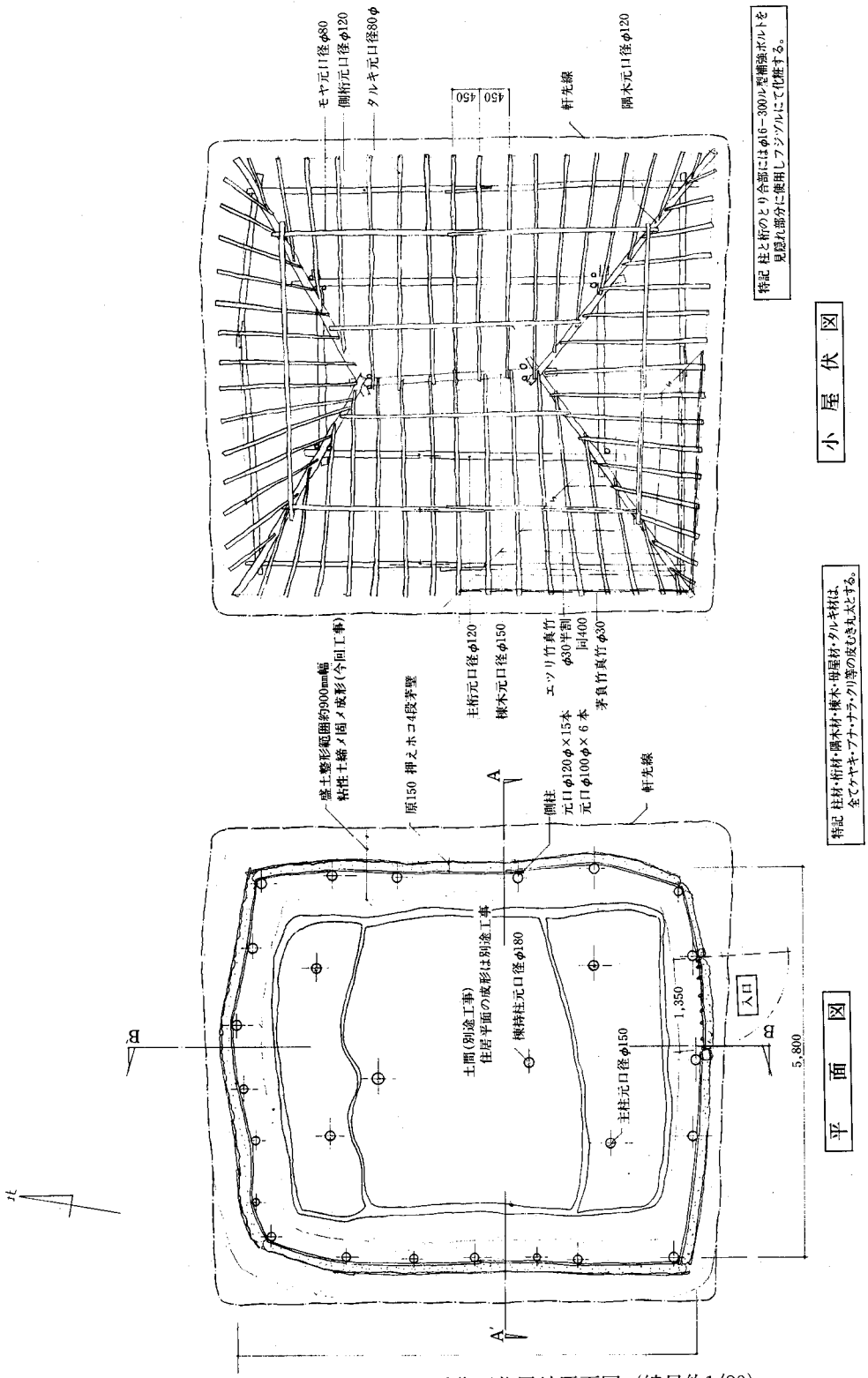
第Ⅵ章
覆屋建設について

覆屋建設については、局内の合意によって住居址に覆屋をかけ、本物の遺構を見学者に見せる必要性があること、覆屋の外で平面表示（実際の遺構の上面に約1.5ｍの盛土を行ない、実際に遺構の形を上に復原する）と復原住居、骨組住居を一つの流れとして見学できること等をテーマとした。

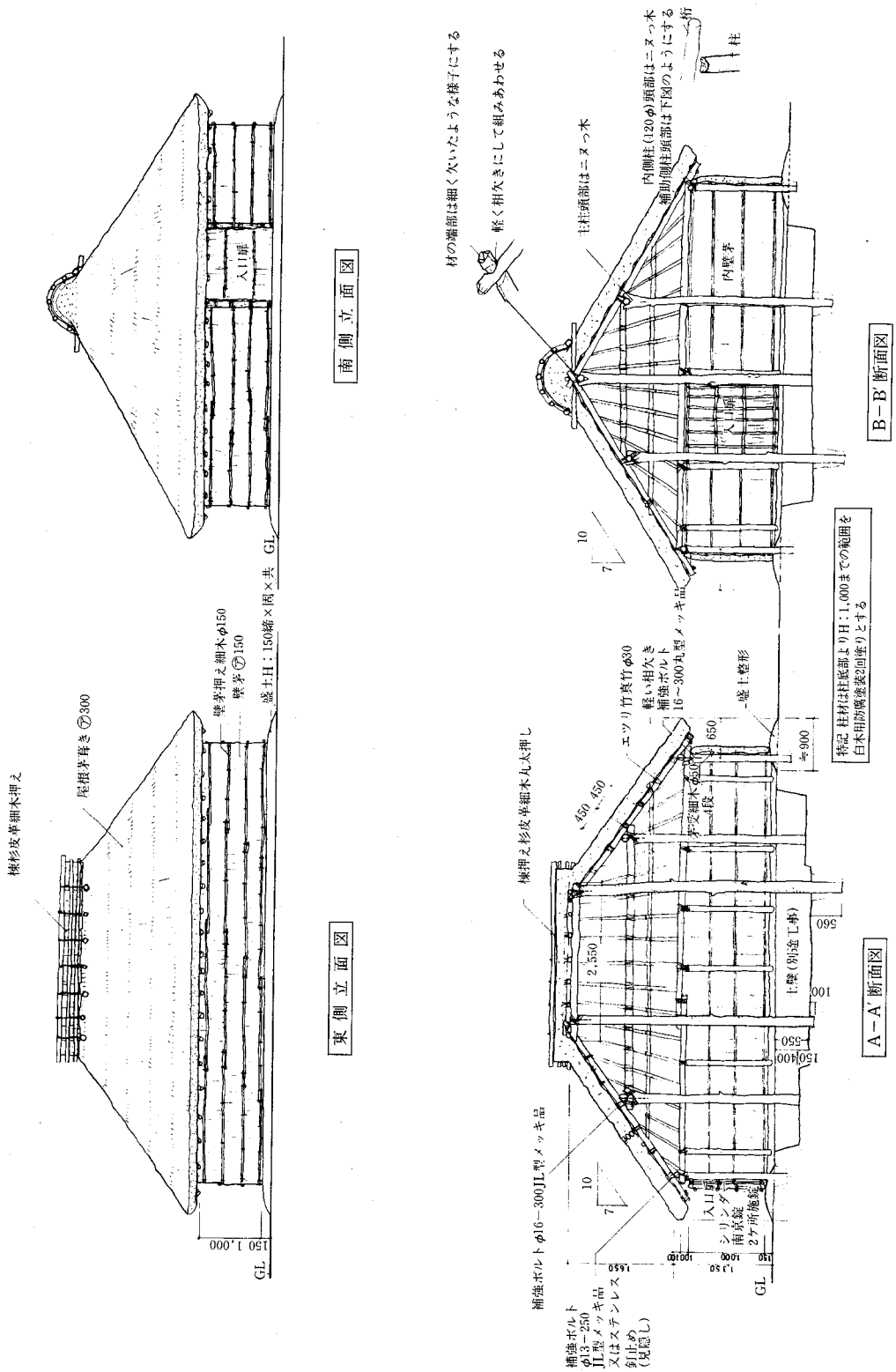
覆屋の中の住居址は、弥生時代後期の住居址と古墳時代の住居址等が一ヶ所で見学できること、住居址の切り合い関係が説明できること、出土遺物が多量にあること等を目的として調査を行なった。第１の候補地として第50図に示した地区を上げ、文化庁に申請をお願いしたが東側道路部分に近いこと等から第２次候補地のＳＣ－115と54、55、56の住宅址に覆屋をかけることとした。ただ近代的な建物を建設することで、なるべく低い建物とすることを条件として文化庁より承諾をいただいた。

復原住居

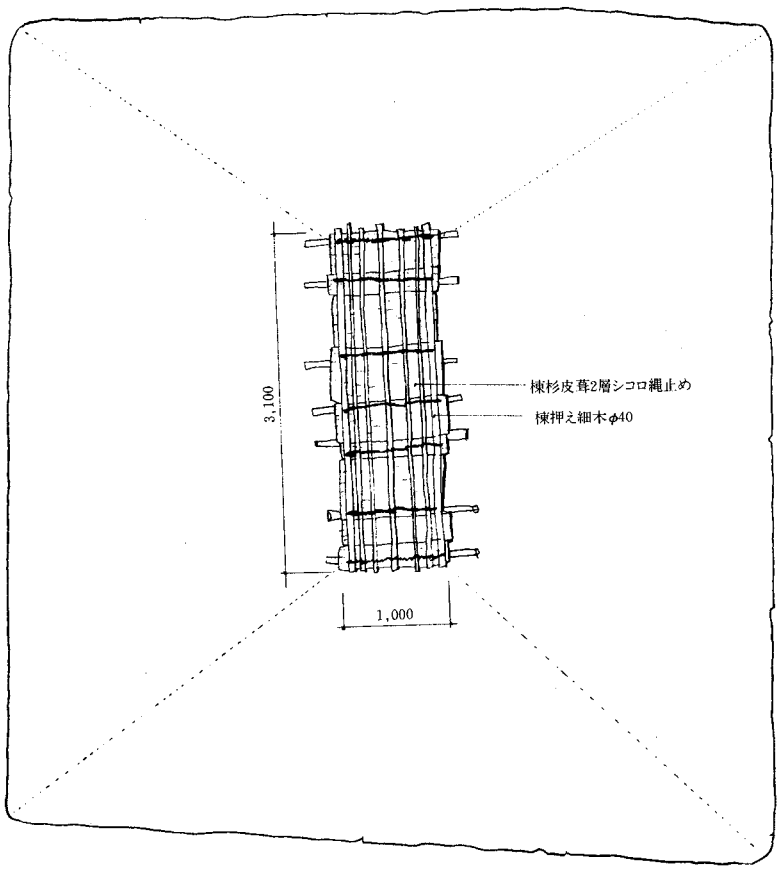
住居址の流れ、（本物の遺構から平面表示住居、骨組住居、復原住居）を一つのテーマとした。住居址の形態を十分に検討した結果、従来の竪穴式住居址とは異なる形状となった。これは住居址外縁に小柱穴が巡り、壁面が存在することが明らかとなったためである。



第53図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址平面図（縮尺約1/80）

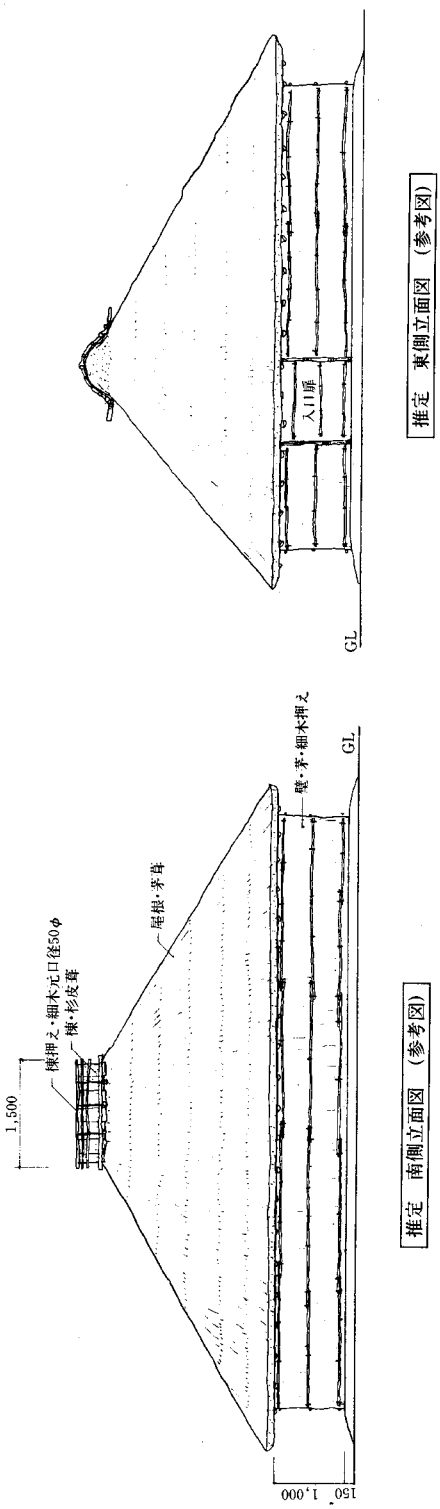


第54図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址平面図（縮尺約1/80）

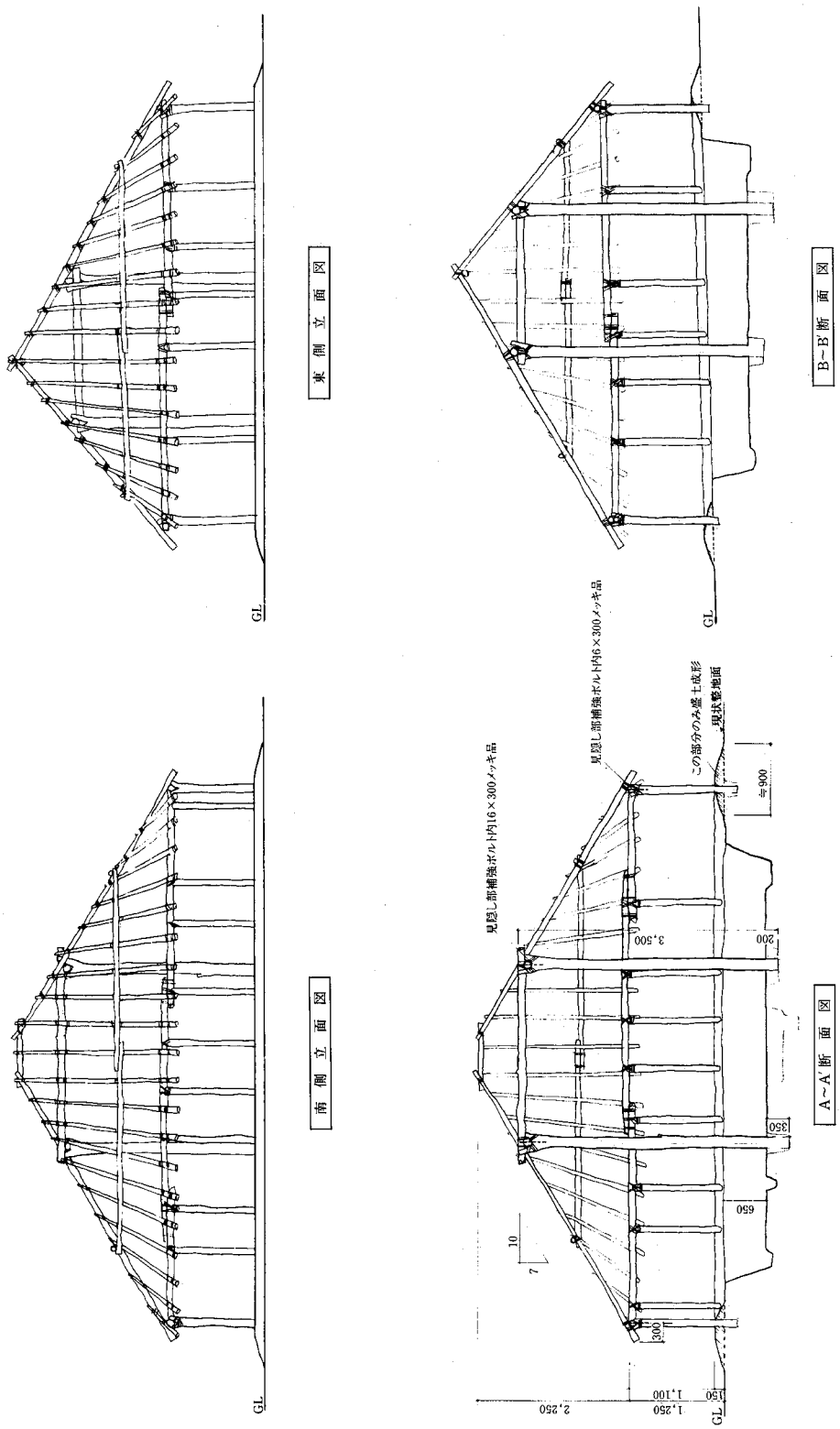


屋 根 伏 図

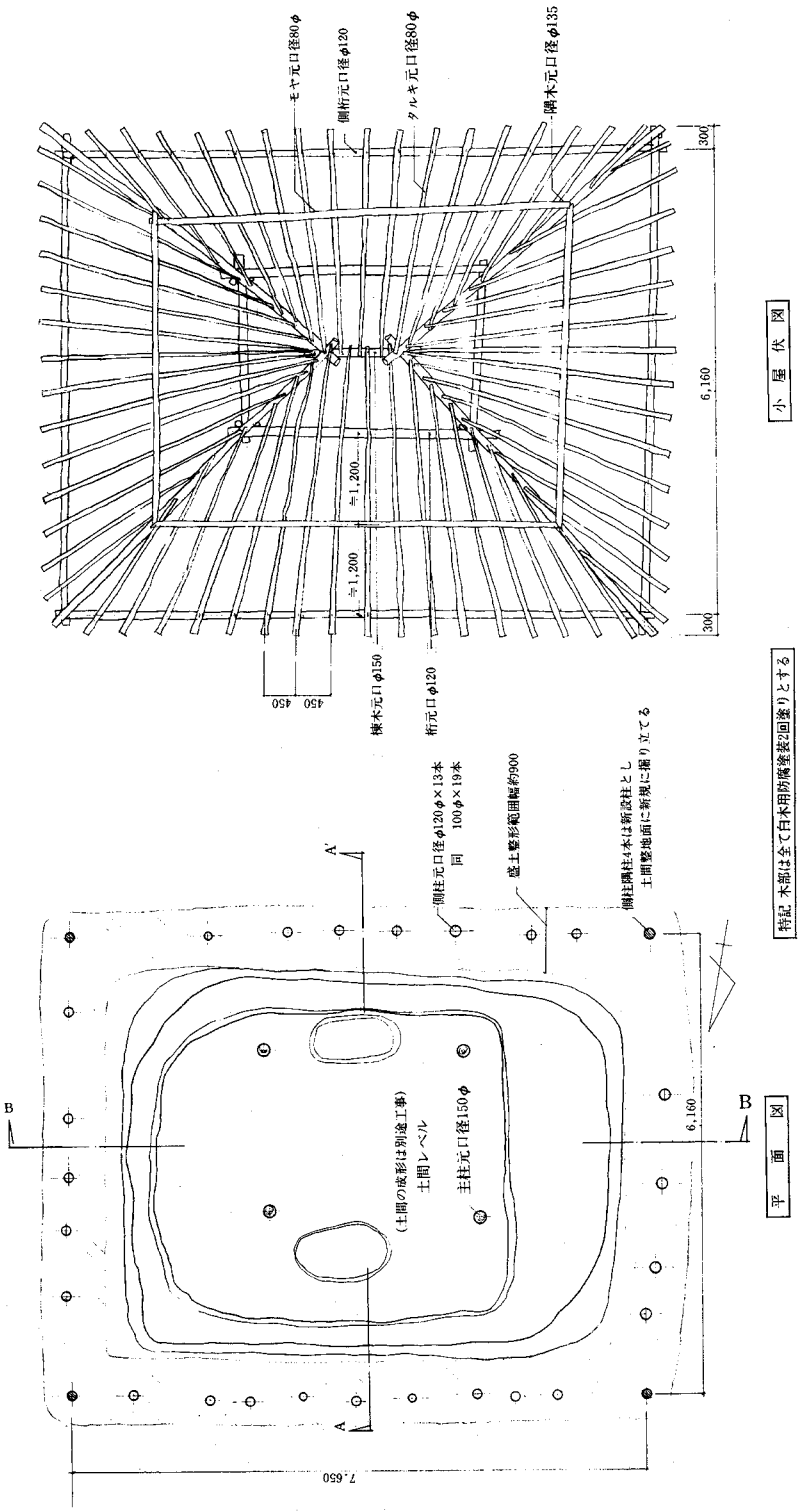
第55図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址屋根伏図（縮尺約1/80）



第56図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址立面図（縮尺約1/80）



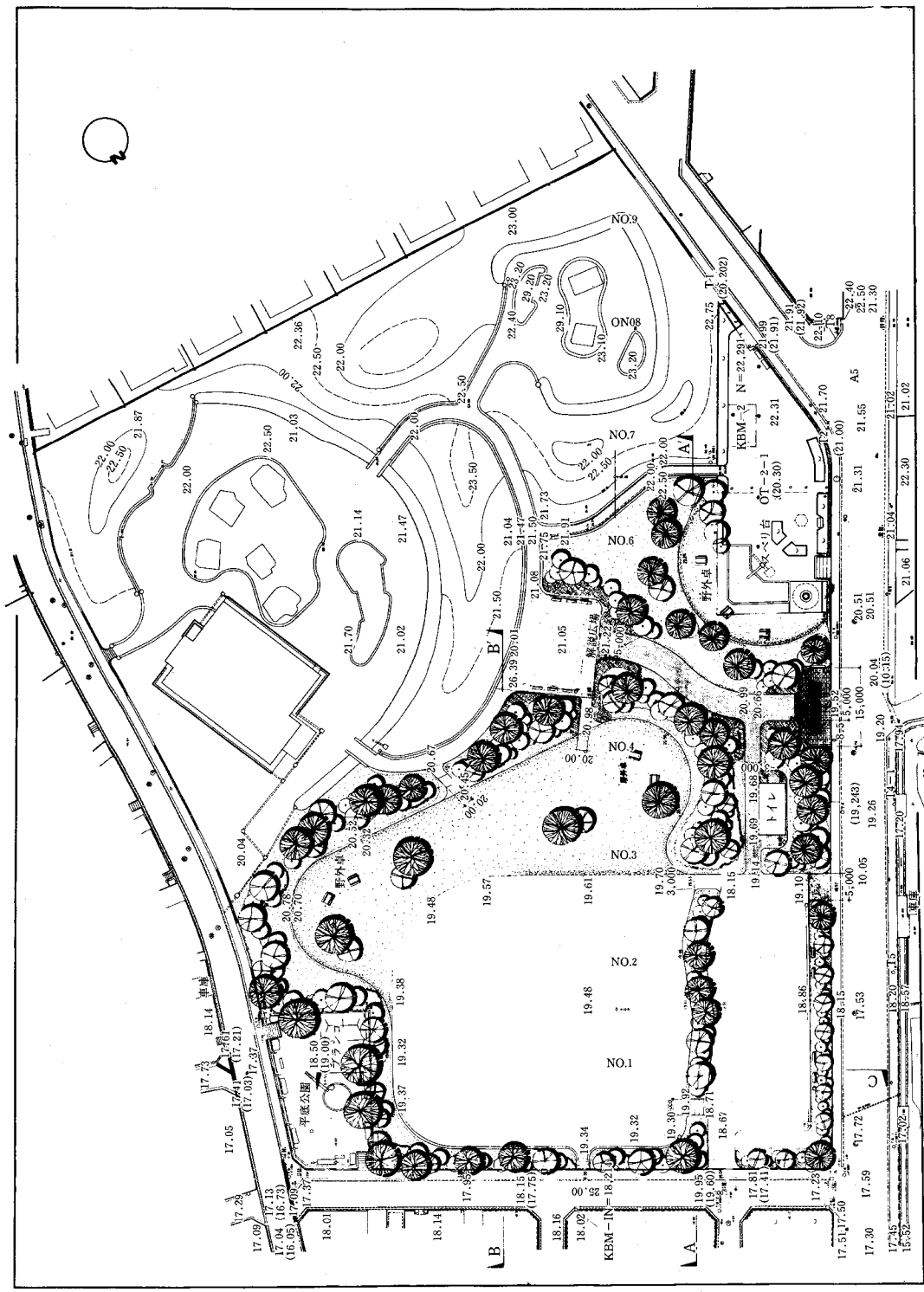
第57図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址立面図（縮尺約1/80）



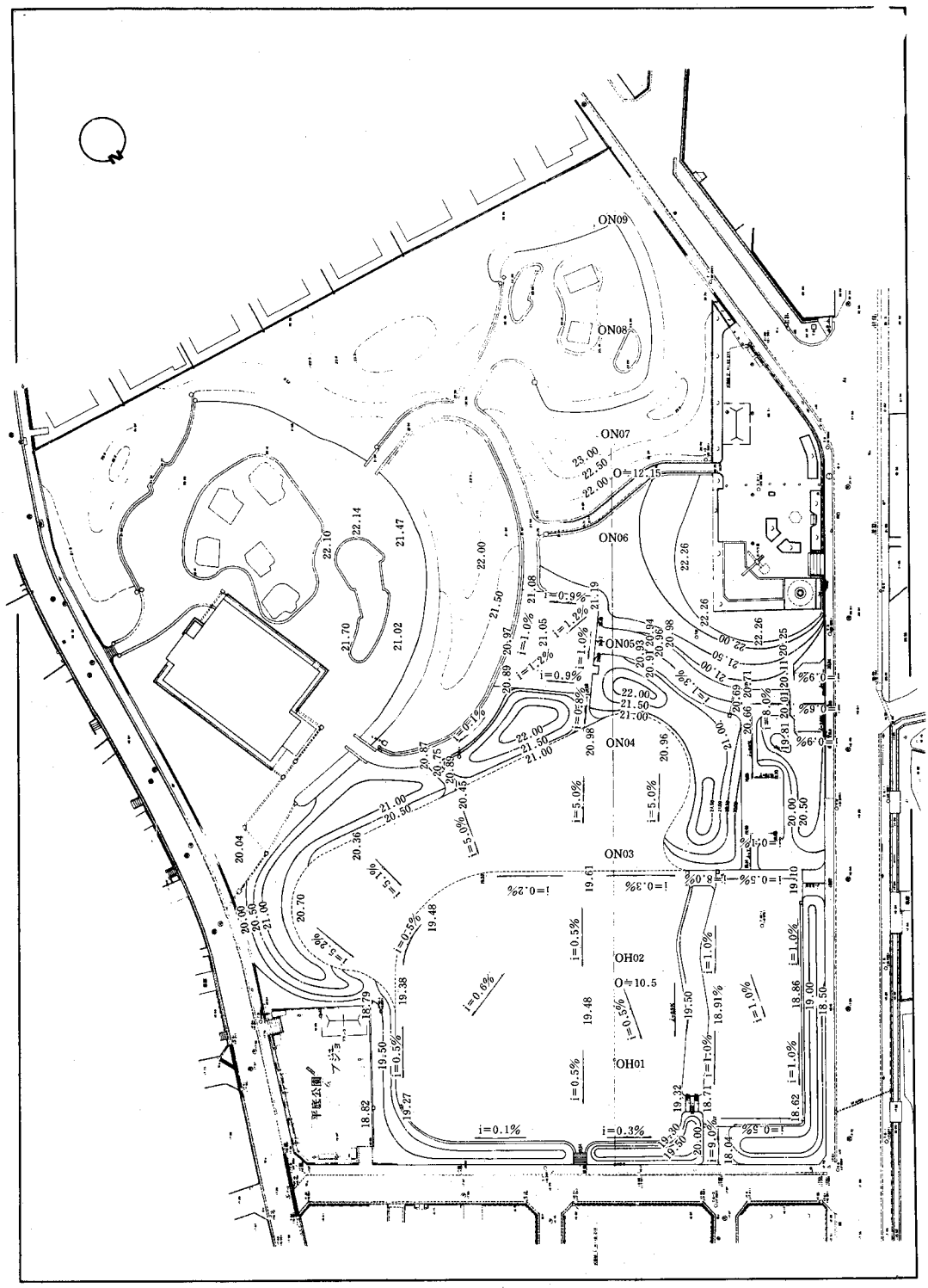
第58図　野方遺跡環境整備実施設計復原住居址平面・小屋伏図（縮尺約1/80）

第Ⅶ章
都市整備局の環境整備

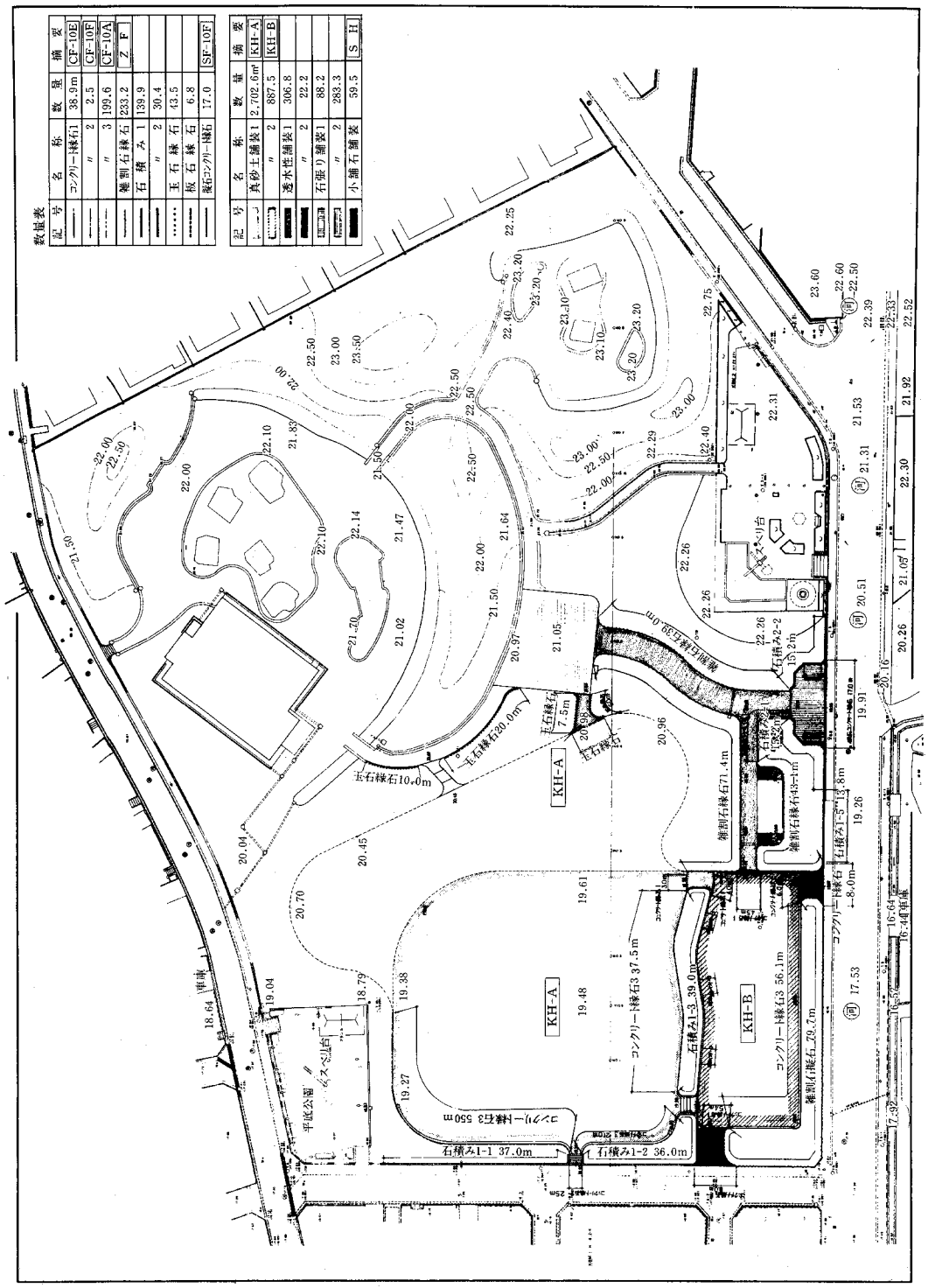
平成元年度に福岡市都市整備局公園建設課と協議を行ない、野方遺跡の整備面積18,711㎡の内9,500㎡を整備依頼した。全域を都市公園として位置付け、平成２年度から３年度の２ヶ年で建設省の国庫補助事業として実施した。



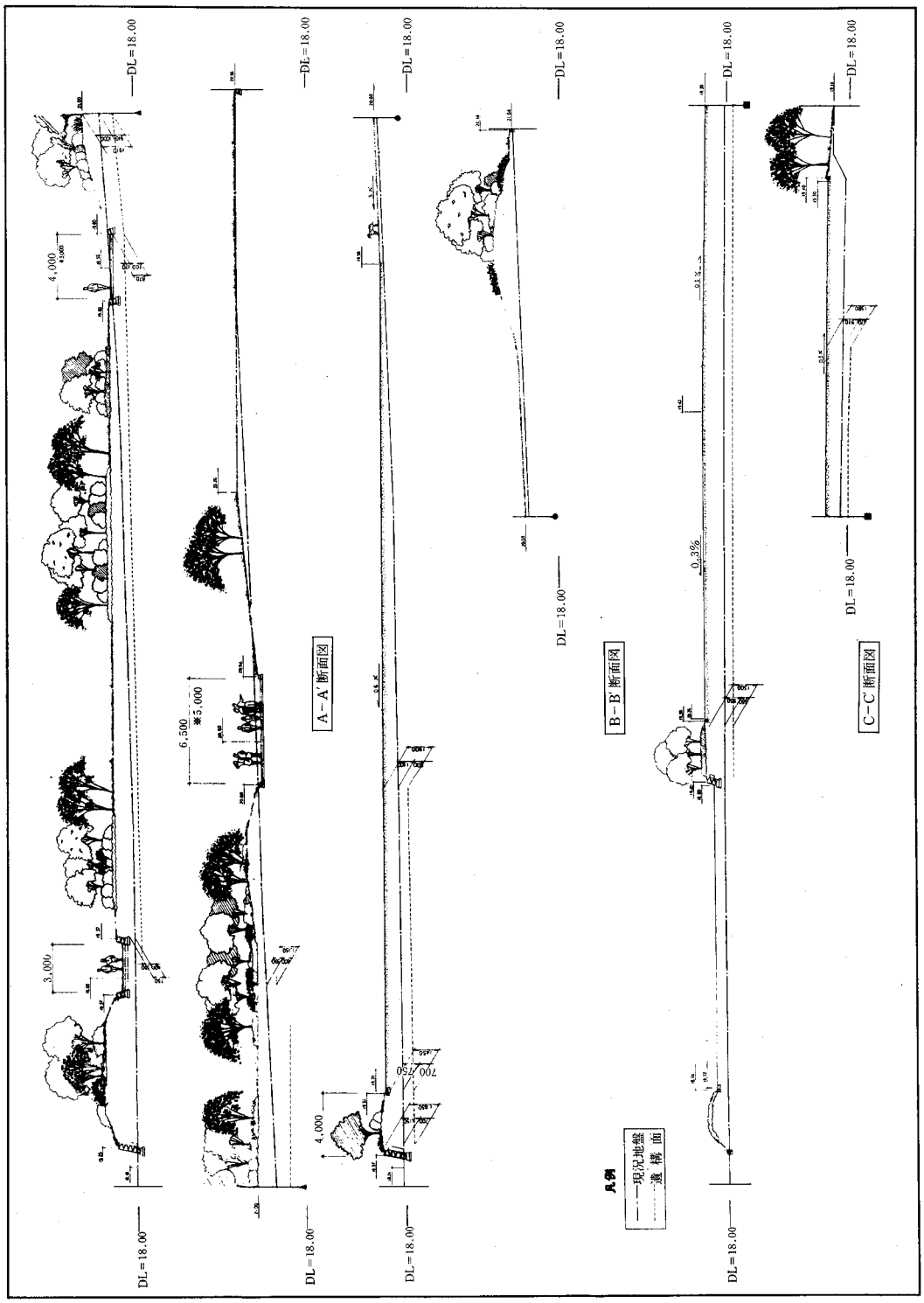
第59図　都市整備局環境整備実施設計平面図（縮尺約1/1,000）



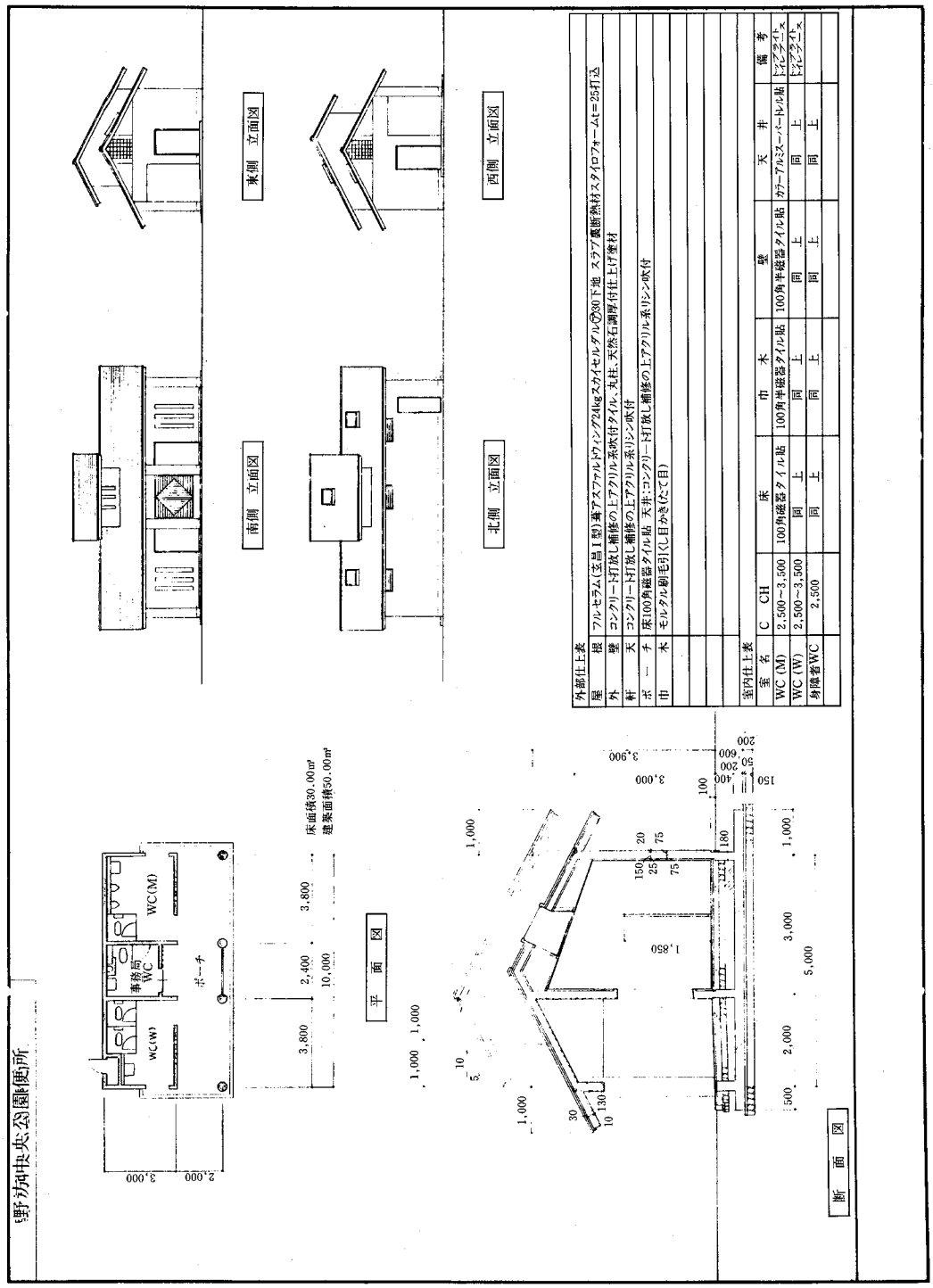
第60図　都市整備局環境整備実施設計造成図（縮尺約1/1,000）



第61図　都市整備局環境整備実施設計施設配置図（縮尺約1/1,000）



第62図　都市整備局環境整備実施設計断面図（縮尺約1/1,000）



第63図　都市整備局実施設計便所平面図立面図（縮尺約1/200、1/300）

図　　版

1　環境整備完成写真(南西から)

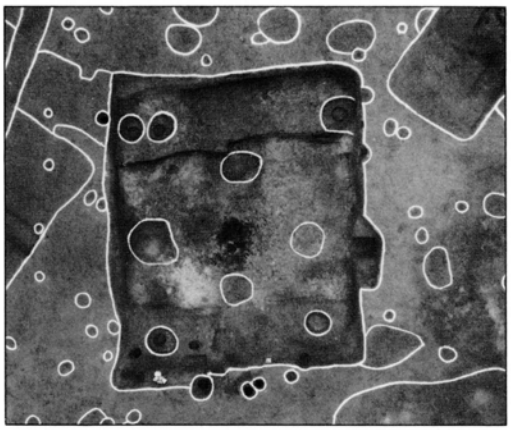
2　復原住居(南西から)

3　遺跡全景空中写真(西から)

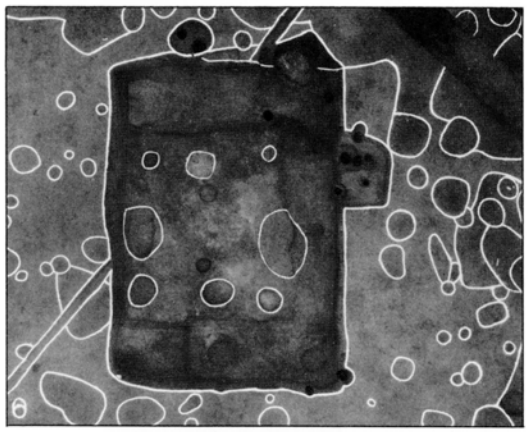
4　A区全景(西から)

5　B区全景(西から)

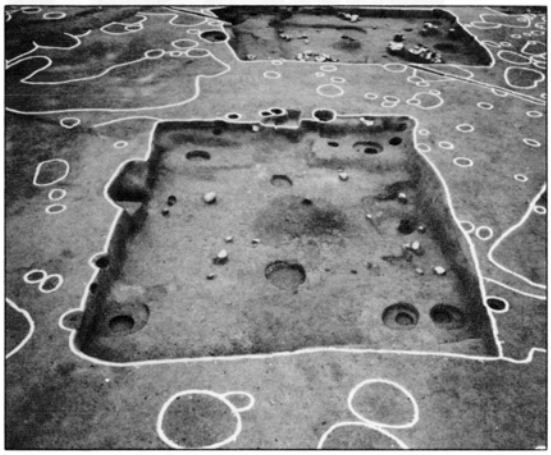
6　A区住居址(南から)



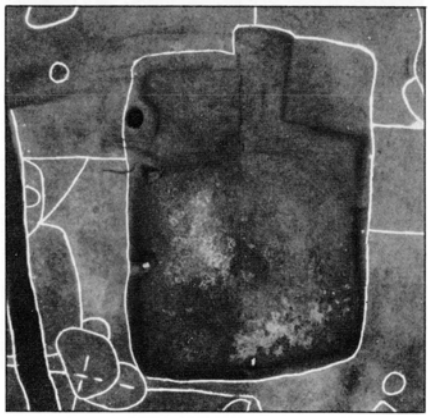
1　ＳＣ-18近景(南から)



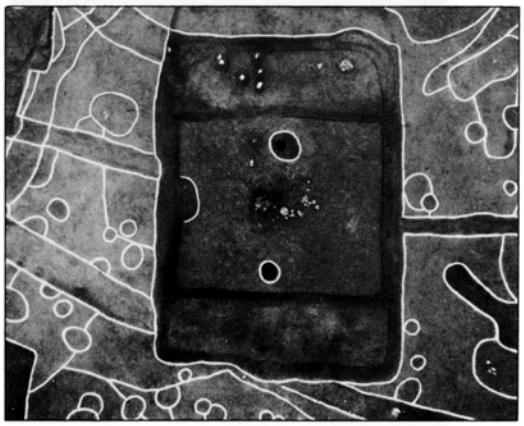
2　ＳＣ-23近景(東から)



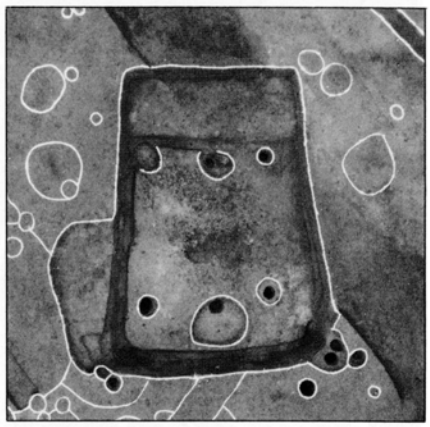
3　ＳＣ-21近景(南から)



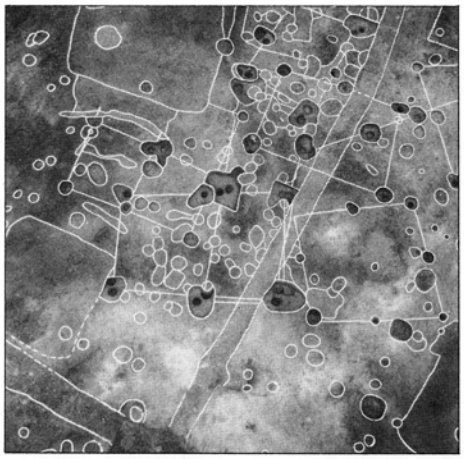
4　ＳＣ-86近景(南から)



5　ＳＣ-79近景(南から)

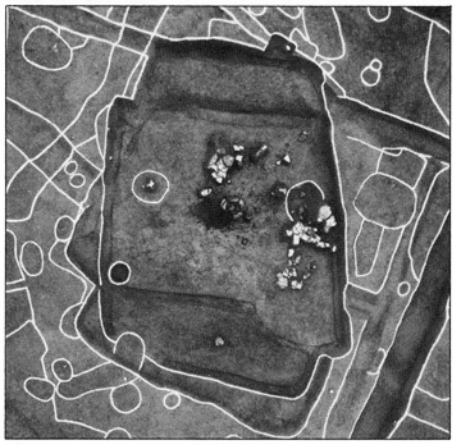


6　ＳＣ-103近景(南から)

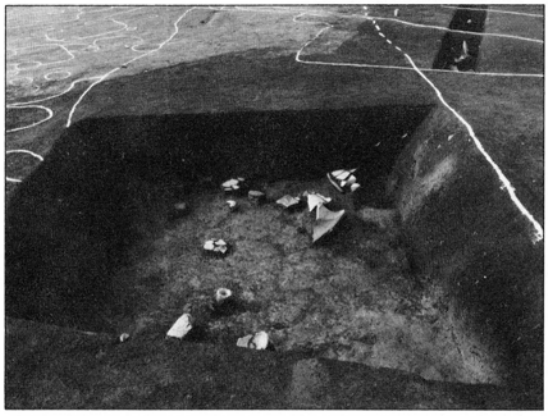


1　B区堀立柱建物ＳＢ-02、06近景(南から)

2　B区溝断面(南から)



3　ＳＣ-115近景(南から)

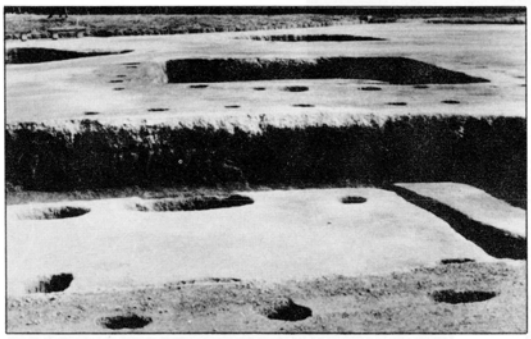


4　A区溝断面(南から)

5　ＳＣ-115炉跡と遺物出土状態(北から)

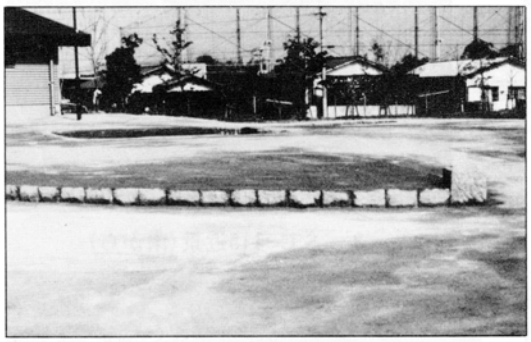
1　環境整備植栽工事(東から)

2　環境整備環濠・木橋工事(北から)

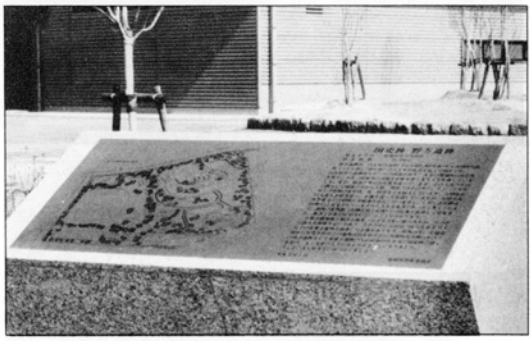


3　平面表示住居址(北から)

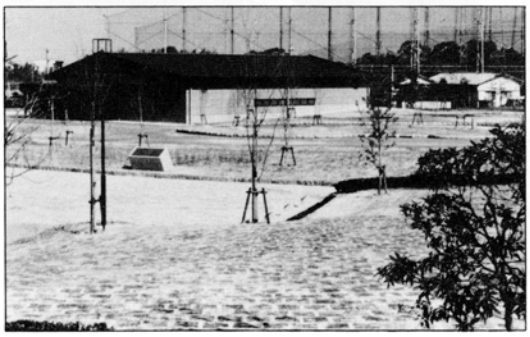
4　環境整備植栽・張芝工事(西から)



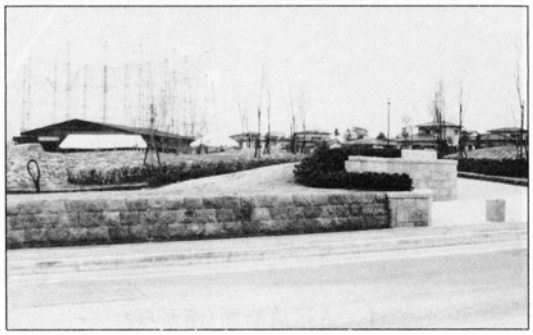
5　環境整備園路広場工(西から)



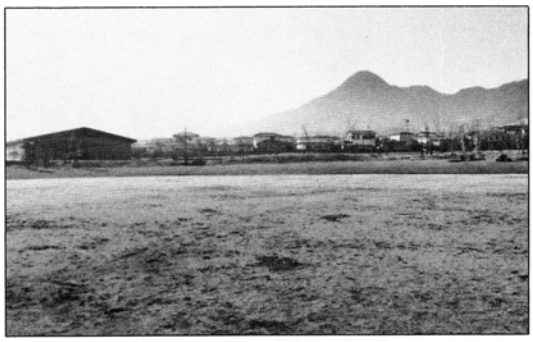
6　総合説明板(北から)



7　環境整備修景工(北から)

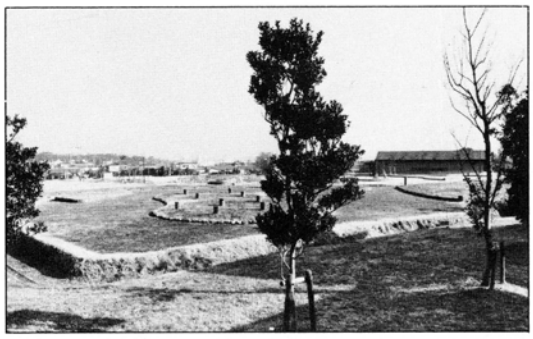


8　環境整備導入部分工事(西から)

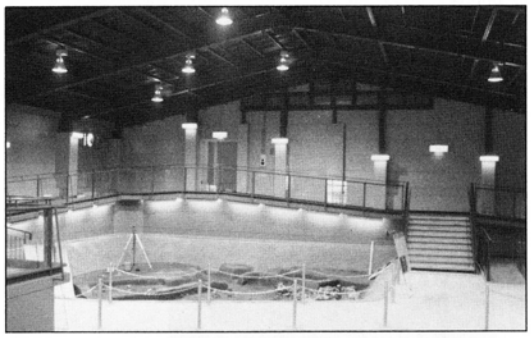


1　環境整備工事全景(北から)

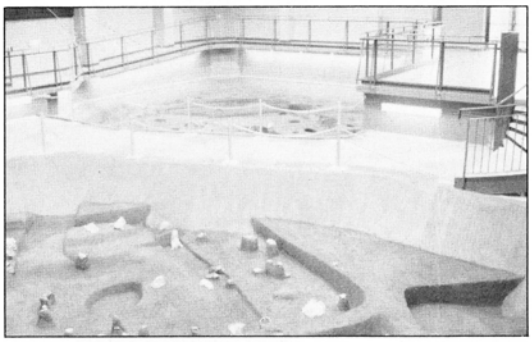
2　環境整備工事近景(西から)



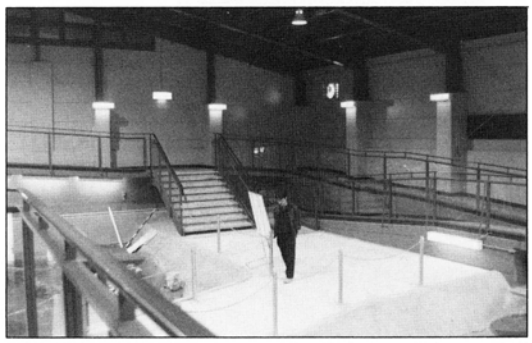
3　環境整備工事全景(南西から)



4　覆屋全景(北から)



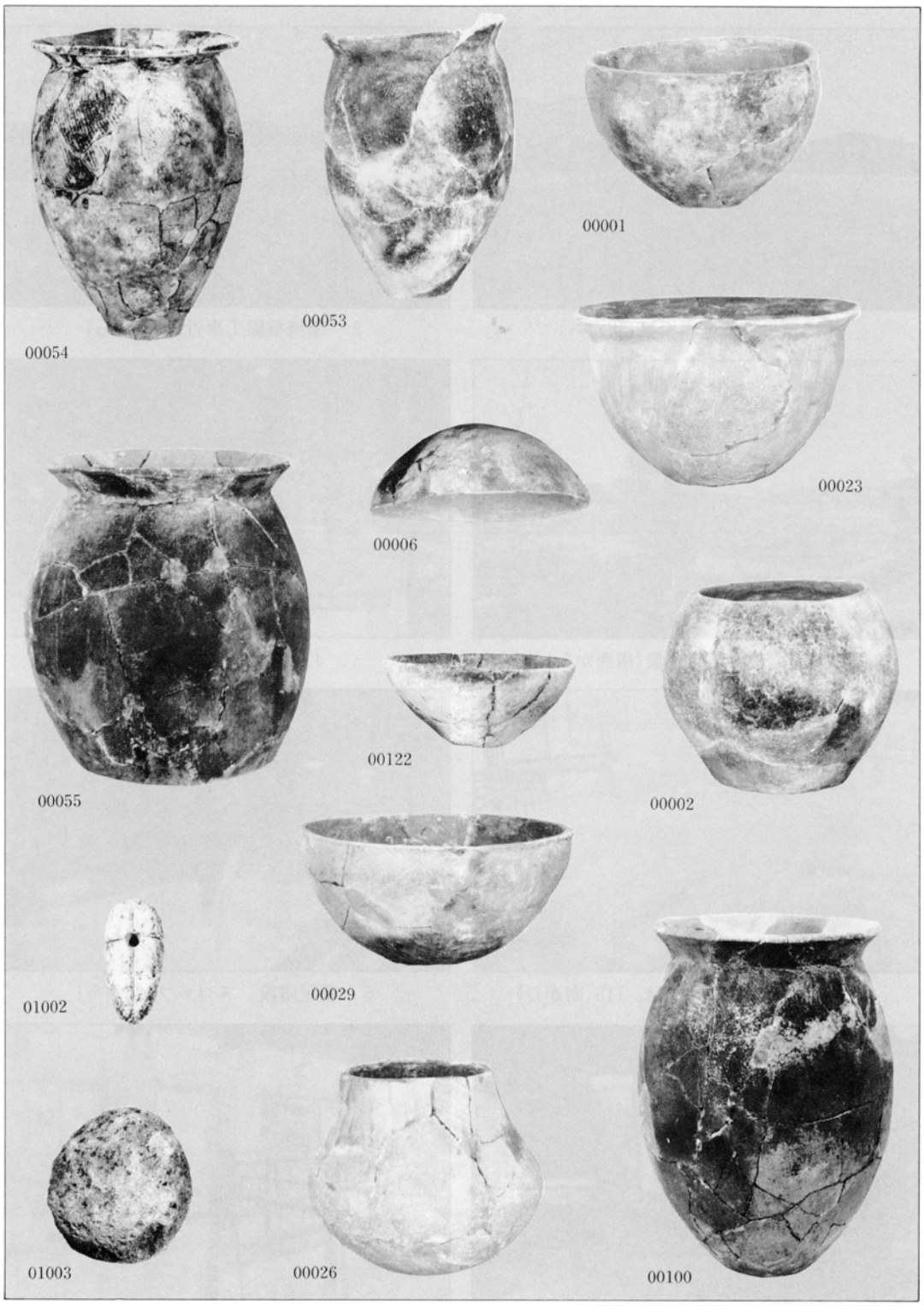
5　覆屋内住居址ＳＣ-54、115(南から)



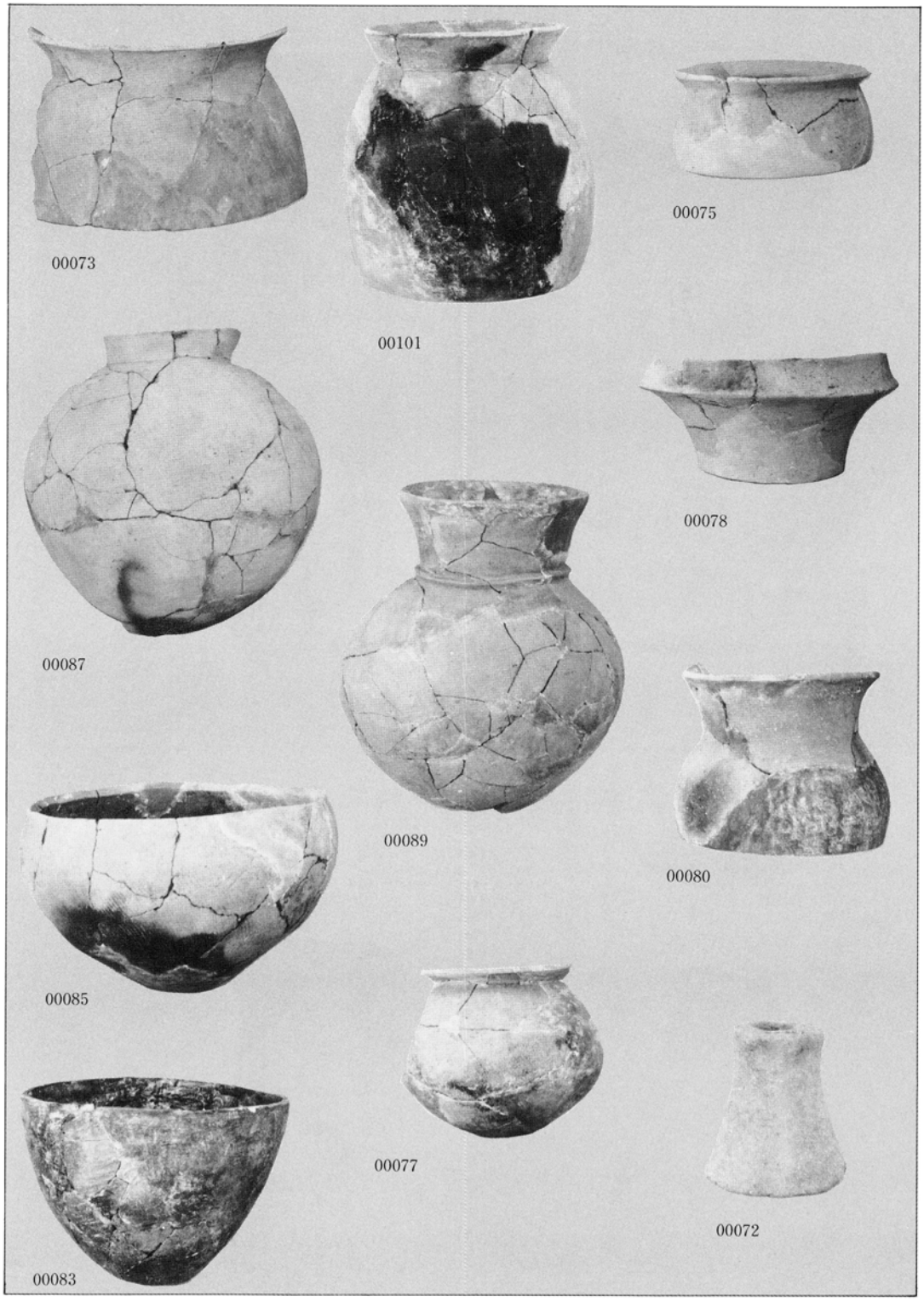
6　覆屋階段，スロープ(北から)

7　遺物展示とビデオ説明(西から)

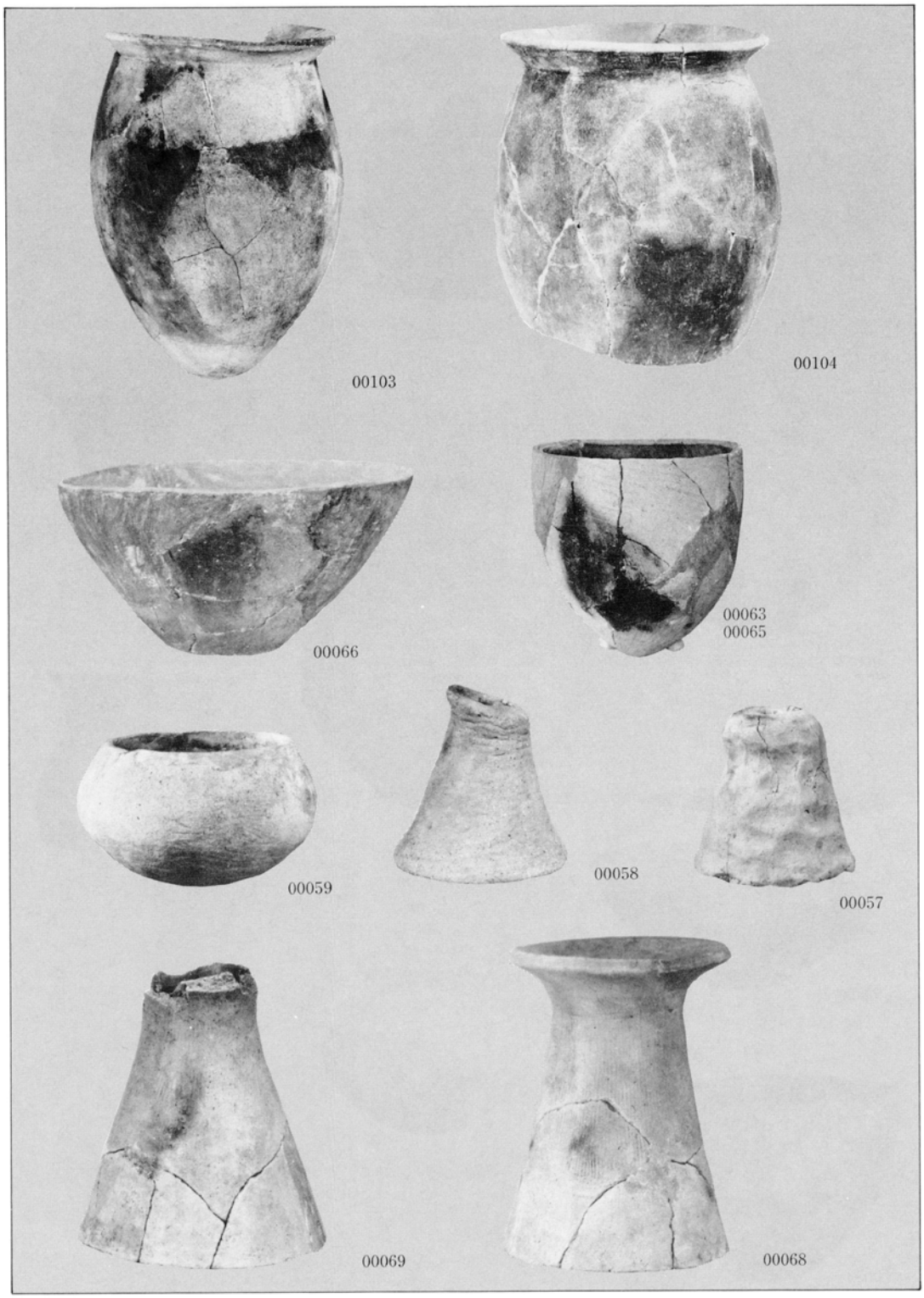
8　展示パネル(南東から)



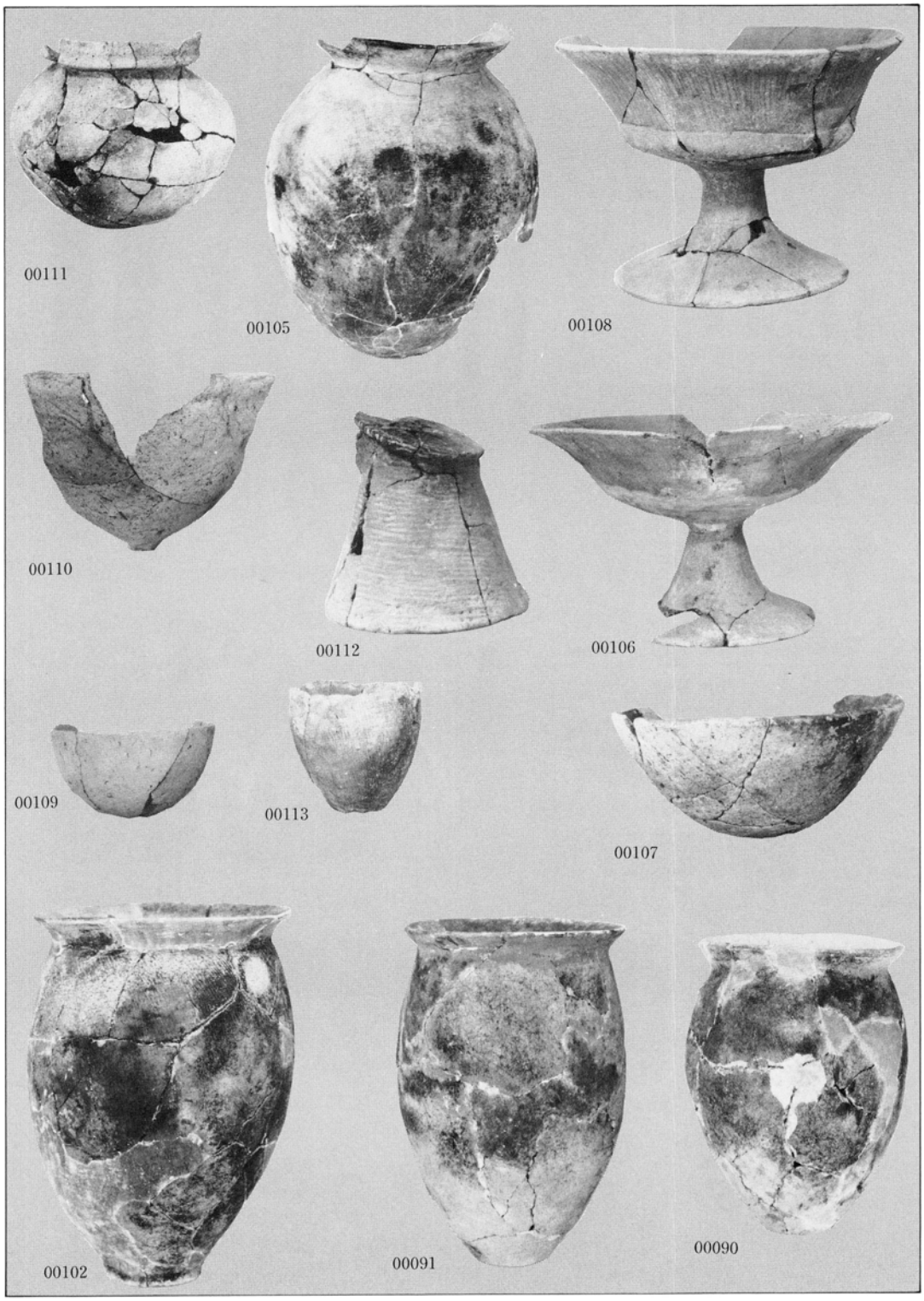
弥生時代後期住居址内出土遺物(縮尺1/3, 1/6)



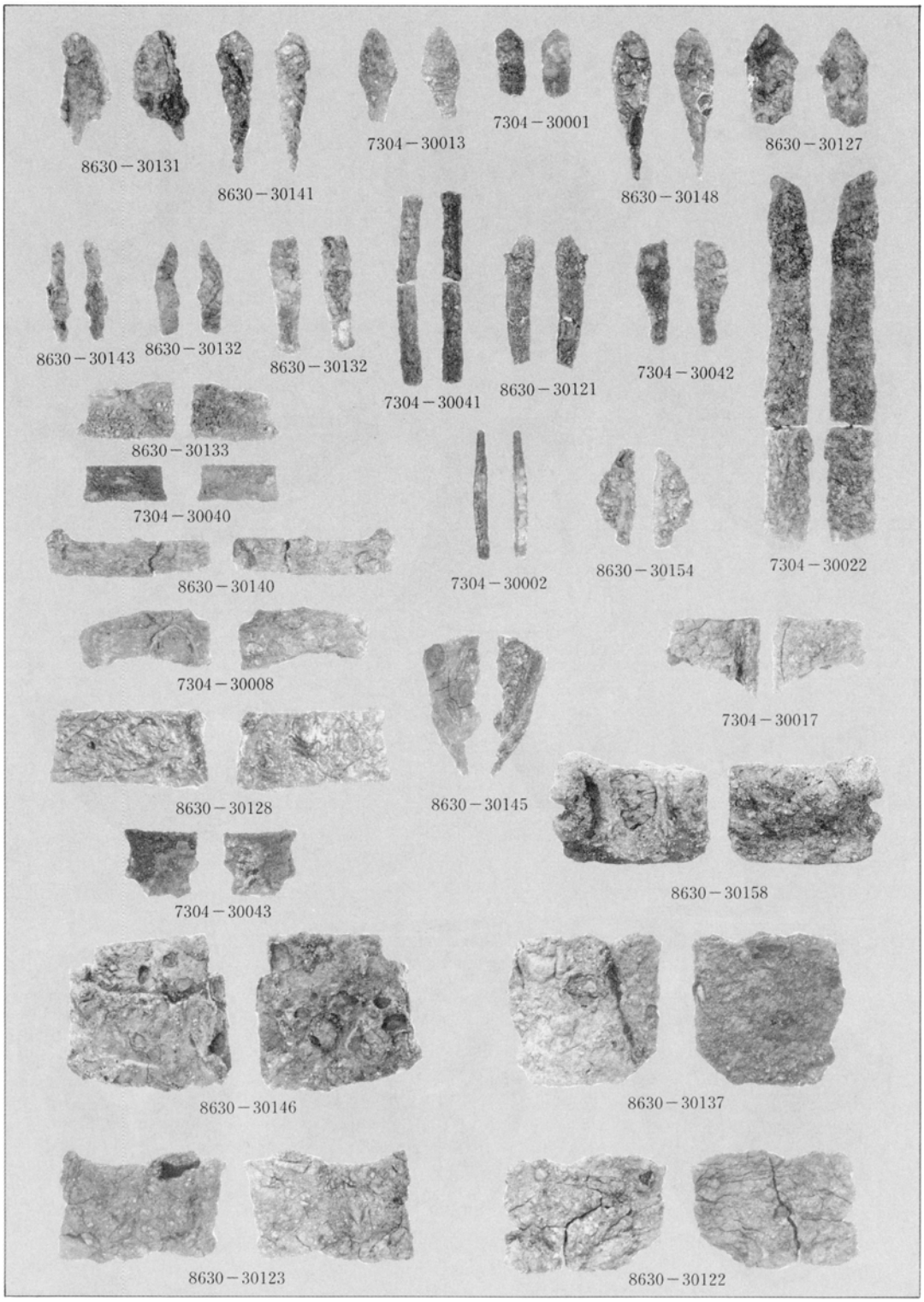
弥生時代後期住居址内出土遺物(縮尺1/3，1/6)



弥生時代後期住居址内出土遺物(縮尺1/3，1/6)



弥生時代後期住居址内出土遺物(縮尺1/3，1/6)



野方遺跡出土鉄器(縮尺1/3，1/6)

福　岡　市　西　区

国史跡

野方遺跡

環境整備報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第313集
発行　福岡市教育委員会
平成4年3月13日
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷　福岡印刷株式会社